

語用論研究

Studies in Pragmatics

2016
第 18 号

研究論文

空間から談話へ：前置詞の談話指示用法に関する認知言語学的考察
堀内ふみ野1

共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択
平田 未季 28

研究ノート

学習者コーパスによる中間言語語用論分析：UAM CorpusTool Version 3.2
を用いた要求の発話行為のケーススタディ 三浦 愛香 48

特別寄稿

Pragmatics, Cognition, and Language in Action N. J. Enfield 60

会長就任講演

文脈の科学としての語用論
—演繹的文脈と線条性— 加藤 重広 78

書評論文

定延利之『コミュニケーションへの言語的接近』 滝浦 真人 102

その他

日本語用論学会規約 113
『語用論研究』投稿規定・スタイルシート 改訂版 117

日本語用論学会役員

(2017年2月28日現在)

[海外特別顧問] Malcolm Coulthard, Laurence Horn, Jacob Mey, Jef Verschueren,
Deirdre Wilson

[理事] (50音順)

久保進, 澤田治美 (元会長), 西光義弘, 林宅男 (前会長), 林礼子, 東森勲,
山梨正明 (元会長)

[運営委員] [50音順]

有光奈美, 井手里咲子, 井上逸兵, 岡本雅史, 尾谷昌則, 小野寺典子, 加藤重広, 金丸敏幸,
M. Campana, 北野浩章, 久保進, 小山哲春, 澤田治美, 首藤佐智子, 鈴木光代, 高木佐知子,
滝浦真人, 田中廣明, 長友俊一郎, 名嶋義直, 鍋島弘治朗, 西田光一, 西光義弘, 野澤元,
林宅男, 林礼子, 東森勲, 堀江薫, 堀田秀吾, 松井智子, 森山卓郎, 森山由紀子, 森雄一,
山岡政紀, 山梨正明, 山本英一, 吉村あき子

[執行部]

会長: 加藤重広

副会長: 山本英一

事務局長: 小山哲春

事務局会計担当: 長友俊一郎

[編集部]

編集委員長: 滝浦真人

編集委員: 小野寺典子, Mark Campana, 首藤佐智子, 田中廣明, 名嶋義直, 松井智子,
森雄一

[大会運営部]

大会運営委員長: 鍋島弘治朗

大会運営副委員長: (企画) 北野浩章, 堀江薫; (発表) 岡本雅史, 金丸敏幸, 野澤元;
(実行) 井上逸兵; (プロシーディングス) 首藤佐智子

大会運営委員: (企画) 井出里咲子, 滝浦真人, 吉村あき子; (発表) 有光奈美, 尾谷昌則,
名嶋義直; (実行) 鈴木光代, 高木佐知子, 堀田秀吾;
(プロシーディングス) 井出里咲子, 森山卓郎, 森山由紀子

[国際・事業部]

国際・事業委員長: 西田光一

国際・事業副委員長: 小野寺典子

国際・事業委員: 鍋島弘治郎, 野澤元, 松井智子, 吉村あき子

[広報部]

広報委員長: 山岡 政紀

広報副委員長: (ウェブサイト) 尾谷昌則, (ニューズレター) 鈴木光代, 堀田秀吾

広報委員: 金丸敏幸, Mark Campana

空間から談話へ：前置詞の談話指示用法に関する 認知言語学的考察*

堀内 ふみ野

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会

This study examines the discourse-deictic usage of the prepositions *above* and *below*, as in e.g. “as mentioned *above*” and “see *below*”, based on the *British National Corpus*. In it, we demonstrate that these expressions tend to appear in different syntactic patterns/modify different types of words, and their differences reflect the typical structure of written text—i.e. between the preceding and subsequent discourse. The paper then analyzes *above* and *below* from the viewpoint of metaphor, illustrating that the characteristics of the target domain (in this case, discourse) play an important role in determining their distribution.

キーワード： 談話指示、*above/below*、認知言語学、コーパス、メタファー、意味拡張

1. はじめに

英語前置詞の意味については、認知言語学の立場から多くの研究がなされてきた (e.g. Brugman 1981; Lakoff 1987; Dewell 1994; Boers 1996; Tyler and Evans 2003)。これらの研究では、前置詞の意味が物理空間における位置や経路を表す意味から抽象的意味へ拡張するプロセスが注目され、意味間の関連性や拡張の動機づけが示されてきた。

above と *below* も他の多くの前置詞と同様に多義的であり、物理空間における上下を表す用法に加えて、談話 (written discourse) における前方・後方を指す用法 (以下、談

* 本稿の執筆に際し、査読してくださった3名の先生方から数多くの貴重なコメントと建設的なご指摘を頂いた。また、本研究を進める過程で、井上逸兵先生、鈴木亮子先生、大谷直輝先生、野中 大輔氏をはじめ、学内外の多くの先生方や院生諸氏から有益なご指導とご助言を頂いた。記して謝意を表したい。本稿の内容の一部は、日本英語学会第33回大会スチューデント・ワークショップ「意味研究における文脈の役割：認知意味論の新展開」における筆者の口頭発表を基にしている。本稿は JSPS 特別研究員研究奨励費 (課題番号:15J07850) の助成を受けている。本稿における不備や誤りは、全て筆者に帰する。

話指示用法)を持つ。¹

- (1) a. ... the question mentioned *above* / b. ... the picture *above*
(Quirk et al. 1985: 1462)
- (2) a. ... the arguments given *below* / b. The diagrams *below* illustrate ...
(*ibid.*)

(1) の *above* は前方照応、(2) の *below* は後方照応に用いられており、一見すると両者は対称的に使われている。これらはどちらも書き言葉に特有の表現であり、文・ページ・段落といった多様な単位を指示できるなど、多くの共通の特性を持つ (Quirk et al. 1985: 1462; Fillmore 1997: 103-104)。しかし、談話指示用法の *above* と *below* の相違を観察した研究はほとんどなく、生起環境や談話上の機能についても詳細な比較は行われていない。Brugman (1981)、Lakoff (1987)、Tyler and Evans (2003) をはじめ、これまでの前置詞研究の多くは単文単位での作例に基づく研究であり、(1) や (2) の *above/below* のように、談話の構造を考慮して初めて扱えるような用法はそもそもあまり分析されてこなかったと言える。

認知言語学は用法基盤主義 (Langacker 2000) の立場を取り、語や構文の知識はそれが生起する文脈情報を含めた形で蓄えられていると考える。これに基づく、ある言語表現の特性を分析する上では、文法的な生起パターンや共起語、前後の文脈などを含めた実例の生起環境を観察することが重要であると考えられる。また、Langacker (1997: 234) が「話し手が発話の文脈を理解しているからこそ、相互行為や発話内容の決定ができる」と述べているとおり、話し手・書き手による文脈の理解、つまり「談話の流れや聞き手 (読み手) の認知状態を話し手 (書き手) がどう捉えているか」ということ自体が、言語表現の選択に影響を与える重要な要因であると考えられている。

このように、認知言語学は理論的に言語研究における文脈の役割を重視している一方で、実際の分析では談話やコミュニケーションの側面が十分に扱われていないという指摘もなされてきた。例えば、崎田・岡本 (2010: 9) は、従来の認知言語学の研究に対して「用法基盤の原則に基づいて言語使用に注意を払ってきたとはいえ、研究の焦点は伝統的に談話やテキストではなく単一の文や命題に限られてきた」という指摘をした上で、認知語用論という新たなアプローチのもと、認知言語学と語用論の融合を図っている。このアプローチでは、認知とコミュニケーションの相互関係を探求することを柱とし、認知と談話、言語運用の視点を複合的に取り入れた研究が目指されている。山梨 (2004: 70) にお

¹ 本稿では、*above/below* が後ろに補部名詞句を伴う前置詞的用法 (e.g. *above 30° / below 30°*) と、それを伴わない副詞的用法 (e.g. *see above/below*) を包括して「前置詞」と呼ぶ。

いても、「認知言語学の分野の研究は、文法論と意味論に関わる言語現象の研究が中心となっており、広い意味での語用論の研究は本格的にはなされていない」という指摘がなされている。これを踏まえ、本研究では、談話指示用法の *above* と *below* の詳細な比較を通して、認知言語学の枠組みで多数なされてきた前置詞研究をさらに発展させ、単文を超えた談話レベルの構造、および、その背景にある書き手・読み手の認知やコミュニケーションの観点を取り入れて前置詞の振る舞いを分析することを試みる。

なお、語彙の意味研究において、反義性は類義性と並ぶ重要な意味関係の一つとして多く研究されており (e.g. Lyons 1968, 1977; Leech 1974; Cruse 1986)、近年はコーパスにおける生起分布の調査に基づいて反義語を分析した研究も多い (e.g. Charles and Miller 1989; Mettinger 1994; Jones 2002; Gries and Otani 2010)。認知言語学の枠組みでも、語彙間の反義語らしさには程度性があることを指摘した研究や (Croft and Cruse 2004)、反義語に見られる意味的・文法的な非対称性が認知主体の経験や捉え方、外部世界の非対称性の反映であることを論じた研究が見られる (Tyler and Evans 2003; Otani 2007; 大谷ほか 2008; 大谷 2012)。これらの研究は、語彙の意味分析を精緻化する上でも、言語表現の背後にある認知的・経験的基盤を明らかにする上でも、反義語の比較が有効性を持つことを示している。

本稿は、こうした研究を踏襲する形で、反義関係にあるとされる談話指示用法の *above/below* の非対称性を *British National Corpus* における生起分布を基に示す。さらに、その非対称性が生じる動機づけを認知言語学の枠組みから論じる。具体的には、談話指示用法の *above* と *below* では生起する文法構造や修飾対象の語彙に異なる傾向が見られ、その相違は、談話の「上下」が書き手・読み手にとって異なる意味を持つことによって生じていることを主張する。つまり、書き言葉において、先行文脈で述べられた既出の内容を指すことと、まだ述べられていない後続文脈の内容を指すことは質的に異なり、それが *above* と *below* の非対称的振る舞いに反映されていることを多角的・実証的に示す。さらに、*above* と *below* が空間的な位置を表す場合との比較を踏まえ、語彙のメタファー的用法の振る舞いは、メタファー的写像の起点領域 (source domain) の性質のみならず、目標領域 (target domain) が独自に担う性質によっても動機づけられていることを論じる。

本稿の構成を次に示す。まず、2節で前置詞の意味拡張および *above/below* の談話指示用法に関する先行研究を概観し、問題点を指摘する。3節では、本研究で行うコーパス調査の方法を示す。4節と5節で、調査結果の提示と考察を行う。このうち、4節では主に *above/below* が生起する文法構造や生起位置といった形式的な違いを示し、5節では *above/below* の修飾対象の語彙の違いを示す。これらを踏まえ、6節で、語彙のメタファー的意味拡張の研究や前置詞研究一般に対する理論的検討を行う。7節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1. *above/below* の意味拡張

前節で述べたとおり、英語前置詞の意味拡張についてはこれまでも多数の研究がなされてきた。それらの研究では、各前置詞の意味が中心的意味とされる空間的意味（物理空間における位置や経路を表す意味）からメタファーやメトニミーを介して拡張するプロセスが示されてきた。*above* や *below* についても同様に、物理空間における上下を表す (3) のような用法がメタファーを介して拡張し、(4) のような気温の高低（程度）を表す用法や、今回の分析対象である (5) のような談話指示用法が生じたとされる。²

- (3) He berthed {*above/below*} me. [新編英和活用大辞典]
 (4) The temperature is {*above/below*} 30°. (Quirk et al. 1985: 687)
 (5) See {*above/below*}. [新編英和活用大辞典]

Boers (1996) は、*above/below* の談話指示用法が両者の空間的意味から “TOWARDS THE BEGINNING OF WRITTEN DISCOURSE IS UP; TOWARDS THE END IS DOWN” (Boers 1996: 75) のようなメタファーを介して派生したとしている。さらに、*below* は談話指示用法に拡張するのに対して *under* は同様の意味に拡張しないことを指摘し、その理由を両者が表す空間的意味の特性から説明している。Boers によると、*below* は典型的に「低い位置にあるが、離れていて影響関係にない」位置関係を表すのに対し、*under* は「真下にあり、近接して影響関係にある」位置関係を表す。これを踏まえると、影響を与える・受けるという関係にないテキスト間の関係を表すには *below* の方が適切であるため、*under* ではなく *below* が談話指示用法に拡張したとされる。Boers は上記の説明を *below* に関して行っているが、同様の説明は *above* にも当てはまると考えられる。*above* は典型的に「高い位置にあるが、離れていて影響関係にない」位置関係を表すのに対し、*over* は「真上にあり、近接して影響関係にある」位置関係を表すことが、多くの研究で指摘されている (e.g. Dewell 1994; Boers 1996; Tyler and Evans 2003; Lindstromberg 2010)。この二者においても *over* ではなく *above* のみが談話指示に用いられることから、*above/below* は、物理空間における位置を表す場合に「離れてい

² メタファーは類似性や共起性に基づく領域間の写像であり (Lakoff and Johnson 1980; Lakoff 1987)、前置詞においては一般に、身体的・具体的経験に根ざした物理空間の領域（起点領域、source domain）から非物理的・抽象的な概念領域（目標領域、target domain）へと写像が起こることで、意味が拡張して多義性が生じるとされる。(4) や (5) の *above* や *below* が表す意味も、それぞれ気温や談話といった非物理的な概念領域における意味を表していることから、メタファー的な写像を介して生じた意味（メタファー的意味）と見なされている。

て影響関係にない上下の位置を表す」という意味特性を持つことによって、談話指示用法に拡張したと考えられる。

2.2. 談話指示用法における共通点

次に、談話指示に用いられる際の *above/below* の特性を見ていく。Quirk et al. (1985: 1462) において、談話指示に用いられる *above* と *below* にはさまざまな共通の特性があることが示されている。例えば、両者は共に談話上のさまざまな単位（句、文、段落、ページ、図など）を指すことが可能であり、直前または直後の内容でなくとも指示できる。また、Fillmore (1997: 104) では、両者が使われるレジスターも共通しており、格式ばった書き言葉に特有の表現であることが指摘されている。

さらに、談話指示用法の *above/below* は、後ろに補部名詞句を伴わない形で生起する (Boers 1996: 76)。例えば先に挙げた (1)、(2)、(5) においても、*above* や *below* は補部名詞句を伴っていない。この理由について、Boers は、テキストにおいては *above/below* という表現の生起位置が暗黙的なランドマーク（どこに対する上・下かという基準点）となるため、補部名詞句を伴わずに生起可能であると述べている。

以上のように、先行研究では主に *above* と *below* に見られる共通の特性が指摘され、両者は前方照応・後方照応の表現として対称的に使われると考えられてきた。これらの対称的な側面は、両者が表す空間的意味の対称性 (e.g. (3)) から予測・説明できるものであろう。

2.3. 談話指示用法における相違点と本稿での取り組み

その中で Boers (1996) は、談話指示用法の *above* と *below* の振る舞いに、二つの相違が見られることも指摘している。第一に、談話指示用法の *above* は *below* に比べて使用される頻度が高い。第二に、*above* は *below* が生起できないような文法的地位にも生起可能である。具体的には、(6a) のように名詞を前から修飾することや、(6b) のように *the above* という形式で名詞句のように振る舞うことが可能である。一方、*below* はこれらの文法的地位に生起できない。³

(6) a. The **above** statement / b. From the **above** it follows that ...

(Boers 1996: 108)

こうした相違について Boers (1996: 108) は、既出の情報のほうが参照点として使いやすいため、テキスト指示においては *above* の方が一般的なのだらうと説明している。

³ これらの文法的相違については、Quirk et al. (1985: 1462) も参照のこと。

これまでの前置詞のメタファー的意味拡張に関する研究は、語彙の物理空間的な意味とメタファー的意味との対応関係に着目することで、意味拡張の動機づけを論じてきた。*above* と *below* の談話指示用法においても、2.1 節で示したように、物理空間における「上」と談話の「先行文脈」、「下」と談話の「後続文脈」との対応関係が主に指摘されてきたと言える。前置詞のメタファー的意味はあくまで基本義とされる空間の意味に基づいて説明される傾向にあり、メタファー的意味の特性を論じる際も、その前置詞の空間の意味との類似性が強調されてきた。一方で、本節に挙げた Boers (1996) の指摘は、*above/below* の非対称性が、物理的な上下ではなく談話における「上下」(先行文脈と後続文脈)の意味づけの相違によって生じていることを示唆する。つまり、談話指示用法の *above* と *below* が非対称的に振る舞うことは、両前置詞が表す物理的な上下の位置から直接的に説明できるものではなく、談話の構造や、その背景に存在する書き手・読み手を考慮して初めて捉えられるものであると思われる。この現象は、前置詞のメタファー的意味を空間の意味からの派生や拡張として捉え、空間の意味との類似性を基に説明してきた従来の分析に対し、問題を投げかけるものであろう。

このように、Boers の指摘は重要な示唆を含んでいるものの、Boers は前方照応のほうが一般的であるという言及をすることとどまり、談話の構造や書き手・読み手の認知状態と、*above/below* の文法的振る舞いの相違との対応関係を詳細に記述・分析しているわけではない。Horiuchi (2016) は、コーパス言語学のコロケーション分析の手法を用いて *above/below* はそれぞれ共起強度の高い語彙が異なるという調査結果を示しており、前方照応と後方照応の間には、どちらか一般的かという説明だけでは集約できない多様な意味的・機能的な相違があることが示唆される。しかし、いずれにおいても両者の相違は部分的にしか記述されておらず、また、語彙の意味拡張や前置詞研究一般を視野に入れた理論的考察には至っていない。本稿では、これらの研究をさらに発展させ、談話指示用法の *above/below* の振る舞いに見られる相違を、実例が生起する文法構造や生起位置の相違を含めて網羅的・実証的に示すことを試みる。さらに、認知言語学の枠組みに基づいてその相違が生じる動機づけを考察し、前置詞のメタファー的意味拡張の研究に対する理論的な示唆について検討する。

3. データと調査方法

3.1. データの抽出

本研究では、1 億語規模のイギリス英語のコーパスである *British National Corpus* (*BNC*) を用いて調査を行った。*BNC* は書き言葉が約 9 割、話し言葉が約 1 割の構成であり、今回のような書き言葉で使われる表現の分析に適している。今回の調査では、小学館コーパスネットワークを介して *BNC* にアクセスし、*above*、*below* の全用例 (*above* :

25,176 例、*below* : 14,103 例) を品詞を指定せずに検索した。その中から、*above* と *below* の用例 1,000 例ずつをランダムサンプリングによって抽出した。こうして得られた合計 2,000 例のデータをすべて観察し、*above/below* が表す意味を以下のいずれかに手作業で分類した。

- A) 空間 (上・下) (e.g. He berthed {*above/below*} me.)
- B) 程度 (以上・以下) (e.g. The temperature is {*above/below*} 30°.)
- C) 談話指示 (上記・下記) (e.g. See {*above/below*}.)
- D) その他 (e.g. *Above* all, keep in touch.)

今回の調査では、物理空間における上下を表す用法を「A. 空間」とし、同じ紙面上にある情報を指している用法は、指示対象が文章である場合も図表や写真である場合もすべて「C. 談話指示」に含めた。

その結果、各意味に分類された用例数と割合 (%) は、表 1 のとおりであった。

表 1 : *above/below* の意味の分布

	A. 空間		B. 程度		C. 談話指示 ⁴		D. その他 ⁵		合計	
<i>above</i>	395	39.5%	124	12.4%	306	30.6%	175	17.5%	1,000	100%
<i>below</i>	426	42.6%	212	21.2%	328	32.8%	34	3.4%	1,000	100%

本稿では、このうち「C. 談話指示」に分類された *above* の 306 例、*below* の 328 例を分析の対象とし、より詳しい調査を行った。次節で、これらの事例に対して行ったコーディングについて説明する。

3.2. コーディングの観点

本稿では、談話指示に用いられる *above/below* の生起環境を文法構造 (形式的特性) と修飾対象の語彙の観点からコーディングし、該当する事例数を集計した。コーディングの観点を次に示す。

⁴ 表 1 のとおり、抽出した 1,000 例を見ると、*above/below* はどちらも約 3 割ずつ談話指示用法で生起している。これは一見すると、2.3 節で挙げた「談話指示用法の *above* は *below* に比べて使用される頻度が高い」という Boers (1996) の指摘と合わないとも見える。しかし、そもそも *above* のほうが BNC 全体での生起頻度が高いため (*above*: 25,176 例、*below*: 14,103 例)、同じ 3 割であっても BNC 全体としては Boers の指摘どおり *above* の談話指示用法のほうが生起頻度が高いと言える。

⁵ *above all* という表現の生起頻度が高いため、*above* のほうが「D. その他」の事例数が多い。

表 2：コーディングの観点

A. 文法構造 (形式的特性)	
(i)	名詞修飾・動詞修飾： <i>above/below</i> の直接の修飾対象が、名詞か動詞か。 a. 名詞修飾 (e.g. the <u>picture</u> <i>above</i> / The <u>diagrams</u> <i>below</i> illustrate ...) b. 動詞修飾 (e.g. the question mentioned <i>above</i> / See <i>below</i>) c. その他 (e.g. From the <i>above</i> it follows that ...)
(ii)	主語・目的語： <i>above/below</i> が名詞修飾となる際、両者が含まれる名詞句が主語か目的語か。 a. 主語 (e.g. The diagram <i>above</i> sketches this concept) b. 目的語 (e.g. See page 42 <i>below</i> .)
(iii)	生起位置： <i>above/below</i> が含まれる節や句が、主節前に前置されているかどうか。 ⁶ a. 主節前 (e.g. <u>In the context</u> <i>above</i> , Mr. Lorry did not ... / <u>As explained</u> <i>above</i> , some students ...) b. それ以外
B. 修飾対象の語彙	
	名詞修飾の場合、修飾対象の名詞が何か。(e.g. the <u>picture</u> <i>above</i> → <i>picture</i>) 動詞修飾の場合、修飾対象の動詞が何か。(e.g. <u>See</u> <i>below</i> → <i>see</i>)

「A. 文法構造」については、まず、*above/below* が修飾している語彙の品詞を一例ずつ調査した。本研究が依拠する認知言語学の枠組みでは、統語論の自律性が否定され、言語形式の違いは意味の違いを反映していると考えられている (Langacker 1987, 2008)。これに基づくと、*above* による先行文脈の指示と *below* による後続文脈の指示とが意味的・機能的な相違を持つ場合、両者が生起する統語的な構造にも相違が生じることが予想される。そのため、本研究ではまず *above/below* が修飾する語彙の品詞を見ていくことで、両者が生起しやすい統語的な構造を調査した。⁷ さらに、4 節で詳しく論じるが、言語表現の生起位置は談話における情報構造や機能と相関関係を持つとされる。談話の構造を考慮すると、テキスト内に既出の情報を指す *above* は、先行文脈に近い位置に生起しやすいことが予想される。そのため、本研究ではまず、*above/below* が含まれる名詞句の文法的地位 (主語・目的語) をコーディングすることで、それらの動詞に対する生起位置の

⁶ 今回の調査では、*above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれ、かつ、主節前に前置されている用例のみを「a. 主節前」として集計した。それらが主節の後ろに生起している例や、そもそも *above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれない例は、すべて「b. それ以外」とした。

⁷ 生起環境から語彙の特性を捉える手法は「語彙の特性は共起語によって明らかにしうる」(Firth 1957: 11) というコーパス言語学の考え方も通じる。

分布を調査した。さらに、*above/below* が含まれる副詞節や前置詞句の、主節に対する生起位置も併せて調査した。

また、「B. 修飾対象の語彙」では、*above/below* が修飾する名詞および動詞を観察した。*above/below* の談話指示用法において、修飾対象の語彙の相違は、*above/below* の指示対象の相違、つまり両者がそれぞれ談話上のどういった要素を指示する際に用いられやすいかの傾向を反映していると考えられる。本研究では、抽出した談話指示用法の実例を一例ずつ観察し、*above/below* が修飾しやすい語彙の相違を、両者が生起する文法的なパターンや生起位置の分布と併せて包括的に記述・説明することを試みた。

以降で、コーディングの結果について説明し、考察を行う。まず、4節で *above/below* が生起する文法構造の調査結果を示し、5節で修飾対象の語彙の調査結果を示す。

4. 文法構造の相違

4.1. 調査結果 1：修飾対象の品詞

はじめに、*above/below* が修飾している語彙の品詞を調査した結果を表3に示す。⁸

表3：*above/below* の修飾対象の品詞

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	名詞修飾 (e.g. the <u>picture</u> <i>above</i>)	133	43.5%	109	33.2%
b	動詞修飾 (e.g. <u>see</u> <i>below</i>)	161	52.6%	210	64.0%
c	その他	12	3.9%	9	2.7%
合計		306	100%	328	100%

above については、名詞修飾が133例(43.5%)、動詞修飾が161例(52.6%)と、動詞修飾の用例がやや多いものの、両者が約半数ずつ観察された。以下の(7)は *above* が名詞を修飾している例、(8)は動詞を修飾している例である。以降で出典表記の無い例はすべて *BNC* から抽出した実例である。

- (7) a. The diagram *above* sketches this concept.
 b. In addition to the *above* problem, I discovered another. Looking beneath the carriage, I noticed that there was a machine needle caught and laying flat across the magnets.

⁸ 本稿の表3から表7に示した *above/below* の頻度分布に対してカイ二乗検定を行ったところ、すべてにおいて有意差 ($p < .05$) が見られた。

- (8) a. Many of the needs described **above** require the involvement of a school staff who have an understanding of and commitment to the benefits of linking with the world beyond school.
- b. As explained **above**, English recognizes a distinction between one and more than one (singular and plural). This distinction has to be expressed morphologically, by adding a suffix to a noun or by changing its form in some other way to indicate whether it refers to one or more than one: student/students, fox/foxes, man/men, child/children.

一方、*below* は名詞修飾が 109 例 (33.2%) であるのに対し、動詞修飾が 210 例 (64.0%) と、*above* に比べて動詞を修飾する割合が大きい。(9) は *below* が名詞を、(10) は動詞を修飾する例である。

- (9) a. If you follow the guidelines **below** your complaint will be dealt with in the most efficient manner possible.
- b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 **below**.
- (10) a. Reality Orientation activities (see **below**) are helpful to keep the brain working ...
- b. This issue will be discussed further **below**.

なお、Quirk et al. (1985: 1462) や Boers (1996: 108) の指摘どおり、*above* には名詞を前から修飾する例 (e.g. (7b)) が 70 例見られたが、*below* にはそうした例は見られなかった。

さらに、*above* と *below* の用例を細かく見ると、両者の生起環境には「名詞を修飾するか動詞を修飾するか」という以上の相違が見られる。例えば (8) と (10) は共に動詞修飾の例だが、(8a) では主要部である *described* が過去分詞形で名詞句 (*the needs*) を修飾している。一方で、(10) では *below* が命令文 (*see below*) や受身文 (... *be discussed further below*) の述部に生起している。これを踏まえ、より細かい粒度で両者が生起する文法構造を調べたところ、以下の分布が見られた。

表 4：above/below が生起する文法構造

		<i>above</i>		<i>below</i>		
a	名詞修飾 (e.g. the <i>above</i> analysis)	133	43.5%	109	33.2%	
b	名詞 + 分詞 (e.g. the reasons stated <i>above</i>)	96	31.4%	45	13.7%	
c		as + 分詞 (e.g. as mentioned <i>above</i> , ...)	30	9.8%	13	4.0%
d		動詞修飾 能動 (e.g. we show <i>below</i>)	12	3.9%	7	2.1%
e	動詞修飾 命令 (e.g. See <i>below</i> .)	19	6.2%	74	22.6%	
f		受身 (e.g. ... is listed <i>below</i> .)	4	1.3%	71	21.6%
g	その他 (e.g. <i>Below</i> we explain how ...)	12	3.9%	9	2.7%	
合計		306	100%	328	100%	

この分布を見ると、両者が生起しやすい文法構造の差がより顕著であろう。*above* は動詞修飾となる場合にも (8a) *many of the needs described above* のような「b. 名詞 + 分詞」型で生起する割合が大きいの (96 例、31.4%)。この場合、*above* が直接修飾している対象が動詞でも、その動詞は過去分詞形で名詞句を修飾し、全体の構造としては *above* が名詞句の内部に含まれている。一方の *below* は、動詞修飾の場合にも (10) のように「e. 命令」(74 例、22.6%) または「f. 受身」(71 例、21.6%) の文の述部に生起する頻度が高い。表 4 の結果から、*above* は「a. 名詞修飾」や「b. 名詞 + 分詞」の形で名詞句の内部に生起しやすいのに対し、*below* は動詞句の内部 (述部) に生起しやすい傾向が見取れる。

4.2. 調査結果 2：名詞句の文法的地位

次に、*above/below* が名詞修飾になる用例 (*above*: 133 例、*below* 109 例) を対象に、*above/below* が含まれる名詞句が主語として生起するか、動詞の目的語として生起するかを調査した。なお、対象の名詞句は動詞の項であるとは限らず、付加詞である前置詞句の補部として生起している例 (e.g. *in the context above*) も多く見られた。前置詞句については生起位置の観点から別途調査しているため (結果は 4.3 節参照)、ここでは名詞句が動詞の項となる事例に絞って調査を行った。動詞の項となるのは、*above* が含まれる名詞句のうち 70 例、*below* が含まれる名詞句のうち 66 例であり、いずれも主語または他動詞の目的語位置に生起していた。名詞句の文法的地位をコーディングした結果を次に示す。

表 5 : *above/below* を含む名詞句の文法的地位 (主語・目的語)

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	主語 (e.g. <u>The diagram <i>above</i> sketches ...</u>)	40	57.1%	16	24.2%
b	目的語 (e.g. See <u>page 42 <i>below</i></u>)	30	42.9%	50	75.8%
合計		70	100%	66	100%

このように、*above* は主語名詞句内に生起する例 (e.g. (7a)) が 40 例で全体の 57.1% であるのに対し、*below* は目的語名詞句内に生起する例 (e.g. (9a)) が 50 例で、全体の 75.8% という高い割合を占めていた。

4.3. 調査結果 3 : 生起位置

さらに、*above/below* が副詞節や前置詞句内に含まれ、かつ、その節や句が主節前に生起している用例 (e.g. (7b), (8b)) の数を調査した。その結果、表 6 のとおり、*above* の場合は 46 例 (15.0%) が主節前に生起しているのに対し、*below* の場合は主節前に生起する用例が 7 例 (2.1%) のみであり、*below* の場合に比べて *above* を含む節や句のほうが主節前に生起しやすいことがわかった。⁹

表 6 : *above/below* を含む節や句の生起位置

		<i>above</i>		<i>below</i>	
a	主節前 (e.g. <u>In the context <i>above</i>, Mr. Lorry did ...</u>)	46	15.0%	7	2.1%
b	それ以外	260	85.0%	321	97.9%
合計		306	100%	328	100%

以上で見た文法的・形式的な傾向をまとめる。まず、4.1 節で見たとおり、相対的に *above* は名詞句の内部、*below* は動詞句の内部 (特に命令文・受身文の述部) に生起しやすい。また、4.2 節で示したとおり、両者が名詞修飾となる場合、*above* は主語、*below* は目的語の内部に生起しやすい。さらに、4.3 節のとおり、*below* よりも *above* を含む節

⁹ *above* についても、主節前に生起する割合が 15.0% というのは、一見すると少ないようにも見える。しかし、副詞節や前置詞句は前置されない形式が無標であり、Thompson (1985: 57-58) が目的節 1,009 例の生起位置 (主節前・主節後) を調査した結果でも、主節前に生起する割合は 19% であったとされる。注 6 にも示したとおり、本研究では、*above/below* の談話指示用法の全用例 (副詞節・前置詞句内に生起していない例も含む) に対して主節前に生起している割合を示しているため、15.0% という割合は決して低いものではないと考えられる。特に、*below* ではその割合が 2.1% であることを考慮すれば、*above* を含む節や句のほうが前置されやすい傾向が読み取れるであろう。

や句のほうが主節前に前置されやすい。これらを総合すると、*above*のほうが文や節の冒頭近く（主語、または前置された節・句の内部）に生起しやすいのに対し、*below*は文や節の末尾近く（命令文・受身文の述部、目的語の内部）に生起しやすい傾向が見て取れる。

4.4. 文法構造に関する考察

ここで、*above*と*below*の文法的な生起環境に相違が見られる理由を、談話上で*above/below*が指す情報の性質から考えてみたい。*above/below*が指すテキストの「上下」は、物理的・客観的には対称的な位置であっても、テキストの書き手・読み手の視点から見ると対称的ではない。英語のテキストは慣習的に上から下に向かって書かれ、読まれるものである。このため、*above*で指示される範囲、つまり先行文脈の内容はすでに執筆済みであり、読み手にとっても既知の情報（少なくとも、書き手はその前提で談話を続けられるもの）である。一方、*below*で指示される範囲、つまり後続文脈に書かれる内容は未執筆の場合も多く、また、読み手にとっては未知の情報であろう。このように、テキストの「上下」はさまざまな異なる意味合いを有するものであり、それが反義的な語であるはずの*above/below*の文法的振る舞いの相違に反映されている可能性がある。

一般に、語用論的に無標の文においては旧情報が新情報よりも前に生起するとされ、英語では主部に旧情報（主題）、述部に新情報が生起するとされる（cf. Halliday 1967, 1994; 久野 1978; Brown and Yule 1983; 福地 1985; Lambrecht 2000）。旧情報は「話し手によって聞き手が知っている信じられていること」、新情報は「話し手によって聞き手が知らない信じられていること」（Brown and Yule 1983: 154）という定義に基づくと、*above*が指す先行文脈の内容は通常、旧情報に当たると考えられる。このため、*above*を含む節や句は、*below*の場合に比べ、文や節の冒頭近くに生起しやすいのだと考えられる。例えば（11）では、先行文脈ですでに示されている情報が*the above criteria*という形で再提示され、さらなる条件の提示へと談話が繋がれている。

- (11) In addition to the *above criteria* of articulation and recognition of breaches, a further necessary condition must be satisfied: ...

一方、*below*が指しているのは読み手にとって未知の内容であり、後続文脈にその情報が存在すること自体が読み手に知られていない。そのため、*below*は新情報が生起しやすいとされる述部に頻繁に生起すると考えられる。（12）は、受身形の節の述部に*below*が生起する用例である。

- (12) Some common strategies likely to lead to success are listed *below*:

1. Restrict the locations in which you keep food (there is no need for food in bedrooms, food in your pockets, or in your handbag, for example).

2. Decide on set places or locations to eat (say, the dining room table).
This should prevent certain other locations, like the chair in front of the television, becoming a cue to start eating.
3. Keep a good stock of nutritious foods available: do not ...

下線を引いた節では、*strategies* が後ろに挙げられているということ自体が新情報であり、この節において焦点化されるべき内容である。一方、もし先行文脈に (12) のようなリストがあった場合には、そのリストは読み手にとって既知であるため、述部に *above* が生起する形式 (e.g. *Some common strategies likely to lead to success are listed above.*) で改めてそのリストの存在について述べることは少ないであろう。こうした相違が、*above* は主語名詞句や前置された節・句の内部に生起しやすいのに対し、*below* は述部に生起しやすいという文法的な相違として現れているのではないかと思われる。

同時に、両者の生起位置の違いは類像性 (iconicity) の反映として捉えることが可能である。福地 (1985: 29-30) は、旧情報の生起位置について「前の文に近いほど聴者の記憶の負担が軽いため、旧情報は主語に現れるのが自然である」とし、先行文脈と関連が強い要素を冒頭の主語位置に置くことで、聴者 (読み手) による処理の負荷が軽減されるとしている。また、Thompson (1985)、Ford (1993) らの研究では、副詞的要素の生起位置と談話機能の相関が示されている。例えば Thompson は、主節前に生起する目的節と主節後に生起する目的節を比較し、主節前の目的節のほうが先行文脈との関連性が強いことを指摘している。具体的には、主節前に生起する (13a) の *to cool* は先行文脈から予測される問題を述べており、解決策を提示する主節 (*place the loaf on a wire rack*) へと談話を繋ぐ機能 (text-organizing function) を担っているのに対し、主節後に生起する (13b) の *to cool* は単に主節が表す行為の目的を伝えるのみで、その機能は命題の伝達にとどまるとされる。

- (13) a. To cool, place the loaf on a wire rack.
b. Place the loaf on a wire rack to cool. (Thompson 1985: 55)

これらの研究と、*above/below* が指示する先行文脈・後続文脈の特性を考慮すれば、*above* と *below* の生起位置の相違も自然に捉えられるだろう。つまり書き手は、先行文脈との結びつきが強い *above* を文や節の冒頭近くに、後続文脈との結びつきが強い *below* をそれらの末尾近くに置くことで、読み手によって処理の負荷が低く、書き手にとっても文脈を繋げやすい形で談話を構成・展開していることがわかる。

5. 修飾対象の語彙の相違

次に、*above/below* が修飾する名詞および動詞の性質について見ていく。本研究では、表3の結果で「名詞修飾」に分類された事例については修飾対象の名詞を、「動詞修飾」に分類された事例については修飾対象の動詞を一例ずつ観察した。

5.1. 調査結果 1：名詞の相違

まず、談話指示用法の *above/below* が修飾する名詞のタイプを見る。*above/below* が名詞を修飾している例を以下に再掲する。

- (14) a. The diagram **above** sketches this concept. (= (7a))
 b. In addition to the **above** problem, I discovered another. Looking beneath the carriage, I noticed that there was a machine needle caught and laying flat across the magnets. (= (7b))
- (15) a. If you follow the guidelines **below** your complaint will be dealt with in the most efficient manner possible. (= (9a))
 b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 **below**. (= (9b))

このように、修飾対象の名詞自体は各例で異なるものの、これらの名詞はおおまかに次の2タイプに分類することが可能である。¹⁰

- (i) 内容的：議論の内容や情報の種類を表す名詞 (e.g. *problem*, *guidelines*)
 (ii) 形式的：文章構造や図表を表す名詞 (e.g. *diagram*, *Chapter*)

above/below の修飾対象の名詞がそれぞれどちらのタイプかを調査したところ、次の結果が得られた。¹¹

¹⁰ 今回抽出した談話指示用法の *above/below* において、それぞれの修飾対象の名詞を頻度順に並べると、以下の結果であった (括弧内の数値は生起頻度)。

- a. **above** : *para(graph)* (9)、*Chapter/p.* (3)、*sub-section/analysis/example/problem* (2) (頻度1が多数)
 b. **below** : *para(graph)* (7)、*page/p.* (6)、*Chapter* (4)、*section/subsection* (3) (頻度2以下が多数)

このように、生起頻度が3以下の名詞が非常に多く、トークン頻度が上位の語だけを観察しても一般化が困難であった。そのため、本稿では名詞をタイプに分け、その集計結果から分析を行った。

¹¹ 2タイプの区別は必ずしも明白ではないため、「中間例」という区分も設け、両方の特性を有する名詞をここに含めた。例えば *address* は実例の多くが URL を指し、「http://」で始まる特有の形式を持つ。*coupon* も、しばしば図のような形で表されるなど文章とは異なる形式を取りうる。このように、名詞の意味としては内容的でも書き言葉において特有の形式で記載されやすいものは「中間

表 7：修飾対象の名詞のタイプ

	<i>above</i>		<i>below</i>	
(i) 内容的	81	60.9%	27	24.8%
(ii) 形式的	44	33.1%	71	65.1%
中間例	8	6.0%	11	10.1%
合計	133	100%	109	100%

このように、*above* と *below* では修飾しやすい名詞のタイプが大きく異なる。まず、*above* は内容的な名詞を修飾する割合が 60.9% を占めていた。具体的には、*problem*、*question*、*reason*、*analysis*、*method*、*definition*、*example*、*argument*、*relation*、*process*、*assumption*、*condition*、*evidence*、*principle*、*factor* などの語が観察された。

- (16) a. The *above* analysis has demonstrated that, in the absence of price adjustments, DD unemployment can be caused by: ...
 b. The relations *above* may conveniently be written in matrix form ...

(16) において、*above* は、ここで言及されている「分析」や「関係」を読み手に特定化させる役割を担っていると考えられる。一方、*below* は形式的な名詞 (e.g. *paragraph*、*page*、*chapter*、(sub)section、*figure*、*table*、*chart*、*diagram*) を修飾する頻度が高く、それが全体の 65.1% を占めていた。

- (17) a. And these reduced payments continue for the next 3 years—as you can see from the chart *below*.
 b. The method of issue is described in detail in Chapter 5 *below*.

(= (9b), (15b))

below は、(17a) では *chart* を、(17b) では *Chapter 5* という具体的な数値を伴う名詞句を修飾している。(17b) の *below* は、第 5 章の方向を示し、かつそれが同一テキスト内の第 5 章であることを示しているものの、読み手は *below* が無くても指示対象の章を容易に特定できるだろう。つまり、(17b) の *below* は指示対象の探索を補助していても、指示対象を一意に決めることにはそれほど貢献していないと思われる。*below* には、(17b) のように、それが無くても指示対象を特定できる名詞句を修飾する例が多く見られた。

5.2. 調査結果 2：動詞の相違

次に、談話指示用法の *above/below* が動詞を修飾する用例を見ていく。*above/below* の修飾対象の動詞を活用形ごとに集計した結果を (18)、(19) に示す。ここでは紙幅の都合上、*above/below* が当該の動詞を修飾する頻度（括弧内の数値）が 3 以上のものを記載する。

(18) ***above***: *described* (12)、*mentioned* (10)、*noted* (5)、*outlined* (4)、*given/quoted/shown/see* (3)

(19) ***below***: *see* (43)、*discussed* (17)、*shown* (11)、*listed* (8)、*described/considered* (5)、*given/summarised* (3)

これを見ると、*above* は、*described*、*mentioned*、*noted*、*outlined*、*quoted* といった、言及や説明に関わる動詞を修飾しやすい。一方、*below* は *see* を修飾する頻度が突出して高いことがわかる。

今回抽出したデータだけでは用例数が少ないため、補助的に、共起の有意性を示す T スコア (cf. Hunston 2002) に基づく調査結果 (Horiuchi 2016) を以下に示す。¹² この調査では、*BNC* の共起検索機能を利用して便宜的に *above/below* の直前 (1 語前) に生起する動詞を活用形で検索し、そのうち T スコアが高い動詞の上位 30 個を抽出している。*above* の結果は表 8 のとおりである。なお、この調査は談話指示用法に絞ったものではなく、表には空間的意味を表す動詞 (e.g. *rise*、*towering*) も含まれるため、談話指示で用いられる動詞に斜体と下線を付与した。

表 8：*above* の直前に生起する動詞 (T スコア順)

	動詞 (1~30 位、() 内は T スコア)
<i>above</i>	<i>described</i> (22.75), <i>mentioned</i> (21.42), <i>see</i> (19.22), <i>outlined</i> (16.10), <i>discussed</i> (15.78), <i>noted</i> (13.54), <i>rise</i> (11.20), <i>listed</i> (11.13), <i>given</i> (10.81), <i>quoted</i> (10.54), <i>shown</i> (9.97), <i>rose</i> (9.46), <i>cited</i> (8.22), <i>pictured</i> (8.18), <i>rising</i> (8.12), <i>indicated</i> (8.07), <i>suggested</i> (8.03), <i>stated</i> (7.82), <i>rises</i> (6.75), <i>raised</i> (6.48) <i>defined</i> (6.39), <i>heard</i> (6.25), <i>seen</i> (6.07), <i>towering</i> (5.91), <i>explained</i> (5.72), <i>hung</i> (5.55), <i>towered</i> (5.38), <i>hanging</i> (5.20), <i>shouted</i> (4.99), <i>presented</i> (4.86)

¹² T スコアはコロケーションの確信度の指標で、その高低によって共起の有意性の強弱が示される。語彙項目の実際の生起頻度と期待値との比較に基づいて算出され、2 以上の場合に有意であるとされる (Hunston 2002: 68-73; 石川 2012: 129)。コロケーション分析については Firth (1957) や Stubbs (2001)、コロケーション分析の手法に基づく *above/below* の比較の詳細は Horiuchi (2016) を参照されたい。

この結果からも、*above* は、言及・説明の様態や粒度を表すさまざまな動詞 (e.g. *described*, *mentioned*, *outlined*, *discussed*, *noted*, *quoted*, *cited*, *indicated*, *suggested*, *stated*, *defined*, *explained*) との共起強度が高いことがわかる。*above* と共に用いられる場合、これらの動詞は過去分詞形で生起しやすい。しかし、表 4 のとおり、これらは典型的に新情報が生起するとされる受身文の述部には生起しづらく、多くの場合、名詞句内部の修飾語句として生起するか (e.g. (20a))、*as* 節の中で用いられる (e.g. (20b))。

- (20) a. The methods described and examples outlined *above* demand a certain amount of expertise on the part of the collaborator. But it is possible to work with people who have had no previous experience of teaching or drama. When working with inexperienced collaborators it is important to brief them carefully, and to use them in simple roles, and perhaps non-speaking roles, ...
- b. As explained *above*, English recognizes a distinction between one and more than one (singular and plural). This distinction has to be expressed morphologically, by adding a suffix to a noun or by changing its form in some other way to indicate whether it refers to one or more than one: student/students, fox/foxes, man/men, child/children. (= (8b))

(20) の例において、*above* が修飾する動詞 (*described*, *outlined*, *explained*) は、指示対象の情報が先行文脈にどういった形で導入されていたかを示している。(20a) では、*the methods described and examples outlined above* という形で既出の情報に触れ、それを主題として示した上で、述部でその主題に対する説明を加えている。さらに、後続文脈ではそれと関連づけながら新たな主張をし、談話を展開している。(20b) でも、先行文脈で説明した内容を再度述べた上で、その詳細を後続文脈で補足している。これらの例では、「言及・説明を表す動詞の過去分詞形 + *above*」の形で読み手に先行文脈の説明を思い出させ、それと関連づけながら後続の談話を展開している。

一方、*below* に関しては T スコアに基づく調査 (Horiuchi 2016) でも *above* とは異なる特徴が観察されている。

表9：below の直前に生起する動詞 (T スコア順)

	動詞 (1~30位、() 内は T スコア)
<i>below</i>	<i>see</i> (31.32), <i>discussed</i> (13.66), <i>described</i> (12.62), <i>listed</i> (12.18), <i>shown</i> (11.97), <i>given</i> (10.98), <i>falls</i> (9.35), <i>fall</i> (9.18), <i>fell</i> (8.22), <i>outlined</i> (7.92), <i>considered</i> (6.42), <i>explained</i> (5.41), <i>summarised</i> (5.19), <i>detailed</i> (4.99), <i>lies</i> (4.80), <i>drop</i> (4.72), <i>living</i> (4.70), <i>falling</i> (4.68), <i>drops</i> (4.67), <i>fallen</i> (4.49), <i>pictured</i> (4.46), <i>reproduced</i> (4.34), <i>mentioned</i> (4.24), <i>indicated</i> (3.94), <i>presented</i> (3.94), <i>examined</i> (3.93), <i>illustrated</i> (3.93), <i>provided</i> (3.82), <i>noted</i> (3.73), <i>seen</i> (3.71)

below については、T スコアを見ても、*see* のスコアが突出して高い。また、4.1 節の表 4 で「e. 命令」に分類された用例を見ると、主要部の動詞はどれも *see* であった。このことから、「命令形 *see* + *below*」という結び付きが非常に強く、参照指示のための定型的な表現を構成していることが見て取れる。

- (21) a. Reality Orientation activities (see *below*) are helpful to keep the brain working ...
- b. Under its constitution West Germany (like Japan—see *below*) could take no part in external military activities, and by Aug. 20 Chancellor Kohl had apparently accepted that this was a definitive barrier, ...

(21) の例では、参照先の具体的なページ番号や節番号などは指定されておらず、*below* が指す位置はそれほど厳密には示されていない。また、*see below* という表現が括弧内で挿入的に用いられ、それが無くても文が成立する環境で用いられている。これらの例のように、*see below* という表現は、*the above problem* や *the relations above* などに比べ、読み手が対象の記述を実際に探したり特定化したりすることにそれほど寄与していないように思われる。書き手は *see below* という表現で「あとで詳しく述べるため、ここでは詳しく説明しない」ということをメタ的に表しているとも考えられ、当該箇所ですべての議論や詳細な記述をしないことに対して読者に了解を求めていると思われる。こうした例では、*see below* という表現が予告や説明回避の機能を担い、当該箇所での説明が複雑化することを防いでいると考えられる。

see 以外の動詞に目を向けると、*below* は *above* と同様に言及・説明に関わる動詞 (e.g. *discussed*) を修飾するほか、情報の提供方法に関わる動詞 (e.g. *shown*, *listed*, *summarised*) や、思考に関わる *considered* も修飾しやすい。これらの動詞を修飾する事例を見ると、4.1 節の表 4 で示した文法的な生起パターンのおおりに、*below* が受身文の述部に生起する事例が大半を占めていた。これは、*above* が言及・説明の動詞を修飾する際、名詞句内や *as* 節の中に生起しやすいことと対照的である。さらに、その用法は、予告・説明

回避の機能を担うものと、直後に情報を導入するものに大別される。

まず、*see below* と類似した、予告および説明回避の機能を担う事例を見ていく。

- (22) a. These requirements are discussed **below**.
 b. It is not, however, the only method and others are considered **below**.

この例では *discussed*、*considered* といった動詞が受身文の述部に用いられ、後続文脈に関連する情報があることが予告されている。(23) のように、*in more detail*、*further* といった副詞的要素との共起も多く見られることから、これらの表現が詳細な情報をあとで示すことの予告に使われていることがわかる。

- (23) a. Some of the key plants are described in more detail **below**.
 b. He proposed a model which attempted to weight various commodities used by settlers to a greater or lesser degree, including land use, which will be considered further **below**.

次に、*below* が直後に情報を導入する事例を見る。これまでに挙げた予告・説明回避の事例では、*below* によって位置が示されている情報が、*below* から少し離れた位置に生起する傾向にあった。それに対して、(24) は、*below* の直後に指示対象の情報（典型的には、箇条書きやまとめ）が生起している。

- (24) a. Some common strategies likely to lead to success are listed **below**:
 1. Restrict the locations in which you keep food (there is no need for food in bedrooms, food in your pockets, or in your handbag, for example).
 2. Decide on set places or locations to eat (say, the dining room table). This should prevent certain other locations, like the chair in front of the television, becoming a cue to start eating.
 3. Keep a good stock of nutritious foods available: do not ... (= (12))
 b. The eight characteristics of ‘excellence’ are summarised **below**:
 # A bias for action. Managers in excellent companies have a strong preference for doing things rather than analysing situations.
 # Keeping close to the customer. A key factor in these companies’ success is knowing their customers’ preferences. ...

これらの例のように、直後に情報を導入する場合、*below* は「動詞（受身） + *below* + コロン」という型の中で頻繁に生起しており、この型が箇条書きのリストやまとめを導入する一種の定型表現のようにになっている。特に、*shown*、*listed*、*summarised* といった特

定の動詞と共起する場合に、*below*はこの用法になりやすい。一方、今回抽出した例を見ると、*above*には指示対象が直前に生起する例はほとんど見られなかった。このことから、指示対象を直後に導入する用法で頻繁に使われ、その用法を含む定型的なパターンが観察されることは、*below*の特徴の一つと言える。また、(18)、(19)のとおり、*shown*、*listed*、*summarised*は*above*より*below*と共起しやすい動詞である。これらは、言語的説明に特化した*mentioned*や*quoted*に比べ、箇条書きや図表などの導入に使われやすい動詞であろう。*below*がこれらの動詞を修飾しやすく、直後に情報を導入する定型的なパターンを発達させていることは、*below*が情報の形式的側面や図表を表す名詞と共起しやすい傾向 (cf. 5.1 節)とも関連していると思われる。

5.3. 修飾対象の語彙に関する考察

5.1 節、5.2 節で見た *above/below* の相違についても、談話における「上下」の特性から考察を加える。読み手の視点から見ると、*above* が指すのは既知の情報であるため、視覚的にテキスト内を探さなくても記憶から指示対象を探し、特定することができる。例えば、*the above problem* といった表現を見れば、すでに読んだ情報の中から指示対象である問題 (problem) を容易に特定できるであろう。一方、*below* が指す情報は読み手にとって未知であり、記憶の中には入っていない。そのため、指示対象の情報を探索・認識するには、より視覚的で明確な手がかりが必要であることが予想される。これによって、*above* は内容を表す名詞 (e.g. *problem*、*question*、*reason*、*analysis*) を修飾しやすいのに対し、*below* はページ番号や章番号、図表などの形式的な手がかりを含む名詞 (e.g. *Chapter 5*、*chart*、*figure*) や、それらを導入する *shown*、*summarised* などの動詞を修飾する傾向にあるのではないかと考えられる。*below* が内容的な名詞を修飾していた場合、読み手は未読の領域からその内容に応じて指示対象を特定しなくてはならず、認知的負荷が高い。そのため、*below* は内容的な名詞を修飾しづらいのだと考えられる。さらに、*above* は直前ではなく少し離れた位置にある情報を指しやすいのに対して、*below* は (24) のように直後の情報を指す定型的な表現でも生起しやすく、指示対象との距離が近い傾向も見られた。この傾向は、前方照応には *this* と *that* の両方が使えるのに対し、後方照応には *this* しか用いることができないこととも関連していると思われる。こうした指示対象との距離の近さも、先行文脈の情報に比べて後続文脈の情報のほうが探索や認識の負荷が高いことによって生じていると考えられる。

さらに、書き手から見ると通常 *above* という表現が生起する時点で先行文脈は執筆済みのため、その内容について深く議論したのか、概要を述べただけなのか、他の文献を引用したのかも明確であり、それは読み手とも共有されている。一方、*below* という表現が生起するとき、後続文脈の内容は想定はされていても未執筆である場合も多いだろう。そのため、*below* は言及・説明の様態や粒度を詳細に示す動詞 (e.g. *mentioned*、*outlined*、

quoted) より、*shown*、*given* といった抽象度の高い動詞を修飾しやすい可能性がある。

また、後続文脈の内容は読み手にとって未知である一方、書き手はその内容をあらかじめ考えているであろう。そのため、書き手は先回りして読み手の意識を誘導しながら、テキストが読みやすくなるように配慮し、談話を構成していると考えられる。4.1 節で示した文法的分布と併せて考察すると、*below* が読み手を導く命令文や詳細情報の存在を表す受身文 (e.g. ... *is discussed below*) で生起しやすいことは、書き手が後続する内容を予告し、読み手との間にある情報量の差異を埋めながら談話を展開していることの現れであると考えられる。また、直後に情報を導入する表現 (e.g. ... *is listed below*) も、後続する重要な情報へ注意を促し、それらを箇条書きなどで示す際に用いられている (e.g. (24))。ここにも、後続する内容をわかりやすく提示して談話を展開しようとする、書き手の工夫や方略が見て取れる。

以上で見た、談話の先行文脈・後続文脈の相違と *above/below* の振る舞いとの対応を表 10 にまとめる。

表 10：先行文脈・後続文脈の相違と *above/below* の振る舞い

先行文脈	後続文脈		<i>above</i>	<i>below</i>
既知	未知	→	文法的地位	主語名詞句内 述部、目的語名詞句内
探索が容易	探索しづらい		生起位置	文・節の冒頭近く 文・節の末尾近く
執筆済	未執筆		修飾語(名詞)	内容的 形式的
読み手と共有	書き手だけ把握		修飾語(動詞)	言及・説明の動詞 <i>see</i> の頻度が高い
			指示対象	離れている傾向 直後にも生起

6. 理論的検討

6.1. 前置詞の空間的意味とメタファー的意味の関係

最後に、本稿の分析がこれまでの前置詞研究に対してどのような示唆を持つかを検討する。1 節で述べたとおり、認知意味論の前置詞研究においては、その意味が物理空間的な意味からメタファー的意味へと拡張する動機づけについて多くの分析がなされてきた。これらの研究では、メタファー的写像の起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) の類似性に基づく対応関係が注目されてきたと言える。*above* と *below* についても、「離れていて影響関係にない上下の位置を表す」という空間的意味に基づいて、どちらも談話指示用法に拡張することが指摘されてきた。2.2 節で示したように、談話指示用法の *above/below* に見られる共通性は、両者の空間的意味における対称性を反映していると考えられる。

しかし近年、コーパスに基づくメタファー研究では、語彙がメタファー的意味を表す場

合、字義的な意味を表す場合とは異なる文法的な振る舞いをする傾向が指摘されている。例えば Deignan (2005) は、動物名を表す名詞 (e.g. *dog*, *fox*) が人の行動や性格の領域に拡張したときは、動詞や形容詞への品詞シフトを伴いやすいことを指摘している。動詞として使われる例には *to dog* (狩る) や *to fox* (騙す)、形容詞として使われる例には *foxy* (セクシーな、狡い) などがある。これらの品詞シフトは、一般に人の行動は動詞、性格は形容詞で表されやすいという傾向、つまりメタファーの写像の目標領域である人の行動や性格の領域の特性から生じているとされる。Deignan は、こうした観察結果に基づき、語彙がメタファー的意味を表す場合の生起パターン (文法的振る舞い、共起語など) は、起点領域の構造のみならず、目標領域の構造にも動機づけられている可能性があることを指摘している。

今回分析した *above* と *below* の談話指示用法において、両者の間には多くの非対称性が観察された。しかし、興味深いことに、両者が物理空間的な意味を表す場合には同様の非対称性は見られない。本研究で最初にランダムサンプリングした *above/below* の用例 (各 1,000 例) のうち、空間用法の例 (*above*: 395 例、*below*: 426 例) (cf. 表 1) について修飾対象の品詞を観察すると、*above* は名詞修飾が 58.0% (229 例) で動詞修飾が 29.9% (118 例)、*below* は名詞修飾が 53.3% (227 例) で動詞修飾が 30.0% (128 例) と、*above* と *below* の分布がほぼ同じであった。また、表 8、9 のとおり、空間用法の *above* と共起しやすい動詞は *rise*, *raise*, *tower* といった上への移動を表す動詞、*below* と共起しやすい動詞は *fall* や *drop* といった下への移動を表す動詞であり、この点でも両者は反義語らしい対称的な振る舞いを見せる。

これを踏まえると、*above* と *below* の談話指示用法に見られる非対称性も、両者の空間的意味 (起点領域である空間領域) の性質というよりむしろ、談話の構造、つまり意味拡張した先の目標領域の性質によって生じていると考えられる。談話 (テキスト) の中では、物理的・客観的には対称的であるはずの「上下」が、既知と未知、執筆済みと未執筆といった異なる意味合いを持つ。これによって、情報の探索しやすさや、書き手と読み手が共有している情報量などに差異が生じる。談話指示用法の *above/below* が生起する文法的地位や、両者の文・節における生起位置、修飾対象の語彙に見られる相違は、書き手がこうした差異に配慮しながら談話を構成した結果が反映されたものだと考えられるだろう。このことは、前置詞のメタファー的意味の特性を探る上では、従来想定されてきたような写像の起点領域の性質やそれとの対応関係だけでなく、目標領域 (今回の場合、談話領域) が独自に担う性質を考慮する重要性を示している。実際の言語使用に見られる生起パターン、および、それに基づいて形成される言語知識を明らかにする上では、起点領域からの写像関係のみを過度に重視するのではなく、目標領域の性質がどのように語彙の振る舞いを動機づけているかを深く分析・考察することが必要であろう。

さらに、今回抽出した例のうち、空間用法の *above/below* はそれぞれ約 6 割が補部名

詞句を伴う前置詞的用法で生起していたのに対し、談話指示用法の例はすべて補部名詞句を伴わない副詞的用法で生起していた。これ自体は先行研究での指摘と合致するが (cf. 2.2 節)、Deignan (2005) が示した品詞シフトの観点から見ると、興味深い事実として捉え直すことができる。*above/below* は空間領域では前置詞的にも副詞的にも用いられるが、談話領域では副詞的な使用に限定されており、一種の品詞の転換が見られる。そして、この背景には、書き言葉では *above/below* の生起位置が暗黙のランドマークになるという談話の構造に基づく動機づけがあると考えられる。この事例も、語彙がメタファーの意味を表す場合、その文法的な生起パターンが目標領域の性質によって形作られる側面を持つことを示している。

6.2. 談話・文脈を見る意義

本稿では、これまで認知言語学の枠組みで多く扱われてきた前置詞の振る舞いを、談話や言語使用の観点を取り入れて分析した。1 節で触れたとおり、認知言語学は用法基盤主義の立場を取り、理論的には文脈の役割を重視しているものの、実際の分析対象は単一の文や命題が中心であるという指摘がなされてきた。それに対し、本稿は実例を基に *above/below* の振る舞いを比較し、両者の生起環境にさまざまな相違が見られること、その相違が単文を超えた談話の構造によって動機づけられていることを示した。*above/below* の用法に見られる非対称性は、文章の書き手が談話の流れや読み手の知識状態に配慮しながらテキストを構成・展開していると考えerことで初めて説明できる。本稿の成果は、これまで主にメタファーやメトニミーといった認知プロセスに基づいて説明されてきた多義的な前置詞の振る舞いにも、談話や文脈、書き手と読み手のコミュニケーションといった語用論側面や、実際の言語使用における動的側面が深く関わっていることを示唆する。つまり、崎田・岡本 (2010) が指摘した認知とコミュニケーションの相互関係を重視するアプローチの重要性を、具体的な分析事例を基に示していると言えるだろう。また、本稿は、前置詞の意味やメタファーに関する研究を指示表現や談話構造に関する研究と結び付け、応用した事例としても位置づけることが可能である。本稿で得られた成果は、それぞれの研究分野の知見を融合させ、双方向の発展を促す可能性を持つと言えるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿では、談話指示用法の *above/below* を BNC の実例を基に比較し、両者の文法的な振る舞いや生起環境にさまざまな非対称性が見られること、その非対称性が談話の構造に動機づけられていることを示した。それを基に、前置詞がメタファーの意味を表す場合、その言語的振る舞いのパターンは、メタファー的写像の起点領域だけでなく、目標領域の性質によっても動機づけられていることを論じた。このことは、空間的意味との対応関係

を重視しがちであった前置詞のメタファー的意味に関する研究に対し、目標領域の性質を考慮することの重要性を示している。

認知言語学の前置詞研究においては、特に多義的な *over* に関する研究が多く、*above/below* の振る舞いはそもそも注目されてこなかった。しかし、事例の生起環境を見ると談話指示用法の *above/below* の振る舞いには様々な興味深い特性が見られ、その特性には、情報構造に関わる語用論的な側面、指示対象の探索しやすさに関わる認知的な側面、前置詞の意味拡張の背景にあるメタファーのプロセスといった複数の要因が関わっている。このことは、前置詞のような文法的要素の研究にも、生起文脈や談話、言語使用といった動的な要素を積極的に取り込み、複合的視点から分析を行う重要性を示している。

談話指示の表現には、*above/below* のほか、*earlier/later*、*preceding/following*、*this/that* など多くの表現が見られる。今後の課題としては、(i) 複数の談話指示の表現を比較して各語彙における談話指示の特性を明らかにすると共に、(ii) その特性が生じる動機づけを、各語彙に結びつくほかの用法 (e.g. *earlier/later* が時間を表す用法) との関連から探ることが挙げられる。

参考文献

- Boers, F. 1996. *Spatial Prepositions and Metaphor: A Cognitive Semantic Journey along the UP-DOWN and the FRONT-BACK Dimensions*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brugman, C. M. 1981. *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. M.A. Thesis, University of California, Berkeley. Published from New York/London: Garland Press in 1988.
- Charles, W. G. and G. A. Miller. 1989. "Contexts of Antonymous Adjectives." *Applied Psycholinguistics* 10(3): 357-375.
- Croft, W. and D. A. Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, A. D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Harvard University Press.
- Deignan, A. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Dewell, R. B. 1994. "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics* 5(4): 351-380.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Firth, J. R. 1957. *Papers in Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ford, C. E. 1993. *Grammar in Interaction: Adverbial Clauses in American English Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』東京：大修館書店。
- Gries, S. T. and N. Otani. 2010. "Behavioral Profiles: A Corpus-Based Perspective on Synonymy and Antonymy." *ICAME Journal* 34: 121-150.

- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on Transitivity and Theme in English: Part 2." *Journal of Linguistics* 3: 199-244.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd edition. London: Arnold.
- Horiuchi, F. 2016. "A Note on *Above* and *Below* for Discourse Reference: From the Perspective of Collocation." *The Geibun-Kenkyu: Journal of Arts and Letters* 110: 255-270.
- Hunston, S. 2002. *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』東京：ひつじ書房.
- Jones, S. 2002. *Antonymy: A Corpus-Based Perspective*. London/New York: Routledge.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lambrecht, K. 2000. "When Subjects Behave like Objects: An Analysis of the Merging of S and O in Sentence-Focus Construction Across Languages." *Studies in Language* 24-3: 611-682.
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1997. "The Contextual Basis of Cognitive Semantic." In J. Nuyts and E. Pederson (eds.), *Language and Conceptualization*, 229-252. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." In M. Barlow and S. Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, G. N. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lindstromberg, S. 2010. *English Prepositions Explained*, Revised edition. Amsterdam: John Benjamins.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*, Vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mettinger, A. 1994. *Aspects of Semantic Opposition in English*. Oxford: Clarendon Press.
- Otani, N. 2007. "A Cognitive Study of Antonymy: On the Stable Sense of the Particle *Down* in English." *English Linguistics* 24: 445-457.
- 大谷直輝. 2012. 「"John walked *over/under* the bridge" に関する一考察—文法の身体的な基盤と百科事典の意味—」、『言語研究』、141、47-58.
- 大谷直輝・澤田淳・深田智・佐藤博史. 2008. 「言語表現の非対称性とその認知的基盤」、『関西言語学会プロシーディングス』、28、380-384.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of*

the English Language. Essex: Longman.

嶋田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム』東京：研究社.

Stubbs, M. 2001. *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. Oxford: Blackwell.

Thompson, S. A. 1985. "Grammar and Written Discourse: Initial vs. Final Purpose Clauses in English." *Text* 5(1, 2): 55-84.

Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge: Cambridge University Press.

山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社.

共同注意確立過程における 話し手による指示詞の質的素性の選択*

平 田 未 季
秋田大学

In recent studies, it is assumed that the most basic function of demonstratives is to coordinate the joint attentional focus for communication (Diessel 2006). In a related vein, this paper analyzes the use of demonstratives in the process of establishing joint attention between interlocutors in spontaneous interaction. Specifically, I focus on the role the qualitative features of demonstratives play in this process and show how speakers select them in order to minimize imposition on addressees based on the status of their attention.

キーワード： 指示詞、質的素性、共同注意、相互行為、自然談話

1. はじめに

本稿では、会話参加者が、意図する対象に共同注意 (joint attention) を確立しようとする場面に注目し、その過程において、話し手が、発話ごとに変化する聞き手の注意の状態をモニターしながら、指示形式を選択している様子を示す。伝統的な指示詞研究では、指示詞の主機能は発話空間を分割 (demarcation) し、そこに対象を定位することだとされてきたが、近年、より伝達的な側面から指示詞を定義する研究が出始めている。そのような研究の1つである Diessel (2006) は、従来の研究が指示詞の伝達的な側面を無視していることを問題とし、指示詞の第一義的な機能は、意図する対象に共同注意を確立するため、会話相手の注意の焦点を調整することであると主張した。

この主張に基づき、本稿では、話し手による指示形式の選択を分析するために、筆者が収集した自然談話データの中から、会話参加者が、意図する対象に聞き手の注意を誘導し

* 本研究は JSPS 科研費 (課題番号: 16K16816) の助成を受けたものである。本稿の執筆に際し、編集委員と3名の査読者の方々に、多くの貴重なコメントと改善のための建設的な指摘をいただいた。ここに記して感謝の意を申し述べたい。山本真理氏からは、データの転記、その解釈において有益な意見をいただいた。ただし、当然ながら、本稿の不備および誤りの責任は全て筆者に帰するものである。

共同注意を確立させようとする活動（以下、これを共同注意確立活動と呼ぶ）を行っている場面を分析の対象とした。具体的には、話し手が特定の対象に向けて会話相手の注意を誘導・調整するための行動を開始した時点から、会話相手の反応によりその対象に共同注意が確立したと解釈することが可能になった時点までを1つのまとまりと捉え、分析の対象とした。近年、自然談話データを用いた指示詞研究は増えつつあるが、伝統的な文法研究と同じように単一の文を分析対象とする研究もあれば、複数の発話を含む談話レベルの分析を行う研究もあり、それぞれの研究が自然談話データの中で分析の対象となる範囲を任意に設定している。本稿では、共同注意確立活動を分析単位とし、その活動中から活動終了後にかけての指示形式の分布を分析することで、話し手が、時間軸に沿って展開する談話の中で、発話ごとに変化する動的な要因に基づき指示形式を選択している様子をより明確に示すことができると考える。

本稿では、共同注意確立活動に注目した指示詞分析の一例として、日本語指示詞の質的素性 (qualitative feature) の分析を提示する。質的素性とは、指示対象を分類するための情報であり、日本語指示詞では、「コ-」、「ソ-」、「ア-」に後接される接尾辞「-レ」、「-コ」、「-ッチ」等がこの情報を担っている。これまで、日本語指示詞に関する研究でも、他の言語の指示詞に関する研究でも、この質的素性に対する語用論的な分析はほとんど行われてこなかった。本稿では、ガイドが複数の聴衆に対して説明を行う場面を例とし、共同注意の確立が比較的困難な文脈において、話し手であるガイドが、対象の特定における聴衆の負荷を減らすべく、聴衆の注意の状態をモニターしながら戦略的に指示詞の質的素性を切り替え、共同注意の焦点を操作していく様子を示す。

2. 自然談話データを用いた指示詞研究

指示詞は文脈依存的 (context-dependent) な性質を持つ直示表現の1つであるが、従来の言語類型論的研究は文法書等の二次的なデータを、その枠組みを用いた個別言語の指示詞研究は内省に基づく作例を主な分析対象としており、指示詞使用の実態が実際の状況の中で検証されることはほとんどなかった。これに対し、90年代頃から、言語の使用場面に基盤をおく研究への関心の高まり、またその詳細な観察を可能にする撮影機器や分析技術の発達を背景に、相互行為的な文脈を分析に導入した個別言語の指示詞研究が発表され始めた (Hanks 1990, Laury 1997, Özyürek 1998, Strauss 2002, Burenhult 2003, Enfield 2003, Meira 2003 等)。

彼らは、従来の研究が 'proximal'、'distal' という話者中心で静的な概念を指示詞分析の中心においてきたことを批判し、自発的な相互行為場面の撮影・録音データ (Hanks 1990, Özyürek 1998, Burenhult 2003, Enfield 2003)、口語コーパス (Laury 1997, Strauss 2002) 等を用いて、個別言語の指示詞の意味機能を再検証した。これらの指示詞

研究は、指示詞が発話された場面の物理的な文脈情報のみならず、発話ごとに変化する聞き手の注意や知識の状態、それに基づく対象へのアクセス可能性という相互行為的な文脈情報を取り入れた分析を行うという共通点を持つ。

しかし、データから分析対象となる範囲をどのように切り取るかという点に関しては、それぞれの研究で異なりが見られる。(1) のように、指示詞を含む単一の文のみを分析対象とする研究もあれば、それに対する応答も分析対象に含める研究、さらに (2) のように複数の指示詞を含む一連の会話を分析対象とする研究もある。

(1) Enfield (2003) によるラオ語 (Lao) 指示詞の分析¹

(市場で肉の値段を聞いた客に対し)

Merchant: Nan⁴ one is 16 per kilo.

(Enfield 2003: 95, 括弧内, 下線は筆者による)

(2) Strauss (2002) による英語指示詞の分析

(空港の荷物検査に関する実験を行った Schiavo に Lauer がニューススタジオでインタビューを行っている)

Lauer: you expected that bag ta go onta Washington withoutchu on the plane
= and thee airport did (.) stop the bag, didn't they?

Schiavo: Absolu:tely. Fer whatever reason, that bag was sto::pped.

((2 skipped turns))

Lauer: Now were you trying ta make this- this package this suitcase look like a bomb? (Strauss 2002: 134, 括弧内, 下線は筆者による)

Strauss (2002: 132-134) は、一連の会話を分析対象とすることで、(2) のように、1つの対象を指すために複数の指示形式が用いられるという従来の研究では指摘されてこなかった指示詞の用法と分布が観察できると述べた。トルコ語指示詞を分析した Özyürek (1998)、ジャハイ語 (Jahai) 指示詞を分析した Burenhult (2003) も同様の現象を指摘している。彼らは、このような指示形式の交替を説明するために、話し手が聞き手に求める注意の強弱の度合い (Strauss 2002)、対象に対する聞き手の注意の状態 (Özyürek 1998, Burenhult 2003)、対象への認知的なアクセス可能性 (Burenhult 2003) 等、会話参加者の間の相互行為と密接に関連する動的な概念を分析に導入した。

指示形式の交替を分析する研究の多くが「注意」という概念を用いていることは興味深い。本稿では、これらの研究が注意に関わる概念を用いて記述する指示詞使用の背景に

¹ nan⁴ はラオ語指示決定詞 (demonstrative determiner) であり、同じく指示決定詞である nii⁴ とともに 2 項対立の体系を成している。Enfield (2003) は、ラオ語の例を記述する際、分析対象である指示決定詞以外は英語で表記している。

は、言語を用いたコミュニケーションの根本に関わる共同注意という事象があると考え、自然談話データを用いた指示詞分析において、共同注意確立のための一連の活動を分析の単位とすることを提案する。共同注意確立活動は、文の数や長さという言語的な単位ではなく、共同注意の確立という指示詞の伝達的な機能を基盤とした分析単位である。この活動を分析単位とすることで、指示形式の交替が会話参加者間の相互行為の中で伝達的な目的達成のために行われていることがより明確になる。

指示詞と共同注意の密接な結びつきは、Diessel (2006) を始めとする指示詞分析の枠組みに関わる研究において指摘されている。次節では、これらの研究を簡単に紹介した上で、本稿が分析対象とする共同注意確立活動の定義を行う。

3. 共同注意の確立と指示詞の使用

3.1. 指示詞の伝達機能

2節で紹介した個別言語の指示詞研究と前後し、指示詞に関する理論的な研究においても、使用場面に即した分析の重要性が指摘され始めた。Diessel (1999)、Levinson (2004) は、指示詞体系には空間情報を持たない形式も含まれるという経験的な観察をもとに、指示詞の最も重要な機能は、話者を中心とした対象の空間定位ではなく、会話相手の注意を発話場面の物理的な文脈に引き付けるという伝達的な機能であると主張した (Diessel 1999: 2, 37-38, Levinson 2004: 101)。Diessel (2006: 469) は、この会話相手の注意の引き付けという指示詞の機能は、話し手が意図する特定の対象に向けて共同注意を確立させようとする過程において寄与すると述べた。

共同注意とは、話し手と聞き手がある対象に注意を向けており、かつその事実を互いに共有しているときにのみ成立する社会的な相互作用である (Tomasello 1995, 1999, Eilan 2005)。前言語期の子どもは、他者と注意を共有するため、指さし等の直示ジェスチャーおよび頭や視線の向きを手がかりとするが (Corkum and Moore 1995: 63)、やがて、共同注意を操作するための新たなツールとして言語を獲得する (Tomasello 1999, ch. 4)。その獲得段階の初期に生じ、前言語期の共同注意行動と共起することが多い指示詞は、言語表現の中でも共同注意の確立と最も密接に結びついた範疇だとされている (Diessel 2006: 469 等)。

3.2. 共同注意確立活動

以上の議論に基づき、本稿では、自然談話データを用いた指示詞の分析において、会話参加者が特定の対象に共同注意を確立させようとする場面で生じる一連のやりとりを共同注意確立活動と呼び、これを分析対象とすることを提案する。具体的には、会話参加者の1人が特定の対象へ共同注意を確立させようとする行動を開始した時点から、共同注意が

確立されたことが会話参加者間で認識可能となったと話者がみなし、その行動を停止する時点までを1つのまとまりと捉え、その活動中から活動終了後にかけての指示形式の分布を観察する。活動の範囲については、前言語期から共同注意行動として使用されている指さし等の直示ジェスチャーの開始・終了および頭や視線の向きの変化、そして、それまでの活動との切り替わりを示す言語行動を指標とし、これらを複合的に考慮して開始時点と終了時点を判断する。

筆者が収集した自然談話データから共同注意確立活動の例を1つ挙げる。データの詳細については5.1節で詳述するが、(3)は、話し手であるガイドGが、桜並木に向けて聴衆の注意を誘導しようとしている場面である。²

(3) ソメイヨシノ

01 (Gは聴衆と雑談をした後、笑いながら徐々に視線を指示対象の方に向けてる)

02 G: じゃああの一 今駐車場の方見ていただいてますが ここ
| 駐車場を見ながら右手を差し出す

03 G: 今ね 葉っぱだけなので何が何だか分からないと
| 並木をなぞるように右手を左方向に移動

04 G: と思いますが これ ソメイヨシノです
| 手をおろす | 聴衆の方に向き直る

05 A: ああ一

06 G: 2キロの花のトンネルと言われているソメイヨシノになりますね

07 G: およそ四百本ほどあります

08 A: へえ一

² 以下の例において、下線部は指示形式を、点線部は対象特定のため用いられる実質名詞を示している。また、「G」はガイドの発話を、「A」～「D」は聴衆の発話を表す。「?」は発話者が分からない発話を表す。囲み点線は共同注意確立活動の開始から終了までを示している。発話と同時に行われたジェスチャーは発話の下行に記載し、「|」によりジェスチャーの開始時点を表す。発話前後の動きは、独立した行の括弧内に記載する。紙幅の都合上、共同注意確立活動外のジェスチャーの記述は省略する。

また、例に添えられた図における「SPKR」、「ADDR」、「REF」はそれぞれ、話し手、聞き手、指示対象を示している。



図1 活動開始前

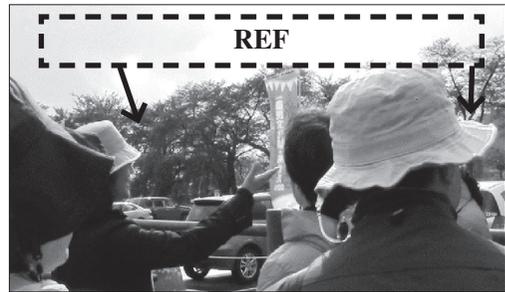


図2 02行目

Gは雑談の間、聴衆と目を合わせていたが、01行目で笑いながら徐々に視線を意図する対象である桜並木の方に移動させていく。そして02行目で「じゃあ」と発話を開始し、指示対象が位置する方向に視線を固定し、右手でそちらを手さししながら「ここ」と発話する。この視線の移動と、手さしという直示ジェスチャーの開始により、Gは共同注意確立活動が開始されたことを聴衆に明示的に示し、さらに直示ジェスチャーとともに指示詞を発話することで聞き手が物理的文脈に注意を向けるべきであることを知らせる。そして04行目で、対象特定のために十分な情報を与えたと認識したGは、手を下ろして直示ジェスチャーを終了し、体ごと聴衆の方に向き直り、視線を指示対象から外す。05行目の聴衆の「あー」という反応は、桜並木に共同注意が確立したという話し手の判断を保証し、さらに聴衆はそれがソメイヨシノだと理解したということを示している。このように対象に対する注意の共有が会話参加者全員に明白になった時点で、共同注意確立活動は終了し、06行目以降では、Gは桜並木についての説明という次の活動に移行する。

このような共同注意確立活動は、指示対象の特定しやすさや聞き手の注意の状態に応じて、そこに含まれる指示形式を用いた指示 (reference) の数が増える。(3) のように、2つもしくはそれ以上の指示形式が用いられる活動もあれば、1つの指示形式で共同注意が確立したとみなされるケースもある。³ 本稿では、1つの対象を特定するまでに、2つも

³ 1つの指示詞で共同注意が確立したとみなされる例を角館データから1つ挙げる。

(i) しだれ桜

(Gは通りの途中で立ち止まり、後ろを振り返って聴衆が追いつくのを待つ)

01 G: でこれあー
 |正面の聴衆を見たまま右手を180度回して左横の桜を手さしする
 02 G: 道路にしだれているの はすべてしだれ桜になります
 |右手で円を描く |右手を下ろす
 03 ?: ふーん

(i) の指示対象であるしだれ桜はかなり大きい木であり話者のすぐ隣にある。筆者が収集したデータの中で、1つの指示形式で共同注意が確立したと話し手がみなすケースは、指示対象が話し手もしくは聞き手に明らかに近接している場合が多かった。一方、本稿が分析対象とする複数の指示形式

しくはそれ以上の指示形式を用いた指示が行われる共同注意確立活動を分析対象とする。指示形式切り替え前後の文脈を観察することで、聞き手との相互行為の中で話し手がどのような要因に基づき指示形式を選択しているのかを明らかにすることができるからである。実際にデータを分析する前に、次節で、本稿が分析する指示詞の質的素性の概要を紹介する。

4. 指示詞の質的素性

通言語的に、指示詞の意味は、直示素性 (deictic feature) と質的素性の2つから成る (Diessel 1999: 35)。前者は直示中心から指示対象までの相対的距離等の空間情報を、⁴ 後者は指示対象を分類する上での情報 (指示対象が物体か人か場所か、女性か男性か、単数か複数か等) を表すとされている。直示素性と質的素性は、英語指示詞の *this*, *that*, *these*, *those* のように、不可分の単一形態素から成る指示形式の中に混ざり合っている場合もあれば、異なる2つの形態素がこれらの素性を独立して担っている場合もある。例えばトルコ語指示詞 *bura* では、話し手への近接性を示す *bu* は直示素性を、指示対象が場所であることを示す接尾辞 *-ra* は質的素性を担っている。

日本語指示詞も、トルコ語と同様に、直示語根「コ-」、「ソ-」、「ア-」と、接尾辞「-レ」、「-コ」、「-ッチ」等がそれぞれ直示素性と質的素性を表している。⁵ しかし、国語学・日本語学の分野では、直示素性に関する研究は数多くあるが、質的素性に焦点を当てた研究は非常に少ない。佐久間 (1936) は、「コソアド」とそれに後接する形態素が一連の語彙として体系を成していることを指摘し、これを「指す語」と呼んだ。寺村 (1968) は、名詞を意味的に分類する中で、指示詞の質的素性について触れ、「コソアド」に後接するそれぞれの形態素が示す素性は、「日本人が外界の事物や概念をどう類型化しているかを暗示する」(p. 56) ののだと述べた。指示詞研究では、金水 (1990) が質的素性「-チラ」を取り上げ、これが「方向」から派生した「二極選択」という用法を持つことを指摘した。また、小川・澤田・大谷 (2011) は、コーパス調査に基づき、「-イツ」の指示範囲の拡大に関する分析を行った。

以上のように、質的素性に関する先行研究は非常に限られており、金水 (1990)、小

を含む事例は全て、指示対象が対話参加者からある程度離れた位置にあるときに生じていた。

⁴ ただし、上述の通り、近年の指示詞研究では、距離等の空間概念に加え、聞き手の注意の状態に関連するより相互行為的な要因を用いて直示素性を記述している。

⁵ 日本語指示詞には「この」の「-ノ」、「こう」の「-ウ」等、指示形式が現れる統語環境に関する情報を表示する形態素も含まれる。これらは統語素性 (syntactic features) と呼ばれるべきものであるが、本稿では、便宜上、直示素性を表示する「コ-」、「ソ-」、「ア-」に後接する形態素を持つ情報をすべて質的素性と呼ぶ。

川・澤田・大谷（2011）等の数少ない例外を除けば、「本」なら「-レ」、空間であれば「-コ」というように、話し手が対象の内在的識別特性（intrinsic differentiating properties）に応じて質的素性を選択することが前提とされてきた。⁶しかし、実際の運用においては、話し手は常に対象の内在的識別特性のみに基づいて質的素性を選択するわけではない。例えば、本を指す場合、常に「これ」が選択されるとは限らない。本そのものを指す代わりに「ここ」、「こちら」を用いてそれが存在する空間を指す場合もあれば、実質名詞を伴った「この本」もしくは「この本」、「こちらの本」という指示も可能である。さらに、自然談話データでは、(3)のように、1つの対象への共同注意の確立までに、これらが組み合わされて使用される例も頻繁に観察される。このように多様な指示の形式を話し手はどのように使い分けているのか。次節では、自然談話データを用いて、共同注意の確立という相互行為上の目的を達成するため、話し手が聞き手の注意の状態をモニターしながら質的素性を選択し分けている様子を示す。

5. データ分析

5.1. データの概要と分析対象

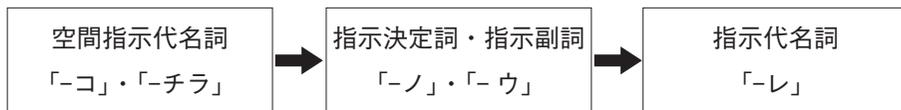
本稿で用いるデータは、2014年10月に、秋田県仙北市角館町の武家屋敷街通りにおいて撮影したデータ（以下、角館データ）である。本データでは、歴史案内人である同町出身のガイドが、聴衆10数名に対し、通りを歩きながら町の歴史や建造物について説明をする60分の観光案内を実施している。その様子を撮影した50分のビデオデータから、46例の共同注意確立活動が抽出された。この46例のうち、2つ以上の指示形式を含む共同注意確立活動11例を本稿の分析対象とする。

5.2. 共同注意確立活動と質的素性の分布

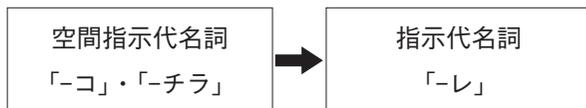
11例の活動中から活動終了後にかけての質的素性の主な分布を図3に示す。

⁶ 2節で紹介した自然談話データを用いた指示詞研究においても、質的素性に関する言及は非常に少なく、ほとんどの研究が指示代名詞や場所を表す指示副詞を分析から除き、分析対象を指示決定詞に限定している（Enfield 2003, Burenhult 2003 等）。唯一、Strauss (2002: 150-151) は、コーパス分析に基づき、英語指示詞の this と that が現れる統語環境を調査し、this は指示決定詞として用いられる頻度が高いのに対し、that は指示代名詞として現れる頻度が圧倒的に高いと述べ、この差は両形式が聞き手に求める注意の強さの違いに基づくとして述べている。指示詞が現れる統語環境が、聞き手の注意の状態と関連して決定されるとする Strauss (2002) の主張は、本稿の結論と深く関わっており興味深い。この点に関する対照研究は今後の課題とする。

a. 4例



b. 3例



c. 4例

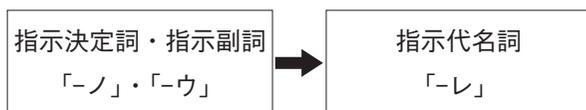


図3 角館データにおける質的素性の分布

以下、それぞれのタイプについて例を挙げながら説明する。

5.2.1. aタイプの例

aタイプの4例では、活動中からその後にかけて3種類以上の質的素性が用いられていた。4例のうち2例を以下に提示する。

(4) コビトマチ⁷

(ガイドGは聴衆の先頭に立って道路を渡る。渡り終わってから歩みを止め、後ろを向き話し始める)

01 G: はいこちらの方まっすぐ来たらドンとぶつかりますね ひとつの町内しか見えません(後方の聴衆が着いてきているか確認する)

02 G: でこの 鉄柱

↑右方の鉄柱に顔を向け手を上げて鉄柱を指す

03 (ちらっと聴衆を見てから、すぐに鉄柱に視線を戻す)

04 G: またふきやさんですが

↑上げた手を下方に移動させる

⁷「コビトマチ」の例のように、共同注意確立活動中から活動後にかけて、質的素性のみならず、直示素性も切り替えられる例が多く観察される。本稿では、質的素性を分析対象とするため、この点については触れないが、筆者は、直示素性も、質的素性と同様に、効率的な共同注意確立を目的とし、聞き手の注意の状態に基づいて選択されていると考える。この点についての詳しい議論は平田(2016)および平田・山本(2016)を参照されたい。

読み方に関するクイズという次の活動に移行するが、その際、町内名は「これ」という指示代名詞で指されている。

角館データから同様の例をもう 1 つ挙げる。

(5) ホホツエ

(ガイド G が背後にある蔵について聴衆に説明をしている)

- 01 G: ところが 二月三月の雪解けの時期になりますと土が混じって今度は雪がね汚くなる
- 02 ?: 汚い
- 03 ?: 汚いの
- 04 G: これがし全部白だと蔵に汚れがつくということで ま カバーですよ
- 05 ?: ふーん
- 06 G: を こう カバーをつけてます
- 07 (聴衆と向かい合っていた G は体を後方に向けて顔を上げ、蔵の上部を見上げる)
- 08 G: それからまたここにこう つっかえ棒があります
| 蔵の上部に向け手を上げる | 上げた手を右から左へ移動させる
- 09 ?: つっかえ棒があります
- 10 G: これ全部こううちのまわりグルッと
| 上げている手を指さしに変え、指さしで円を描く
- 11 G: これはホホツエといいます
| 指さしを下ろし、聴衆の方に向き直る
- 12 (G の正面の聴衆数名が頷く)
- 13 G: みなさんはホホツエはどーんな時に使いますか?

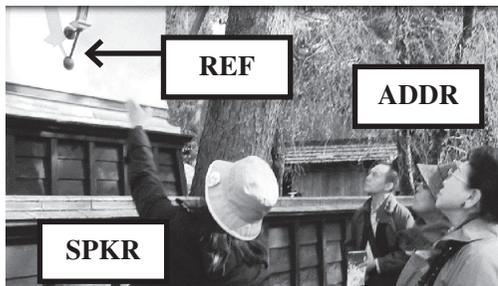


図 6 08 行目



図 7 11 行目

(5) の共同注意確立活動開始前、G は蔵の前に立ち止まり、正面の聴衆に視線を向けながら、蔵の造りについて説明を行っていた。06 行目で説明をひと段落させた後、07 行目で

Gは、背後を振り返り、指示対象である「ホホヅエ」がある蔵の上部に向けて頭を上げる。聴衆はそのGの頭の向きと視線の変化を追い、顔を上げ、Gの意図する対象を検出しようとする。Gが共同注意行動を始めたこの時点を中心として共同注意確立活動の開始時点と考える。続けて、08行目でGは「それから」と発話すると同時に、蔵の上部に向けて左手を大きく上げ、「ここ」と空間指示代名詞を用いて対象が含まれる空間を指す（図6参照）。さらに、続けて「こう」と指示副詞を発話し自らのジェスチャーに注意を向けさせると同時に左手を指示対象が位置する箇所に向けて移動させ、「つかえ棒」という実質名詞で聞き手が注意を向けるべき対象を特定する。09行目でその説明に対する聴衆の反応が生じるが、Gは直示ジェスチャーを停止せず、「これ」、「こう」と指示代名詞を用いて物理的文脈へ注意を向けることを要求し続け、聞き手が注意を向けるべき対象は1つではなく複数であることを伝える。「こう」という指示副詞と、それに伴う円を描くという図象的 (iconic) ジェスチャーによって、複数の「つかえ棒」が蔵を取り巻いていることを伝えた後、11行目でようやくGはジェスチャーを停止し、頭の向きと視線を聴衆に向け、「ホホヅエ」という指示対象の名称を導入する。12行目で、視線を向けられた複数の聴衆が頷きを見せたことで、Gは注意の焦点が共有され、その名称が「ホホヅエ」であることも理解されたと解釈し、「ホホヅエ」に関するエピソードの披露という別の活動に移行する。

以上の2つの例では、話し手であるGは、指示詞の質的素性を切り替えながら、意図する対象もしくはランドマークとなる対象周辺の事物を指し、段階を踏んで指示対象へ聞き手の注意を誘導している。これらの例の共通点は、発話場面で指示対象の特定が困難であり、対象を直接指示するだけでは共同注意確立のための聴衆の負荷が大きいとGが考えているという点である。以下、指示対象の特定が困難な場面について、共同注意行動の発達段階を参考として考察する。

6か月から18か月の幼児の共同注意行動の発達を調査した Butterworth (1995) は、共同注意行動には以下の3つの発達段階があるとし、後者ほど、対話相手が意図する対象を検出するうえでの負荷が高く、その出現が遅れるとしている。

(6) 共同注意確立のための行動の3つの発達の段階

- a. 視野内で相手が見た方向へ頭を向け、走査線 (scan path) 上にある最初の目標物を特定する。
- b. 相手の視線を追い、視野内の複数の候補の中から正確に目標物の位置を捉える。
- c. 視野内に目標物がないとき、背後を参照して目標物を特定する。

(6a) に比べ、獲得が遅れる (6b) の場面では、複数の候補から意図する対象を検出しなければならないため、細かな注意の調整 (attention-coordinating) が必要になる。(6c) の

場面では、頭を動かし視野外の対象を検出するため、注意の転換 (attention-switching) が必要とされる。この調査は主に前言語期の幼児を対象としたものだが、本稿では、言語を用いる成人間のコミュニケーションにおいても、(6a) に比べ (6b, c) の場面では話し手の意図する対象の検出がより困難であるため、共同注意の確立までに複数の指示形式が用いられる傾向があると考えられる。

角館データから抽出した3種類以上の質的素性を含む a タイプの共同注意確立活動4例は全て、上述の、注意の転換、注意の調整という段階を経て、共同注意の確立に至っていた。(4)、(5) で示した通り、この各段階で、話し手は質的素性を図8のように切り替えていた。以下、それぞれの段階における質的素性の分布について説明する。

まず、「-コ」、「-チラ」を用いた注意の転換は、指示対象を検出するために聞き手が頭の向きを変える必要がある場面で生じる。このような場面では、話し手は直接対象を指さず、まずは聞き手の注意を指示対象が含まれる空間へ誘導しようとする傾向がある。例えば、(4)、(5) では、話し手は、活動開始直後に「ここ」という空間指示代名詞を用いて、(4) では道の反対側に、(5) では蔵の上部に聞き手の注意を大きく転換させようとしている。

次に、視野内の複数の候補の中から意図する対象へと聞き手の注意の焦点

を調整していく過程では、指示決定詞や指示副詞が選択される傾向がある。これらの指示形式の特徴は、その構造上、より特定のな情報を伴いうることである。指示決定詞はその後に必ずより特定のな実質名詞を伴う。また、指示副詞の場合、例えば (5) では、話し手は「こう」と発話することで自らのジェスチャーに注意を向けさせ、直示ジェスチャーに加え図像的ジェスチャーを用いて、聴衆が指示対象を特定するための手がかりを与えていた。実質名詞や図像的ジェスチャーが持つ文脈非依存的な情報は、聞き手の注意の正確な操作に寄与するものである (Tomasello 1995: 115 参照)。ただし、この段階では、話し手はこのような文脈非依存的な情報をそのまま提示することはせず、必ず、直示ジェスチャーを伴う指示詞という文脈依存的な情報を付加する。これにより、話し手は、まだ共同注意確立活動は終わっていないこと、そのため発話場面の物理的な文脈から注意をそらすべきではないことを聞き手に伝えている。

最後に、やりとりから聞き手が意図する対象に到達したと話し手が解釈した共同注意確

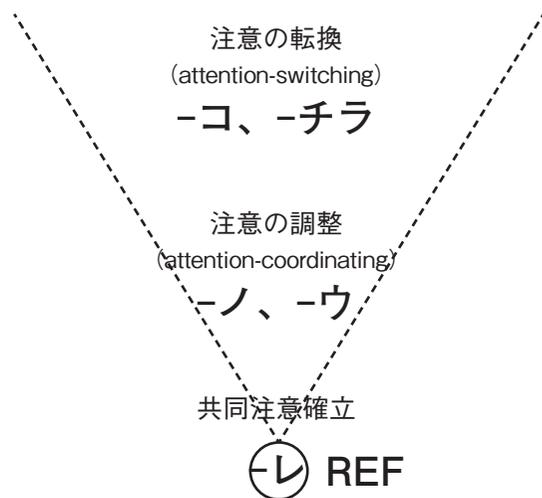


図8 共同注意確立過程における聞き手の注意の焦点と質的素性の分布傾向

立活動の後半、もしくはその終了後は、(4)でも(5)でも「-レ」が選択されていた。この質的素性の切り替えと、直示ジェスチャーの停止や視線の向きの変化により、話し手は活動前後のコントラストを形成し、共同注意確立活動が終了したこと、そのためもう物理的な文脈に注意を向け続ける必要はないことを聞き手に明示的に告げている。

5.2.2. bタイプの例

図3でbタイプとして示した共同注意確立活動には、図8における注意調整の段階が含まれない。角館データには、このような活動例が3例見られた。3.2節で(3)として提示した「ソメイヨシノ」はその1つである。(3)を(7)として再掲する。

(7) ソメイヨシノ

01 (Gは聴衆と雑談をした後、笑いながら徐々に視線を指示対象の方に向ける)

02 G: じゃああのー 今駐車場の方見ていただいています ここ
| 駐車場を見ながら右手を差し出す

03 G: 今ね 葉っぱだけなので何が何だか分からないと
| 並木をなぞるように右手を左方向に移動

04 G: と思いますが これ ソメイヨシノです
| 手をおろす | 聴衆の方に向き直る

05 A: ああー

06 G: 2キロの花のトンネルと言われているソメイヨシノになりますね

07 G: およそ四百本ほどあります

08 A: へえー

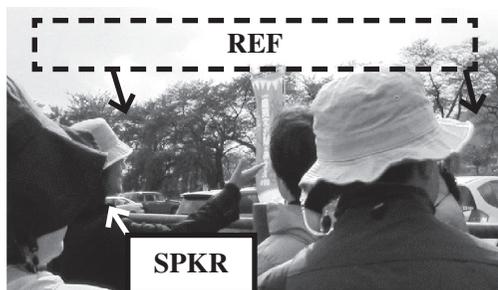


図9 02行目



図10 04行目

3.2節で述べた通り、Gは、自らの方を見ている聴衆の注意を、聴衆の右側に位置する駐車場へ転換させるべく、活動開始前から徐々に視線を移動させていく(01行目)。02行目で手さしをしながら「ここ」と発話し、意図する対象が含まれる空間が聴衆の視野に確

- 14 (Gは電柱のほうに向き直り右手で再び看板を指すが、すぐ下ろす)
 15 G: これね オカチマチと読みます オカチマチ
 16 ? : オカチマチ?
 17 ? : ああー (複数の歓声)

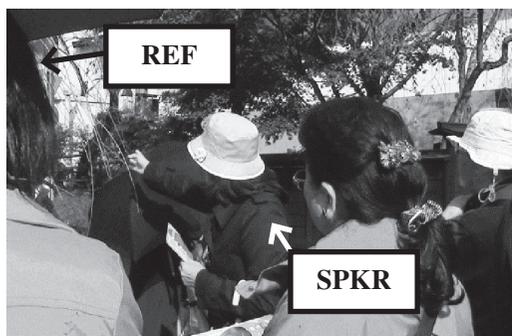


図 11 02 行目



図 12 08 行目

(8) では、活動開始前、話し手 G は道の隅に立ち止まったまま 5 分以上説明を続けており、その間聴衆も移動せず、視線を持続して G に向け続けていた。この (8) の活動前の状況と、5.2.1 節で提示した (4) の活動前の状況は対照的である。

(4) と (8) は、どちらも鉄柱に貼られた町内名の表示が指示対象であり、この対象への共同注意確立活動が町内名の読み方に関するクイズという活動の前段階になっているという構造も共通している。ただし、活動開始前の聴衆の注意の状態は (4) と (8) で大きく異なる。前述の通り、(4) の活動開始前、G と聴衆は道を渡って移動をしており、G が発話を開始した時点では、各人の位置も注意の向きもばらばらであった (図 13 参照)。それに対し、(8) では、活動開始前から聴衆は一貫して G に注意を向け続けている。01 行目で G が指示対象である鉄柱に視線を向け、「であのー」と発話した時点では、G の左側にいる聴衆の視野には指示対象が含まれているが、その他の位置にいる聴衆は指示対象を検出するため背後を振り向く必要があった (図 14 参照)。しかし、G は、(4) のように空間指示代名詞で対象が含まれる空間を指示することなく、活動の冒頭から指示決定詞「この」を用い、地図から鉄柱へと細かく聴衆の注意を誘導・調整していく。これは、活動開始時点で既に自らが十分に聴衆の注意を引き付けているため、聴衆は自分の行動に合わせ容易に注意の焦点を調整できるという G の判断によるものだと考えられる。それに対し、(4) では、G は発話開始前に首を伸ばし何度か聴衆の位置とその注意の向きを確認している (図 13 参照)。この聞き手の注意の状態に関する判断の差により、G は、ほぼ同一の鉄柱を、(8) では「この鉄柱」と指しているのに対し、(4) では「この鉄柱」と空間指示代名詞と実質名詞という有標な組み立てで指すことを選択している。



図13 (4)の活動開始前



図14 (8)の活動開始前

5.3. より相互行為的な共同注意確立活動との比較

以上、角館データを用い、話し手が、共同注意の確立が困難な場面で、聞き手の注意の状態をモニターしながら段階を踏んで指示を行っていること、そしてその各段階で指示詞の質的素性を切り替えていることを示した。以上のデータでは、話し手であるガイドの発話は非常によくオーガナイズされているため、話し手が段階を踏んで指示を行っている様子が明確に観察された。これに対し、より相互行為的な場面における共同注意確立活動の一例として(9)を提示する。(9)は、展望台における先輩の学生(B)と後輩の学生(A)のやりとりを撮影したデータの一部である。(9)の会話が始まる前、AとBは2人の左手の方向にある対象(REF1)について話していた。その話が終わった後、Aは右手の方向に気になる対象(REF2)を見つけ、そちらに向かって視線を移動させ始め(図15参照)、01行目の発話を開始する。

(9) なんとかドーム

- 01 A: あれは あれはドームですか なんとかドームですか
 |REF2に向け腕を伸ばし指さし |指を左右にふる
あれは
- 02 B: えっ どれ山?
 |Aの方に歩み寄り、体を傾けて指さしの先を見る
- 03 A: あの白い山みたい な
 |腕を伸ばしたまま指を細かく動かす |指さしをおろす
- 04 A: ちょうどなんか雪ほんと雪山みたいな
 |再び腕を伸ばして指さしをし大きく左右にふる
- 05 A: やつ あれなんですかね
 |腕をおろす |腕を組む
- 06 B: あ わかんない だってツドームこっちだもん
 |一歩前に出て指さし

07 A: ですよね 札幌ドームあんなじゃないですよ

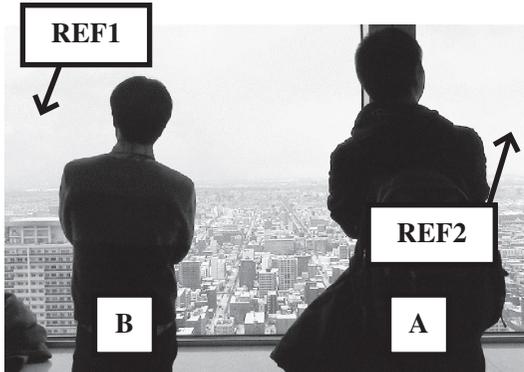


図 15 (9) の活動開始前



図 16 02 行目

01 行目の発話時に、A の意図する対象 (REF2) は B の視野外にあった (図 15 参照)。さらに、窓外には指示対象候補となるものが数多くあり、対象の特定のためには細かな注意の調整が必要であった。(9) の場面は、対象の特定のしにくさという点で、角館データの (4)、(5) の場面と類似している。しかし、A は、ガイド G のように、注意の転換、注意の調整という段階を踏まず、01 行目で、まだ B の視野に入っていない対象を直接「あれ」と指し、共同注意確立活動を開始する。それと同時に A は「ドーム」という対象の形状に関する手がかりを与えてはいるが、B は対象を特定できず、02 行目で A の方に歩み寄り、体を前に傾けて B の指さしの先を見つめるとともに「どれ山?」とさらなる情報を求める (図 16 参照)。それに応え、03 行目から A は、「あれ」を「あの」という指示決定詞に切り替えて注意調整の段階を開始し、活動を修復する。「あの」とともに「白山みたいな」と、B が把握している情報に合わせた手がかりを与え、さらに指さしをしている指を、対象をなぞるように動かし、畳みかけるように「雪山」という情報を与える。これにより、対象特定のための情報を十分に与えたと判断した A は、指さしを停止し、腕を組み、指示形式を「あれ」に戻す。06 行目の B の発話は、01 行目の A の質問への答えとなっており、対象が特定されたという A の判断を保証している。

A の発話によって開始される共同注意確立活動は、角館データでガイド G が行っているものに比べ、オーガナイズされていない。そのため、B は、自ら視野を転換する、質問を発するなどして、共同注意確立のために能動的に行動をしなければならない。本稿が角館データを用いて提示した、聞き手の負荷を減らすべく構成された共同注意確立活動の構造を知ること、(9) のように、聞き手の特定の失敗や話し手による活動の修復を含む、より複雑な共同注意活動の構造を理解することが容易になると思われる。

6. おわりに

以上、本稿では、自然談話データを用いて、話し手が特定の対象に向け共同注意を確立していく過程を詳細に観察し、話し手が、聞き手にとっての対象の特定のしやすさ、聞き手の注意の状態という相互行為的な要因に基づいて、指示詞の質的素性の表示を選択していることを示した。本研究は、共同注意確立活動という新たな指標を用いた指示詞分析を提案したという点、また、これまで行われてこなかった質的素性の使用に対する自然談話データを用いた分析を提示したという点で意義がある。

Levinson (2004) は、指示詞が聞き手の注意を発話場面の物理的文脈に引き付ける機能を持つのは、指示詞の意味が言語外の情報で補うべきスロット (slot) のようなものを持つためであるとし、これを「明白な意味的欠乏性 (obvious semantic deficiency)」(p. 101) と呼んだ。本稿で用いた自然談話データからは、話し手が指示詞のこの意味的な欠乏性を利用し、スロットを埋めさせるべく聞き手の注意を物理的な文脈へと引き付け続けながら、同時に非直示的な情報である質的素性を切り替えることによって、その注意の焦点を意図する対象に向けて調整していく様子が窺えた。

興味深いことに、角館データから抽出した 11 例全てにおいて、また上の (9) のようなより相互行為的なデータにおいても、話し手は、指示対象に対する情報を十分に与えたと判断すると同時に、素早く直示ジェスチャーを停止し、視線を指示対象から外し、さらに、質的素性を指示代名詞「-レ」に切り替え、次の活動を開始していた。伝統的な指示詞研究では、発話場面で知覚可能な対象へのジェスチャーを伴う指示は直示用法 (deictic use)、言語的に談話に導入された対象への指示は非直示用法であると定義されている。しかし、共同注意確立活動の後半もしくは活動後に現れる指示代名詞が指す対象は、発話場面に存在する物理的な対象ではあるが、活動の前半で言語的に導入された対象でもあり、しかもその指示においてジェスチャーは伴わない。このような指示は自然談話データにおいて頻繁に観察されるが、従来の定義では分類することが難しい。筆者は、指示詞の直示用法と非直示用法は、指示対象の違いという観点からではなく、対話参加者が従事している活動の違いと、それに伴い話し手が聞き手に求める注意の強弱という観点から論じることが適切であると考えているが、この点に関するさらなる分析は今後の課題とする。

参考文献

- Burenhult, N. 2003. "Attention, Accessibility, and the Addressee: The Case of the Jahai Demonstrative *ton*." *Pragmatics* 13, 363-379.
- Butterworth, G. 1995. "Origins of Mind in Perception and Action." In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 29-39. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.

- Corkum, V. and Moore, C. 1995. "Development of Joint Visual Attention in Infants." In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 61-84. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Diessel, H. 2006. "Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar." *Cognitive Linguistics* 17, 463-489.
- Eilan, N. 2005. Joint Attention, Communication, and Mind. In: N. Eilan, C. Hoerl, T. McCormack and J. Roessler (eds.) *Joint Attention: Communication and Other Minds: Issues in Philosophy and Psychology*, 1-33. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, N. J. 2003. "Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis." *Language* 79, 82-117.
- Hanks, W. F. 1990. *Referential Practice: Language and Lived Space Among the Maya*. Chicago: University of Chicago Press.
- 平田未季. 2016. 「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」、『国立国語研究所論集』、10、19-39.
- 平田未季・山本 真理. 2016. 「共同注意確立活動におけるア系の有標性—会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例—」、『日本認知言語学会論文集』、16、228-240.
- 金水敏. 1990. 「方向と選択—コチラ類の指示詞—」、『日本語学』、9: 3、4-21.
- Laury, R. 1997. *Demonstratives in Interaction: The Emergence of a Definite Article in Finnish*. Amsterdam: John Benjamins.
- Levinson, S. C. 2004. "Deixis." In: L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 97-121. Oxford: Blackwell Publishing.
- Meira, S. 2003. "Addressee Effects' in Demonstrative Systems: The Case of Tiriyo and Brazilian Portuguese." In F. Lenz (ed.) *Deictic Conceptualization of Space, Time and Person*, 3-11. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 小川典子・澤田淳・大谷直輝. 2011. 「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」、『*Proceedings of Kansai Linguistic Society* 31, 96-107.
- Özyürek, A. 1998. "An Analysis of the Basic Meaning of Turkish Demonstratives in Face-to-face Conversational Interaction." In: S. Santi, I. Guaïtella, C. Cavé and G. Konopczynski (eds.) *Oralité et gestualité: Communication Multimodale, Interaction*, 609-614. Paris: L'Harmattan.
- 佐久間鼎. 1936. 『現代日本語の表現と語法』東京：厚生閣.
- Strauss, S. 2002. "This, That, and It in Spoken American English: A Demonstrative System of Gradient Focus." *Language Science* 24, 131-152.
- 寺村秀夫. 1968. 「日本語名詞の下位分類」、『日本語教育』、12、42-57.
- Tomasello, M. 1995. Joint Attention as Social Cognition. In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 103-130. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.

[研究ノート]

学習者コーパスによる中間言語語用論分析： UAM CorpusTool Version 3.2 を用いた 要求の発話行為のケーススタディ

三 浦 愛 香

東京農業大学

This paper illustrates an annotation scheme for extracting requestive speech acts from a learner corpus, the National Institute of Information and Communication Technology Japanese Learner English (NICT JLE) Corpus, with the use of the Universidad Autónoma de Madrid CorpusTool (UAMCT). UAMCT is a downloadable free annotation software, and can be used for many types of pragmatic analysis. The tool's stand-off markup enables the construction of a multi-layered annotation scheme for requests produced by Japanese learners of English at different proficiency levels, making manual annotations less laborious than XML annotations. This study partly confirms the results of previous research in interlanguage pragmatics: that the use of conventionally indirect strategies increases with a developing proficiency (Kasper and Ross 2002; Trosborg 1995).

キーワード： 学習者コーパス、UAM CorpusTool、アノテーション、要求の発話行為

1. はじめに

本研究ノートでは、UAM CorpusTool(以下 UAMCT) と呼ばれるテキストにアノテーション(言語情報の付与)を施す無料のツールが、どのように語用論研究に役立つかを事例を用いて述べる。これは、Universidad Autónoma de Madrid(マドリード自治大学)の Mick O'Donnell 氏が開発したツールで、手動や半手動、そして自動的にテキストに言語情報を付与する機能を持つ。オリジナルのテキストには手を加えず、独立した XML ファイルにタグ情報を持つ「Stand-off markup」と呼ばれる構造を持つため、一つの言語特徴に異なるタグを多重に付与することが可能であり、多層のアノテーション構造を確立できる(O'Donnell 2013)。特に、文脈に依存した言語分析を必要とする意味分析や語用論分析、学習者コーパスのエラー分析に多く活用され、これまでに 90 本近くに及ぶ研究論文が発表されている(O'Donnell 2016)。

本稿では、UAMCT Version 3.2 を用い、日本人英語学習者の話し言葉コーパスである

The NICT JLE Corpus¹ から、学習者が要求の発話行為で使用した言語項目を抽出するアノテーション・スキームとその結果を提示する。The NICT JLE Corpus は、Standard Speaking Test (SST) と呼ばれるインタビューテストを受験した 1, 281 名の日本人学習者の発話を書き起こしたものである。

2. 研究の背景

2.1. 語用論とコーパス研究の融合

母語話者の発話例に基づいて論じられる語用論や談話分析の分野には、大規模データから得られる語彙や統語的特徴の頻度情報に基づくコーパスの手法は適合しなかったとされる (Rühlemann 2010; Thornbury 2010)。語用論的機能を文脈によって特定し手作業でタグを付与するの必要があり、時に分析者にとって文脈から推測することが容易とは限らず、部分的に自らの直観に頼って分類する傾向にあるのは否めないからである (Adolphs 2008, Romero-Trillo 2008)。一方、発話の語用論的な解釈に、コーパスがもたらす計量的な結果を融合させる有用性が指摘されている (Rühlemann 2010; Rühlemann and Aijmer 2015; Romero-Trillo 2008; Thornbury 2010)。次節において、中間言語語用論の観点からその有用性について述べる。

2.2. 中間言語語用論におけるコーパス研究の可能性

学習者の語用論的能力を検証する中間言語語用論のデータ収集の手法としては、発話内行為やポライトネスに焦点を置いた談話完成タスクである Discourse Completion Task (DCT) が代表的である。DCT では、研究対象となる発話行為を直接的に抽出することを目的とし、発話行為が生じる状況や人間関係、対象となる学習者の変数の統制を可能にする。しかし、参加者のデータは限られ、その発話行為の内観に焦点を置くため、実験によって結果が多様化する傾向にあり、結論を一般化することが難しい (Callies 2013; Green 2012)。一方、コーパスを活用した外国語習得の研究では、語彙やコンコーダンスラインに比重を置く傾向が強いのが現状であるが (Adolphs 2008)、学習者コーパスが提供する大規模な被験者データにアクセスすることによって、頻度情報を中心としたより信頼性の高い統計データを分析することが可能になった (Granger 2002)。近年、学習者コーパスを用いて談話標識や発話行為の観点等から語用論的能力を検証した研究論文も増えてきている (Aijmer and Rühlemann 2015; Romero-Trillo 2014)。

¹ 詳細情報及び入手方法は、国立研究開発法人 情報通信研究機構が提供する以下のページを参照されたい。 https://alaginrc.nict.go.jp/nict_jle/

3. 本研究ノートの目的

本稿の目的は、前述の抽出タスクの実験を中心とする先行研究の結果が示す学習者の語用論的言語特徴や傾向を、コーパスから得られる頻度情報を使って再確認することである。具体的には、日本人英語学習者の話し言葉コーパスとしては最大の The NICT JLE Corpus の買い物のロールプレイのデータにおいて、UAMCT を用い要求の発話行為²を示す言語項目を手作業で特定し言語情報を付与した。要求の発話行為のアノテーションには、中間言語語用論の研究で多く取り入れられてきた Blum-Kulka, House and Kasper (1989) の分類スキームを参照にした。ただし、これは、母語話者に焦点をおいた対照言語学的な発話行為の分析に基づいたものであるため、学習者言語の分類に応用できない場合は改良を加えた。

なお、本稿では、表層的な言語情報を基に要求の発話行為を特定した「語用言語学的能力」に着目している。つまり、表層的な言語情報が手掛かりにならず、話し手や聞き手ではない第三者による特定が恣意的となる間接的な発話（「ヒント」等）は対象外とした。また、発話の適切さをポライトネスの観点から検証する「社会語用論的能力」の習得については触れていない。³ 当該学習者コーパスは、インタビューテストの書き起こしデータのため、発話者本人の発話の意図や実際の音声データを確認することはできないからである。

4. 要求の発話行為を抽出するアノテーション・スキーム

4.1. Blum-Kulka, House and Kasper (1989) による分類スキーム

本スキームは、要求の発話行為において、話し手が選択する文法や語彙項目に着目することにより異なるストラテジーに分類するものである。要求の発話行為は、「呼びかけ (Alert)」、「主要行為 (Head Act)」と「補足 (Supportive Move)」の3つに分けられる。⁴ また主要行為は、(1)「直接的ストラテジー (Direct Strategy)」、(2)「慣習的な間接的ストラテジー (Conventionally Indirect Strategy)」、そして (3)「非慣習的な間接的ストラテジー (Non-conventionally Indirect Strategy)」に分類される。(1) のストラテジーは、命

² 本研究で「要求の発話行為」に着目した理由は、従来の中間語用論で最も多く研究されているからである。学習者にとって日常的な場面における重要性があり使用頻度が高いことや、ポライトネス、FTA、敬意の表現や和らげ表現など語用論の理論に基づいて検証できるということが挙げられる (Schauer 2009)。

³ これらの用語や定義については Leech (2014) を参照にした。

⁴ 「呼びかけ」と「補足」は「主要行為」を任意に修飾する。

令形や動詞 want 等を使って示される。(2) は、助動詞 can や could を使った疑問文等がある。聞き手が、助動詞が元来持つ「可能」や「能力」の表層的な意味ではなく、文脈内や文脈外の情報や経験に基づき、要求の発話行為の機能があると捉える。(3) は、(1) と(2) とは異なり、要求の発話行為が文法や語彙の言語項目の選択によって明示的に示されない間接的な発話である。

主要行為は、「内的調整 (Internal Modification)」または「外的調整 (External Modification)」によって修飾することにより、発話行為が聞き手に及ぼす度合いを緩和または増長することができる。内的調整は、主要行為内に出現する語彙や統語的特徴に表れ、「Lexical downgrader (又は upgrader)」又は「Syntactic downgrader (又は upgrader)」と呼ばれる。例として、ポライトネス・マーカーの please がある。外的調整は、主要行為の言語項目外に見られる「補足 (Supportive Move)」として特定され、その機能例として「理由 (grounders)」等がある。⁵

4.2. UAMCT によって構築したアノテーション・スキーム

まずは、前節の Blum-Kulka ら (1989) が提唱した要求の発話行為の分類スキームを参照にしてトップダウン的にドキュメントに手作業でアノテーションを施した。しかし、実際に各ドキュメントを読んで発話行為を特定していくとスキームに改良を加える必要があったため、ボトムアップ的にも分析し、最終的に図 1 のスキームを完成させた。これは、学習者の発話データにはエラーが含まれること、発話データは不完全な話し言葉であること、そして要求の発話行為が買い物の場面に特化していることが、Blum-Kulka et al. (1989) の分類スキームには適合しなかったからである。

4.2.1. UAMCT によるアノテーション・スキームの構築の基本手順

UAMCT では、基本的に以下のような手順に沿って任意のテキストにアノテーションを施す。

- (1) UAMCT をホームページからダウンロードする。⁶
- (2) UAMCT を立ち上げ新しいプロジェクトの名称をつけ任意の場所に保存する。
- (3) 研究対象のコーパスデータ(テキストファイル形式で保存されたドキュメント)を UAMCT にアップロードする。
- (4) テキストに言語情報を付与するためのアノテーション・スキームを構築する。ス

⁵ 「前置き (preparatory)」や「脅し (threat)」や「約束 (promise)」等もある。

⁶ 現在最新版の UAMCT Version 3.3 (2016 年 5 月 6 日に公開) を以下のサイトより無料でダウンロードできる。<http://www.wagsoft.com/CorpusTool/index.html>

キームに名称をつけたあと、以下を任意に選ぶ。

- i. タグ付与の方法：文法構造と品詞の自動タグ付与か、手作業のタグ付与か
- ii. アノテーション・スキームの構築方法：スキーム⁷を自分でデザインするか、既に組み込まれたスキーム⁸を使うか、既に自分で構築したスキームを再利用するか
- iii. アノテーションの範囲：ドキュメント単体にラベルを付与するか、ドキュメント内の任意のセグメントにアノテーションを施すか

本研究では、「i. 手作業のタグ付与」で「ii. スキームを自分でデザイン」し、「iii. ドキュメント内の任意のセグメントにアノテーションを施し」た。

⁷ UAMCT ではスキームを Layer と呼んでいる。

⁸ 「Clause Grammar」、「Appraisal」、「Rhetorical Structure Theory」及び「Error Analysis」のスキームがある。

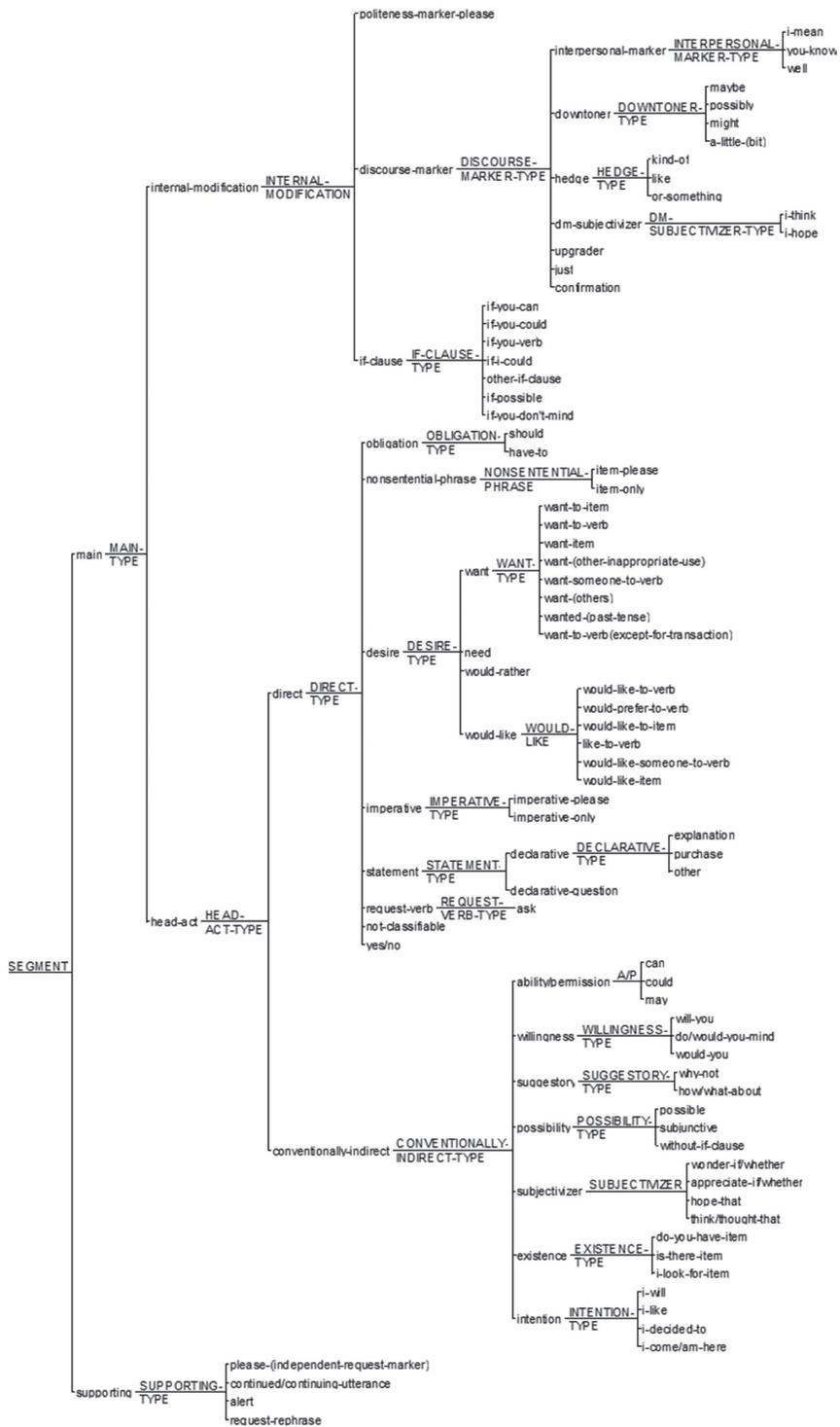


図 1. The NICT JLE Corpus における要求の発話行為を抽出するアノテーション・スキーム

4.2.2. 構築したアノテーション・スキームの詳細

当該コーパスは、試験官及び受験者の対話データから成る。⁹ SSTには、ロールプレイが含まれており、そのうち「買い物 (Shopping)」は複数あるトピックのうちの一つである。試験官が店員を演じ、受験者 (学習者) は客として指定された品物を購入する。本研究では、「買い物」のロールプレイに取り組んだ学習者データのみを分析対象とした。

図1のSEGMENTがアノテーションの起点であり、UAMCTでは、上層から下層に沿って分類項目が順を追って表示されるので、該当の項目を選び、要求の発話行為にアノテーションを施す。その手順を以下に示す。

- (1) SEGMENT : ドキュメントを読み進め、要求の発話行為の機能を持つ言語項目を特定する。当該項目をマウスで選択し、ハイライトする。その後、以下のMainまたはSupportingのどちらかを選択する。
 - i. Main : Head-act 及びそれを内的に修飾する Internal-modification に分類する。
 - ii. Supporting : Head-act に外的に付随する言語項目で、Please-(independent-request-marker) (Head-act から統語的に切り離して使用された 'please')、Continued/continuing-utterance (試験官の相続等による中断後再開された発話の続き)、Alert (呼びかけ)、Request-rephrase (Head-act の繰り返し) に分類する。
- (2) Main
 - i. Head-act : a. Direct と b. Conventionally-indirect のいずれかに分類する。¹⁰
 - ii. Internal-modification : a. Politeness-marker-please (ポライトネス・マーカ어의 'please')、b. Discourse-marker (談話標識)、そして c. If-clause (if 節) のいずれかに分類する。
- (3) Head-act
 - i. Direct : a. Obligation (義務の助動詞)、b. Nonsentential-phrase (断片的フレーズ)、c. Desire (要望を示す動詞)、d. Imperative (命令文)、e. Statement (助動詞等の使用がない平叙文または疑問文)、f. Request-verb (要求の動詞)、g. Not-classifiable (主語がない等エラーを含む不完全な発話のため分類不可)、h. Yes/no (yes または no のみの発話) のいずれかに分類す

⁹ 当該コーパスには、話者情報として、各ドキュメントに試験官の発話が <A> のタグで、受験者 (学習者) の発話は のタグで既に付与されている。

¹⁰ 要求を示す表層的な言語情報を持たない「非慣習的な間接的ストラテジー (Non-conventionally Indirect Strategy)」は前述のように分析対象外である。

る。なお、b、e、g 及び h は学習者特有のエラーを含む発話として著者がオリジナルのスキームに追加した。

- ii. Conventionally-indirect : a. Ability/permission (可能・許可の助動詞)、b. Willingness (相手の意思を確認する文)、c. Suggestory (相手に提案する文)、d. Possibility (可能性を尋ねる文)、e. Subjectivizer (I hope/wonder/appreciate 等を使った依頼文)、f. Existence (購入したい物の存在を尋ねる文)、g. Intention (自分の意思を明示する文) のいずれかに分類する。なお、f 及び g に関しては買い物に特徴的な要求としてオリジナルのスキームに追加した。¹¹

図 2 はアノテーションの一例である。“May I help you, sir?” という試験官の発話に対する学習者の応答である “<F>Um</F> I’m looking for a book about architecture.”¹² を、要求の発話行為として特定し、本セグメントを Head-act とアノテーションする。次に、Conventionally-indirect を選び、提示される 7 つの分類から Existence を選ぶ。さらに、具体的な言語特徴が数種類提示されるので、I-look-for-item を選ぶ。本事例のように、スキームの最下位項目の多くは、具体的な言語特徴例を示す。

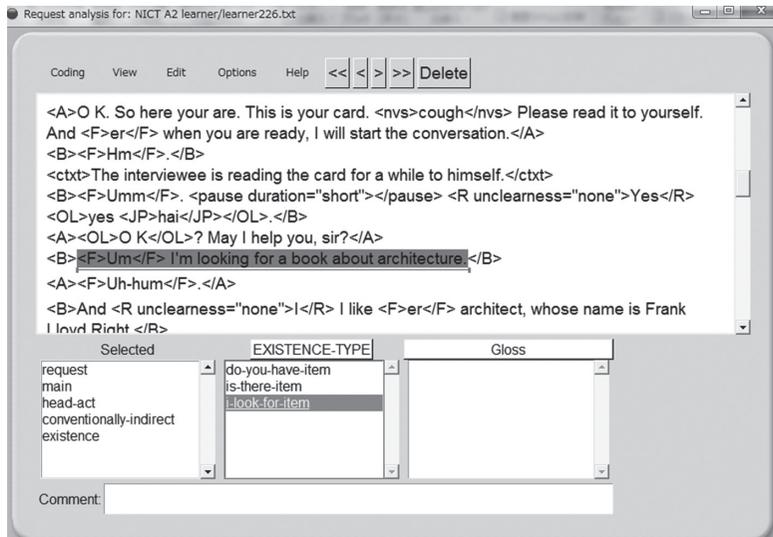


図 2. 要求の発話行為のアノテーションの手順例

¹¹ 「Blum-Kulka, House and Kasper (1989) の非慣習的な間接的ストラテジーには、“Got a pen?” のように実際は慣習的に使用されることが多い項目が含まれる」という Leech (2014, pp. 142–143) の指摘を参考にして、f と g の 2 項目を「Conventionally-indirect」の分類に加えた。

¹² <F></F> はフィルターを示すタグで、当該コーパスに既に付与されている。

5. 分析結果とその考察

アノテーションで抽出した要求の発話行為の形態・統語論的特徴を手掛かりにその頻度情報を提示し、異なる習得段階にある学習者が選択した要求のストラテジーの分布を表示する。三浦(2016)では、当該コーパスで買い物のロールプレイに取り組んだCEFR(欧州共通言語参照枠)のA1レベル(初級)相当の学習者68名とA2レベル(初中級)相当の学習者114名、総計182名の発話データにアノテーションを施した。¹³ UAMCTは、習得段階の情報によって各ドキュメントを分別し、付与タグの分布や頻度率を瞬時に計測する。最終的に、A1レベルでは総計559タグ、A2レベルでは1127タグを付与した。また、Mainの割合は、前者が93.56%(523タグ)、後者は91.47%(1029タグ)であった。Mainに属するHead-actとInternal-modificationの出現比率は、両レベルにおいて有意差はなかった($\chi^2=0.38$, $df=1$, $p=0.54$, Cramer's $V=0.016$)。しかし、表1のように、A2になるとA1よりDirectの使用頻度率が下がり、Conventionally-indirectが上がる傾向が観察され、両者はカイ二乗検定によって有意な差があると確認された($\chi^2=15.84$, $df=1$, $p=0.00007$, Cramer's $V=0.107$)。Politeness-marker-pleaseとDiscourse-markerの使用¹⁴についても、表2にあるように、レベル間の有意差が示され、A1レベルの方がA2よりDiscourse-markerを使う傾向が強いと示された($\chi^2=9.78$, $df=1$, $p=0.0018$, Cramer's $V=0.235$)。しかし、図2のUAMCTのKWIC(Keyword In Context)画面を確認すると、A1レベルでは、実際には学習者1名(A1(Intermediate)/learner1096.txt)による発話が半数を占めていることが判明した。一方、図には示していないが、A2レベルの9件は異なる9名の学習者が発話していた。頻度数の低い言語項目については、発話者の偏りも考慮する必要がある。

表1. A1及びA2レベルの学習者によるHead-actのストラテジーの分布

	A1 粗頻度数	%	A2 粗頻度数	%
Direct	312	68.0	519	56.9
Conventionally-indirect	147	32.0	394	43.2
Total (Head-act)	459	100.0	914	100.0

¹³ Tschirmer and Bärenfänger (2012)等を参照し、本コーパスのSSTレベルをCEFRレベルに紐付けた。買い物に取り組んだAレベル学習者を全て分析対象とした。

¹⁴ If-clauseは粗頻度数が5未満であったため、カイ二乗検定から除いている。

表 2. A1 及び A2 レベルの学習者による Internal-modification の分布

	A1 粗頻度数	%	A2 粗頻度数	%
Politeness-marker-please	48	75.0	104	90.4
Discourse-marker	16	25.0	9	7.8
If-clause	0	0	2	1.7
Total (Internal-modification)	64	100.0	115	100.0

File	Pretext	<Annotation feature="discourse-marker"/>	PostText
A1(Beginner)/file00404.txt	/R> twenty percent?	Yeah?	</RS> <A><
A1(Beginner)/file00757.txt	"imp"><DR str="inf">	Just	a moment, <LD m
A1(Beginner)/file00919.txt	<LD mkr="inter"><F>	well	</F></LD> <F>um<
A1(Intermediate)/learner1053.txt	please price down,	just	little <A
A1(Intermediate)/learner1096.txt	I help you? 	<F>Well</F>	I want a
A1(Intermediate)/learner1096.txt	>Mm-hm<F>. 	<F>Well</F>	do you h
A1(Intermediate)/learner1096.txt	jackets, <F>oh</F>	<F>well</F>	<pause d
A1(Intermediate)/learner1096.txt	<F>Oh</F> yeah.	<F>Well</F>	do you h
A1(Intermediate)/learner1096.txt	 <F>Oh</F>	<F>well</F>	<F>mhmm</
A1(Intermediate)/learner1096.txt	on="short"></pause>	<F>well</F>	I prefer
A1(Intermediate)/learner1096.txt	 <F>Oh</F>	<F>well</F>	<pause d
A1(Intermediate)/learner1096.txt	A> <F>U</F> <F>	well	</F> cash card,
A1(Intermediate)/learner1168.txt	T-shirts <F>um</F>	<R unclarity="none"></R> I hope so.	
A1(Intermediate)/learner1197.txt	<F>Uhu</F>. 	<laughter>I hope</laughter>.	
A1(Intermediate)/learner960.txt	ion="long"></pause>	I mean	<pause durati
A1(Intermediate)/learner973.txt	unclarity="none">	Just	</R> just <

図 2. A1 レベルの学習者による Discourse-marker の発話例を示す UAMCT の KWIC 画面

Direct か Conventionally-indirect かのストラテジーの選択において統計的にレベル間に有意差があったという本結果は、一部の先行研究で既に結論づけられている「習得段階が上がるほど慣習的な間接的ストラテジーの使用が高まる」傾向と合致したと言える。これらの先行研究には、少数の第二言語学習者を対象とした縦断的研究 (Kasper and Ross 2002) や、DCT の手法を用いて異なる習熟度別にデンマーク人英語学習者グループと英語母語話者グループを比較した横断的研究 (Trosborg 1995) がある。

6. まとめ

本稿では、UAMCT を活用することにより、語用論分析とコーパス分析の融合が容易になることで、分析の再現性や結果の信頼性の向上に貢献する可能性を示唆した。著者は、本稿の要求の発話行為の抽出スキームに加え、要求の言語機能（購入の意思を示す、割引交渉をする、試着の許可を得る等）を特定するスキームや、発話が対話上適切または自然であるかを判断するスキームを同時に開発し、異なる習得段階ごとにその分布を比較している (三浦 2016; Miura 2014, 2015)。多層構造のアノテーションによって、発話行為を多面的に観察した頻度情報を提供することが可能になったと言える。今後は、当該データに限らず汎用性の高い発話の抽出スキームを開発していきたい。

参照文献

- Adolphs, S. 2008. *Corpus and Context: Investigating Pragmatic Functions in Spoken Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Aijmer, K. and Rühlemann, C. 2015. *Corpus Pragmatics: A Handbook*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blum-Kulka, S., House, J. and Kasper, G. 1989. *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Callies, M. 2013. "Advancing the Research Agenda of Interlanguage Pragmatics: The Role of Learner Corpora." In J. Romero-Trillo (ed.) *Year Book of Corpus Linguistics and Pragmatics 2013: New Domains and Methodologies*, 9-36. Dordrecht: Springer.
- Granger, S. 2002. "A Bird's-Eye View of Learner Corpus Research." *Computer Learner Corpora, Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*, 3-18. London: Longman.
- Green, A. 2012. *Language Functions Revisited: Theoretical and Empirical Bases for Language Construct Definition across the Ability Range*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kasper, G and Ross, S. 2007. "Multiple Questions in Oral Proficiency Interviews." *Journal of Pragmatics* 39, 2045-2070.
- Leech, G. *The Pragmatics of Politeness*. Oxford: Oxford University Press.
- Miura, A. 2014. "An Annotation Scheme for Criterial Features of Pragmatic Competence of Japanese Learners of English." *47th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea: Book of Abstracts*, 243.
- Miura, A. 2015. "Extracting Criterial Features from Requests Produced by Japanese Low-proficiency Learners of English." *LCR2015: Third Learner Corpus Research Conference*, 123-124.
- 三浦愛香. 2016. 「CEFR A1 及び A2 レベルの日本人英語学習者による語用論的能力を弁別する基準特性」、投野由紀夫 (編) 『平成 24 年度～平成 27 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) 研究課題番号 24242017 研究成果報告書: 学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究』、292-304.
- O'Donnell, M. 2013. *UAM CorpusTool Version 3.0: Tutorial Introduction*. Retrieved from <http://www.wagsoft.com/CorpusTool/Documentation/UAMCorpusToolTutorial3.0.pdf>
- O'Donnell, M. 2016. *UAM CorpusTool: Publications*. Retrieved from <http://www.corpustool.com/research.html>
- Romero-Trillo, J. 2008. *Pragmatics and Corpus Linguistics: A Mutualistic Entente*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Romero-Trillo, J. 2014. *Yearbook of Corpus Linguistics and Pragmatics 2014: New Empirical and Theoretical Paradigms*. Dordrecht: Springer.
- Rühlemann, C. 2010. "What can a Corpus Tell us about Pragmatics?" In A. O'Keefe and M. McCarthy (eds.) *The Routledge Handbook of Corpus Linguistics*, 288-301. Abingdon:

- Routledge.
- Rühlemann, C. and Aijmer, K. 2015. “Corpus Pragmatics: Laying the Foundations.” In K. Aijmer and C. Rühlemann (eds.) *Corpus Pragmatics: A Handbook*, 1–26. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schauer, G. A. 2009. *Interlanguage Pragmatic Development: The Study Abroad Context*. York: Continuum.
- Thornbury, S. 2010. “What can a Corpus Tell us about Discourse?” In A. O’Keefe and M. McCarthy (eds.) *The Routledge Handbook of Corpus Linguistics*, 270–287. Abingdon: Routledge.
- Trosborg, A. 1995. *Interlanguage Pragmatics: Requests, Complaints and Apologies*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Tschirner, E., and Bärenfänger, O. 2012. “Assessing Evidence of Validity of Assigning CEFR Ratings to the ACTFL Oral Proficiency Interview (OPI) and the Oral Proficiency Interview by Computer (OPIC).” *Technical Report 2012-US-PUB-1*. Leipzig: Institute for Test Research and Development.

[Special Contribution]

Pragmatics, Cognition, and Language in Action*

N. J. Enfield
The University of Sydney

In this article I consider new directions in cognitive approaches to language, which entail a new consideration of topics that are central to linguistic pragmatics research.

1. From cognitive linguistics to pragmatics

What is language like? Why is it like that? Why do only humans have it? When cognitive linguists ask these questions, two core commitments are implied. The first is that our answers to these questions should not only appeal to human cognitive capacities, but they should strive to account for language in terms of *more general cognition* before they posit language-dedicated cognitive capacities. The second is that our answers should both explain and appeal to facts of language as it occurs in usage, as captured by the adages of a *usage-based* approach: Grammar is Meaning, Meaning is Use, Structure Emerges from Use. These two commitments are intimately related.

1.1. More general cognition

Langacker (1987:13) uses the phrase ‘more general cognition’ in contrast to the kinds of cognition implied by language-dedicated faculties or modules that nativist accounts of language propose (Chomsky 1965:25; cf. Hauser et al 2002, Chomsky 2011). A parsimonious account of language would be in terms of cognitive abilities that humans are known to possess for reasons independent from language. For example, there is ‘the ability to compare two events and register a discrepancy between them’ (Langacker 1987:6). These are aspects of our general intelligence for interpreting and reasoning about physical domains like space, quantities, and causality. Are such abilities necessary for language? Are they sufficient? Our quest to answer these questions must

* This paper includes sections from a forthcoming handbook article titled ‘Language in Cognition and Culture’, to appear in the *Cambridge Handbook of Cognitive Linguistics*, edited by Barbara Dancygier, and Enfield, N. J. (2014). Human Agency and the Infrastructure for Requests. In Paul Drew and Elizabeth Couper-Kuhlen (Eds.), *Requesting in Social Interaction*, (pp. 35–50). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

be guided by the knowledge that while other species may have some of what is necessary for language, they do not have what is sufficient.

Cognitive linguistics research has explored ways in which aspects of more general cognition can support the learning and processing of language (Lakoff 1987, Croft 2001, Tomasello 2003, Goldberg 2006, *inter alia*). This has led to the discovery of principles of conceptual structure which provide people with ways to represent or construe the things, events, and states we wish to talk about. These principles also allow people to productively elaborate those representations in creative and expressive ways. They provide generative resources for setting up conceptual correspondences, typically between target ideas (concepts to be communicated) and source ideas (concept used as means for communicating). The principles include analogy, metaphor, metonymy, gestalt thinking, image schemas, conceptual blends, idealized cognitive models, and more.

We can note two key properties of the aspects of more general cognition that have been most widely relied on in cognitive linguistic research. First, they are primarily relational. Second, they are primarily non-social.

Primarily relational

What does it mean to say that the elements of more general cognition relied on in cognitive linguistics are primarily relational? It means that they provide ways of describing relations between concepts, whether the scope of conceptual relation is an isolated linguistic expression or an entire semiotic system. This makes these aspects of more general cognition especially suitable for capturing conceptual relations within an atemporal/synchronic frame. There are of course other frames, dynamic temporal-causal frames including not only the diachronic frame, but also the microgenetic, ontogenetic, phylogenetic, and enchronic frames (Enfield 2014:9–19; cf. Bybee 2010, see below). Research approaches related to cognitive linguistics, such as psycholinguistics, tend to work within dynamic frames, for example focusing on language production or comprehension (in a microgenetic frame) or language learning (in an ontogenetic frame). Cognitive linguistics is increasingly well linked to fields like psycholinguistics thanks to the efforts of interdisciplinary-minded researchers in both psychology (e.g., Tomasello 2003) and linguistics (e.g., Goldberg 2016, Hurford 2007, 2011).

These collaborations are promising to extend the boundaries of what we understand ‘more general cognition’ to mean. And there are further aspects of more general cognition that have important connections to language, but are yet to be explored within the purview of cognitive linguistics proper. A particularly promising area is bounded rationality, the tool kit of fast and frugal heuristics that balances simplicity and economy with functional efficacy (Gigerenzer et al 2011). Cognitive scientists have begun to explore ways in which this aspect of more general cognition sheds new light on the pragmatics of language (Barr and Keysar 2004). Such work suggests that cognitive linguistics will enrich its account of imagistic thinking by looking at it in the light of heuristic thinking.

Primarily non-social

What does it mean to say that the aspects of more general cognition widely studied in cognitive linguistics are primarily non-social? It means that they focus more on how we interpret, conceive, and reason about physical phenomena such as space, quantities, and causality, than on interpersonal phenomena in the social domain.

Our species is the only one with language. What makes this possible? A challenge for cognitive linguistics, given its emphasis on more general cognition, is that so much of our general cognition is shared with other species. Why don't they have language too? To answer this, we must pinpoint what it is about our specific forms and combinations of more general cognition that other species lack. To be clear: Proposing that the cognition involved for language is unique to our species does not entail that this cognition is specifically linguistic. No other species should be capable of the same kind, or perhaps degree, of cognitive capacity in the relevant forms of thinking. Is this because we have unique capacities for analogy, imagery, metaphor, metonymy, and pragmatic inference, among other principles?

There is good reason to think that what really makes language possible is our social cognition (Enfield and Levinson 2006). A recent comparative study of cognition in the great apes argues that general intelligence—as measured using tests in physical domains of space, quantities, and causality—does not greatly distinguish humans from our closest relatives such as chimpanzees. 'Supporting the cultural intelligence hypothesis and contradicting the hypothesis that humans simply have more "general intelligence," we found that the children and chimpanzees had very similar cognitive skills for dealing with the physical world but that the children had more sophisticated cognitive skills than either of the ape species for dealing with the social world' (Herrmann et al 2007:1360). The conclusion? Socio-cultural cognition makes the difference for language. Humans are especially attuned to other minds, and to the cultural construction of group-specific, conventional systems of meaning and practice as shared frameworks for communication and joint action. This is what makes it possible for human populations to foster the historical development of complex systems of shared cultural tradition, of which language is one form.

This does not detract from the demonstrated importance for language of non-social aspects of more general cognition, including those that are clearly shared by other species. Hurford (2007, 2011) has argued that the core principle of predicate-argument organization in the syntactic organization of language—any human language—is based on properties of brain function and anatomy that are shared with many other species. Many species display these same basic properties of neural organization and cognitive processing (specifically, the integration of a 'where' system with a 'what' system, supplying the essential ingredients of argument-predicate relations). So why don't other species have language? Hurford's answer is that they do, it's just that they don't make it public. This in turn, means that conceptual structure does not enter the public domain, and so it is impossible for cultural processes of symbolic community-wide con-

ventionalization, and subsequent grammaticalization, to get started (Bybee 2010, Hurford 2011, Enfield 2015).

1.2. Language Usage

As one of a set of functionalist approaches to language, cognitive linguistics does not just analyze linguistic structure, ‘it also analyzes the entire communicative situation: the purpose of the speech event, its participants, its discourse context’; it maintains ‘that the communicative situation motivates, constrains, explains, or otherwise determines grammatical structure’ (Nichols 1984: 97). This orientation is well-grounded in insights dating back to Wittgenstein (1953), Zipf (1949), and beyond. Embracing the idea that language is a tool for thought and action, cognitive linguistics is *usage-based* (Barlow and Kemmer 2000). In this way a strong focus on conceptual representation is increasingly often complemented by close attention to the dynamic, causal, utilitarian underpinnings of language and its structure.

In a usage-based model ‘the process of language use influences the structure of the representation’ (Croft and Cruse 2004: 326–327). Taken together, the three key concepts invoked here—use, influence, and structure—imply a causal conception of language. It is not enough to describe a piece of language structure, a linguistic (sub)system, or a pattern of variance in language. We must ask why it is that way. One way to answer this is to find what has shaped it. ‘Everything is the way it is because it got that way’, as biologist D’Arcy Thompson is supposed to have said (cf. Thompson 1917). Bybee echoes the sentiment in relation to language: ‘a theory of language could reasonably be focused on the dynamic processes that create languages and give them both their structure and their variance’. Seen this way, linguistic structure is ‘emergent from the repeated application of underlying processes’ (Bybee 2010: 1). The aim is to explain structure by asking how structure is created through use.

The goal of unpacking the key concepts of use, influence, and structure—and the relations between these—points to new horizons in cognitive linguistics. If we are going to map those horizons systematically and with clarity, a central conceptual task is to define the temporal-causal frames within which we articulate our usage-based accounts (see Enfield 2014: 9–21). Some of those frames are well established: In a microgenetic frame, sub-second dynamics of psychological processing, including heuristics of economy and efficiency, provide biases in the emergence of structure in utterances; in a diachronic frame, population-level dynamics of variation and social diffusion provide biases in a community’s conventionalization of structure; and in an ontogenetic frame, principles of learning, whether social, statistical, or otherwise, provide biases in the individual’s construction of a repertoire of linguistic competence in the lifespan. Then there is the phylogenetic frame, through which our evolved capacities provide the defining affordances for our species’ capacity for language.

If there is less charted territory, it is in the enchronic frame, the move-by-move flow of interlocking, action-driven, forward-going sequences of linguistic action and re-

sponse in social interaction (Schegloff 1968, 2007, Clark 1996). By orienting to the enchronic frame, recent work in descriptive linguistics has begun to analyze linguistic structures not only in terms of their distribution in relation to morphosyntactic units, or units of discourse, but to structural units that can only be observed and defined in data taken from dialogue (Enfield 2013; cf. also Du Bois 2014). Gipper (2011) sheds new light on the analysis of multifunctionality in evidential marking by comparing the functions of Yurakaré evidentials in differently positioned utterances in conversation; she finds that evidentials can have quite distinct functions depending on whether they occur in initiating utterances (e.g., questions, new assertions) versus responsive utterances (e.g., answers to questions, expressions of agreement). A different kind of outcome from orienting to the enchronic frame in research on language and cognition is that it requires us to confront and explain phenomena that are clearly linguistic but that have hardly been on the map in any form of linguistics until now; key examples include repair (Schegloff et al 1977, Hayashi et al 2013) and turn-taking (Sacks et al 1977, Roberts et al 2015), both of which have significant implications for our understandings of the language-cognition relationship (Levinson and Torreira 2015, Dingemanse et al 2015). Without the usage-based approach, these implications would remain out of sight.

1.3. Comment

The challenge now is to further enrich our understanding of the causal influence of use on structure in language, and thus to see better how it is that only human cognition supports language. A first move is to broaden the scope of the key ideas—*influence, use, and structure*—with a concerted and systematic approach to discovering how the multiple causal-temporal frames of language use operate, both in themselves and in relation to each other. Like the rest of cognitive linguistics, this work is as much about culture as it is about language, for language is not only a form of culture—being a local and historical cumulation of social practice—but it is our main tool for constructing culture itself. These new directions in cognitive linguistics point directly to the link with linguistic pragmatics. We now turn to a case study.

2. A Case Study: Recruitments

It is easy to think that ‘an agent’ should coincide exactly with an individual. But this is seldom the case (see Enfield and Kockelman 2017). When Bill gets John to open the door, it is Bill who plans the behavior but John who executes it. Or when Mary reports what a professor said in yesterday’s lecture, it is Mary who speaks the words but the professor who is accountable for what was expressed. With distributed agency, multiple people act as one, sharing or sharing out the elements of agency. One man commits a misdeed against another, and yet revenge is taken years later between the two men’s grandchildren, neither of whom was involved in the original transgression. When someone is held to account for something that someone else chose to do,

agency, with its components of flexibility and accountability, is divided and shared out among multiple individuals. Agents do not equal individuals: the locus of agency is the social unit, and social units are not defined by individual bodies.

In the rest of this chapter I discuss some of the elements of human sociality that serve as the social and cognitive infrastructure or preconditions for the use of requests and other kinds of recruitments in interaction. I use the term ‘recruitment’ in the following sense (Enfield 2011: 5):

Recruitment is a proposed macro-type of social action that can be roughly defined as follows. S produces an utterance (or equivalent communicative move) addressed to A, where this utterance may then result in one or both of the speech act participants then carrying out a course of controlled behavior B (such as passing the salt, delivering a letter, lifting one end of a table).¹

The notion of an agent with goals is a canonical starting point, though importantly agency tends not to be wholly located in individuals, but rather is socially distributed. This is well illustrated in the case of request-like actions, in which the person or group that has a certain goal is not necessarily the one who carries out the behavior towards that goal. In the remainder of this chapter we focus on the role of semiotic (mostly linguistic) resources in negotiating the distribution of agency with request-like actions, with examples from video-recorded interaction in Lao, a language spoken in Laos and nearby countries. The examples illustrate five hallmarks of requesting in human interaction, which show some ways in which our ‘manipulation’ of other people is quite unlike our manipulation of tools: (1) that even though B is being manipulated, B wants to help, (2) that while A is manipulating B now, A may be manipulated in return later; (3) that the goal of the behavior may be shared between A and B, (4) that B may not comply, or may comply differently than requested, due to actual or potential contingencies, and (5) that A and B are accountable to one another; reasons may be asked for, and/or given, for the request. These hallmarks of requesting are grounded in a prosocial framework of human agency.

2.1. Flexibility in the pursuit of goals

In the opening pages of his *Principles of Psychology*, William James (1890) notes the special flexibility of cognizant behaviour. Iron filings, he notes, will be drawn to a magnet, but they cannot choose how they reach that goal. If a paper card covers the magnet, the filings will just press against the card. Thinking beings are different:

¹ This notion of ‘recruitment’ owes much to the collective input of research collaborators in the ‘Recruitments’ sub-project within the *Human Sociality and Systems of Language Use* project (MPI Nijmegen 2010–2014). See Floyd et al (2014).

Romeo wants Juliet as the filings want the magnet; and if no obstacles intervene he moves towards her by as straight a line as they. But Romeo and Juliet, if a wall be built between them, do not remain idiotically pressing their faces against its opposite sides like the magnet and the filings with the card. Romeo soon finds a circuitous way, by scaling a wall or otherwise, of touching Juliet's lips directly. (James 1890: 7)

This means-ends flexibility is our forte. We try to reach a goal, and if this is frustrated, we seek or invent new means. 'The pursuance of future ends and the choice of means for their attainment are thus the mark and criterion of the presence of mentality' (James 1890:8). A certain mentality is always involved in the pursuit of goals, but that is not our point of interest here. We want to focus on what results from this mentality: namely, our enhanced flexibility in selecting means to ends.

To see how we refine and elaborate our choices of means for ends, just look at the instruments and tools of human technologies (cf. Zipf 1949, Suchman 1987, Lave 1988, Norman 1988, Clark 2008). But possibly our most important, and most ancient, means toward ends are *other people*. Rather than doing everything ourselves, or even doing things just with the help of tools, it is often other people that we use to help us reach our goals.

This should not be taken to mean that people are solely interested in exploiting others for our own ends. Situations in which one person uses another as a tool are not based in selfishness alone. One reason is that we are apparently just as willing to offer *ourselves* as tools to serve *others'* individual goals. We hold doors open for strangers. We alert people when we notice they have dropped their keys. We give away our spare change on the street. We open doors for people when we see their hands are full. Another reason is that we *share* goals with others. So, when I behave in a way that looks like it's *for you*, it may in fact be *for us*. Tomasello (2008) argues that this is the mechanism whereby altruistic behaviour can evolve in a selfish world. Once individuals are able to share a goal, a behaviour that is *for us* is thereby, ultimately, also *for me*.

2.2. Language as a tool for mobilizing others

We do not manipulate people in the same direct way that we grasp a hammer or a pen. If we are going to get others to do things for us, we need the mediating tools of communication. As Bloomfield (1933) put it, when a stimulus evokes a response (e.g., when Jane sees an apple on a tree and wants to pluck it), language can be used as a sort of tool of transference, to elicit that response in another person (she tells Jack that the apple is there, and asks him to pluck it for her). We influence other people by taking the tools provided by our language and culture and using them to persuade those other people to willingly act on our behalf. This is the essence of what we are doing when we make requests. Our speech acts have deontic powers: with speech acts we bestow our reasons for action onto other people.

Humans have by far the most complex communication systems of all creatures. Our languages are generative in nature, meaning that we can combine words and constructions to produce entirely novel utterances at will. These verbal utterances may be further creatively combined with accompanying visible bodily behaviour. We shall use the term *language*⁺ (pronounced ‘language plus’) to refer to the enriched set of semiotic resources that includes not just words and grammatical constructions but intonation, gestures, facial expressions and more (Kendon 2004, McNeill 2005, Sidnell and Stivers ed 2009, Enfield 2009).

Now while the set of semiotic means we have for getting others to do things is, in principle, infinite, in fact we often use recurring and readily recognized strategies in making requests (*Could you pass the salt?*, *Could you open the window?* *Could you shut the door?*). We now consider some of the types of strategies that recur in a single language community. The following cases are taken from video-recordings of conversation among speakers of Lao, the national language of Laos (Enfield 2007, 2013). Here are three simple examples of ways in which people use language to get others to do things for them, or to help them, in Lao.

In the first example, two women are in a kitchen, where one of the women needs some leaf extract that the other has been preparing. The first woman says ‘grab (it and) come (here)’, meaning ‘bring it here’:

- (1) INTCN_030731b_192570_0:03:13
- 1 A qaw3 maa2
 grab come
Bring it here (referring to a bowl of leaf extract)
- 2 B Slides bowl with extract in direction of A

In this case, the requester uses a stripped-back linguistic construction that does nothing more than refer directly to the action being requested. The action—to fetch something—is idiomatically expressed in Lao as a combination of ‘grab’ and ‘come’. The object being referred to—the leaf extract—is understood from the context.

A second example shows the common strategy in Lao of adding a ‘softening’ sentence-final imperative particle *nèè1* to the basic action being requested (see Enfield 2007:66 and passim for description of a paradigm of particles whose meanings code imperative illocutionary force). In addition, the speaker makes a pointing gesture in the direction of the thing she is asking for:

- (2) INTCN_030731b_196430_0:03:16
- 1 A qaw3 qanø-nii4 nèè1
 grab CLF-this IMP.SOFT
Grab this thing (for me; referring to prepared food in a sieve; Pointing in direction of the food that she is asking B to pass)
- 2 B Turns to reach out for the food, grabs it and passes it to A

In a third case, the speaker is busy with food preparation in the kitchen. She uses a circuitous or indirect strategy, with more embellishment of the basic request being made than we saw in the last two examples. She addresses the requestee explicitly (calling him ‘father’—he is her father), and rather than stating the action she wants him to carry out (i.e., pass her the knife), she asks whether the knife is behind him:

(3) CONV_020723b_RCR_970010_0:16:10

1 A phòd1 miit4 thaang2 lang3 caw4 mii4 bòd3
 father knife direction back 2SG.P have QPLR
Dad is there a knife behind you?

2 B nii4 nii4
 here here
Here, here (Finds a knife behind himself, passes it towards A)

It is clear that she doesn’t simply want to know whether there is a knife behind him. The question makes sense in terms of her current goals. She is asking because she wants the knife, and so he hands it to her.

Now look at what these three cases have in common. Person A wants to get hold of some entity that is nearby but out of reach. Rather than go and get it herself, Person A says something to Person B, with the result that Person B gets the thing and passes it, thus carrying out a bit of behavior that Person A would otherwise have had to carry out herself. In this way, A has *recruited* B’s help.

These examples give us a simple look at the kind of role that language plays in manipulating the behavior of others in order to get them to contribute to, or comply with, our own goals. The examples show that different formulations are possible. And they show that such cases are not only about getting others to act on our behalf, but may also be about getting others to desist from some behavior that then allows us to proceed with our goal. Either way, B complies with a low-cost imposition.

The request-like cases we have just considered reveal a defining feature of human sociality, namely the distributed nature of our agency (see above, and Enfield 2013:115 and passim; see also Kockelman 2013, Gell 1999). This is related to the notion of distributed cognition, familiar from research by authors such as Goody (1977), Suchman (1987), Lave (1988), Norman (1988), Hutchins (1995, 2006) and Clark (2007), who have all shown ways in which tools and artifacts can be extensions of the human body and mind (see also Enfield 2009, Chapter 6). Students of language have long argued that language is a kind of tool for getting others to do things. Some, including Zipf (1949), have gone further, saying that *other people* are tools for us as well (see also Goodwin 2006 on this point in relation to language). Along these lines, Pagel (2012: 275–6) has recently compared language to a remote control device ‘When you speak, you are using a form of telemetry, not so different from the remote control of your television. ... Just as we use the infrared device to alter some electronic setting within a television so that it tunes to a different channel that suits our mood, we use our lan-

guage to alter the settings inside someone else's brain in a way that will serve our interests.'

Sometimes it appears as if this were really true. In the following example, one person uses speech to get another person to turn the television on, just as she might otherwise have used a remote control device to do from a distance:

- (4) INTCN_111204t_818990_0:13:39
- 1 A peet5 tholathat1 beng1 mèt4
open television look IMP.UNIMPD
Turn on the television (for us) to watch
 - 2 B peet5 bðø daj4 tii4
open NEG can QPLR.PRESM
It doesn't work (it can't be turned on), I think
 - 3 A daj4-caw4 kaø peet5 beng1 thaø mèt4
can 2.POL TLNK open look PCL IMP.UNIMPD
Yes it works—you turn it on and see
 - 4 B Moves towards the television and reaches and switches it on

Then half a minute later:

- (5) INTCN_111204t_850175_0:14:10
- 1 A mòðt4 mòðt4 laø mèt4
turn.off turn.off PRF IMP.UNIMPD
Switch it off, switch it off.
 - 2 B Moves towards the television and reaches and switches it off.

It is an inviting analogy: asking someone to do something for us is like pressing buttons on a remote control device. But like all analogies (as Pagel of course knows), it is imperfect. As we shall now see, its imperfections are instructive. The following sections consider the ways in which the analogy between words and remote control devices breaks down.

2.3. Hallmarks of recruiting

What is the difference between using a person and using a device as a means to get something done? The answer: With people, both parties are goal-driven and socially accountable beings, and there is a social relationship between them. Here are some features of the interpersonal manipulations shown in the above examples that are not observed in the use of an electronic remote control device:

1. Even though B is being manipulated, B wants to help.
2. While A is manipulating B now, A may be manipulated in return later.
3. The goal of the behavior may be shared between A and B.
4. B may not comply, or may comply differently than requested, due to actual or

potential contingencies.

5. A and B are accountable to one another; reasons may be asked for, and/or given.

There are of course other differences. But these will serve as points of focus for us to consider the hallmarks of recruiting in humans, within the simple framework of goal-directed social agency outlined in the above sections.

B wants to do the recruited action

A remote control device is a robot. It responds to instruction but it doesn't offer to help you or otherwise independently anticipate your needs. People, by contrast, may want to help. Think about the above examples. In no case would we want to say that someone was being coerced or seriously imposed upon. The requestees cooperate without any resistance or comment. People are so willing to help that we often see them offer assistance without their having to be asked.

Consider an illustration of the kind of situation in which a person needs something to be done for them, and gets the help they need from another person without having to ask for it or otherwise signal the need. This recording is taken in the kitchen verandah of a Lao village house. The floor of this space is raised high above the ground of the village compound. To get up into the house, one walks up a steep galley-style ladder. A man is sitting where one of these ladders provides entry onto the raised floor of the house. The area where the ladder provides entry onto the floor is blocked by a low gate, designed to prevent toddlers from falling down the ladder. While the gate is not completely closed, it is closed enough so as to hinder entry for somebody who does not have a free hand with which to open the gate. At the moment of interest, another man is at the bottom of the ladder, about to go up into the house. This man is holding a large plastic laundry basket full of clothes, which he is about to bring up into the house. He reaches the half-closed gate at the top of the ladder: at this moment, the man reaches forward with his right hand and pushes the gate open enough to allow the other man to walk up into the house unhindered.

(6) INTCN_1112031_243630_0:04:04

- 1 A begins walking up ladder approaching closed gate with washing basket in hand
- 2 B reaches out to gate as A comes to top of ladder and pushes open gate for A to walk through unhindered

This is not a request sequence, rather it can be seen as an instance of the more general action of *recruitment*: a sequence in which a first move by A occasions a helping action by B. Like in request sequences (see the above examples), A's behavior makes it clear that he needs help, and then B helps accordingly, in line with a general cooperative stance in human interaction. But in this case A's behavior, which makes it clear that he

needs help, cannot be said to have been an intentional manipulation of B to help A in achieving his goal. Here, person B stepped in to help A upon anticipating a potential problem. The point here is that request sequences all presuppose the more general prosocial, cooperative orientation and desire to help that is sometimes simply volunteered in cases like this one.

Roles may be reversed

In the kinds of social contexts we spend most time in—i.e., informal social interaction in familiar environments with people we know well—the kinds of things we ask others to do are the kinds of things we are willing to do for them. I expect you to pass me the salt when I ask, just as when you ask for the salt, you can expect that I will pass it. Obviously there are asymmetries, especially when interactions are more formalized, but the general principle is reciprocity. This is obviously not the case with remote control devices.

The goal may be shared

The recruitments we have considered so far involve situations in which person B is asked to help person A with something related to their current goal. But many things that we might want to call recruitments or requests occur in contexts where both people involved are jointly committed to the same goal. Rossi (2012) compares two kinds of request sequence in Italian interaction. In one kind, A has a goal, not currently shared with B, and asks B to help (e.g., ‘Pass me the chewing gum’). In another kind, A and B currently share an overarching goal, and A asks B to do something that they have effectively already committed to within that overarching goal (e.g., ‘Deal the cards’). The idea of joint commitment, and everything that implies (Clark 2006), is clearly irrelevant to the relationship between people and remote control devices.

The fact that people make joint commitments to goals means that, similar to the ‘gate at the top of the ladder’ example above (example (6)), cooperation can be assumed, and may be offered without having been prompted. And when there are shared goals, it can become impossible—and in fact irrelevant—to say whether a sequence involved a request or an offer.

In the following example, two people are cooking a dish together. A man has been heating jugged fish on the fire, and at this moment the jugged fish needs to be strained. The man emerges from the fireplace with the pot of heated jugged fish, and he is getting another pot, into which to strain it. Seeing this, a woman who is present extends her arm forward with the sieve that she has in her hand. Next, the man walks over, holds the empty pot underneath the sieve, and pours the jugged fish into the sieve, thus straining it.

(7) INTCN_030731b_267220_0:04:27

1 A Holds out sieve for straining jugged fish

- 2 B Brings and places jugged fish and pot for jugged fish to be strained into

In this instance we can't say whether this sequence involves an offer or a request (nor do we need to; see Enfield and Sidnell 2017). The terms 'offer' and 'request' presuppose that the relevant behavior is 'for' one or the other of the two parties. If A offers to do something, it's *for B*. If A requests that B does something, it's *for A*. But in many cases like this one, the behavior being precipitated is a sub-part of a routine to which both parties are already committed, and thus share as a goal.

B need not comply

If a piece of technology is in working order, it will do what you want. A person, on the other hand, may ignore your request, refuse to comply, or do something other than what you asked. The lives of people are full of contingencies, actual or potential, which often intervene (cf. Curl and Drew 2008).

In the following example, a husband and wife are in a kitchen, skinning catfish. They have been doing this for a while, and the husband has one more fish left to skin, but complains that his back is sore from sitting and working. He holds the fish out towards his wife for her to take and skin:

- (8) INTCN_1112031_689141_0:11:29
- 1 A cêp2 qèèw3 lèèw4
hurt back PRF
My back hurts
- 2 bùt2 diaw3
a moment
(It will only take) a moment
- 3 qaw3 qaw2
grab grab
Here take it (holding out fish for her to take)
- 4 B mm2
nope
No.

Her refusal is not surprising. The couple, who in this culture are of equal standing in a setting like this one, have each been working for the same amount of time doing the same task. The wife's back is no doubt also sore from sitting and working, and she treats the request as unwarranted. There's no good reason why she should do it for him.

One may need to give B reasons why they should do the requested action

A remote control device never needs or wants to know why you want it to do

something on your behalf, but a person often does. We saw in the last section that people who are asked to do things may give reasons for refusal or delay in complying. Here we shall see that people who ask others to do things will sometimes give reasons as well. (We saw a case where the man reasoned that because his back hurt, his wife should finish his task.) This happens, for example, when a person is asked to do something but delays their response, or otherwise resists. Giving a reason for a request is a way to pursue, strengthen, or help make sense of what is being asked.

Let us look at an example. Here, Speaker A starts by issuing a directive to a group of three people (two are her children, one is her daughter-in-law) who are preparing food in the kitchen of her house. She asks them to toss the rice. This is a procedure in the preparation of glutinous rice. When rice has been steamed and is now cooked, because of the shape of the steamer used it will be cooked more in some spots and less in others. Tossing the rice is a way of evening out the texture of it before serving:

- (9) INTCN_1112031_425170_0:07:05
 1 A suaj3 khaw5 mètè4 suu3
 toss rice IMP.UNIMPD 2PL.B
Toss the rice you lot

She uses the second person plural pronoun *suu3* in formulating this request. This means that she does not select any one person to do the job. As it happens, none of the three young people in her immediate vicinity volunteer to act upon her request. It is clear that they are fully occupied with other duties. She then calls out to a fourth person—her son-in-law whose name is *Nyao*—to come and do it instead. At this moment, *Nyao* is away from the scene, doing something else in the compound outside the house, but within earshot. Her move (shown in (10)) begins with a somewhat elaborate request in line 1: she selects him explicitly by name, telling him to stop what he is currently doing and to come and toss the rice, adding also that it's 'for her'; she also uses the imperative sentence-final particle *mètè4*, which implies that the addressee is 'unimpeded' (often implying 'Why aren't you already doing it?'; cf. Enfield 2007:63), and she immediately adds two reasons: the first, why it has to be done, and fast ('the pot will burn'), and second why *he* has to be the one to do it ('the others are all busy here'):

- (10) INTCN_1112031_427440_0:07:07
 1 A bak2-ñaw2 paq2 vaj4 han5 maa2 suaj3 khaw5 haj5 kuu3
 M.B-Ñ abandon put there come toss rice give 1.B
 mètè4
 IMP.UNIMPD
Nyao, drop that and come and toss the rice for me
 2 maj5 mòd5 dèj2 niø - khaw3 khaa2 viak4 met2 thuk1
 burn pot FAC.INFORM TPC 3PL stuck work all every

khon2 niø
 person TPC
the pot will burn - they're all busy here

- 3 B Stops what he's doing and walks up the ladder into the food preparation area, goes into the kitchen to toss the rice (it takes 13 seconds before he reaches the kitchen)

Note that Nyao would otherwise not have been expected to be involved in the behavior of tossing the rice, since he was, relative to four other people including the speaker, the furthest from the place where the task needed to be done. It is by providing explicit reasons that Speaker A in (10) is able to mobilize his help. In this way, we see language clearly serving as a tool for creating deontic powers: specifically, for transferring reasons for acting onto other people.

The drawing of attention to a reason for acting alone has long been recognized as an indirect way of requesting (cf. 'It's cold in here' as a way of getting someone to close the window). Here is a case in which Speaker A draws attention to a problem that needs attending to, namely the fact that some live fish in a pot don't have sufficient water to keep them alive and fresh:

(11) INTCN_1112031_601081_0:10:01

- 1 A paa3 man2 siø bðø taaj3 vaa3 qaaj4 dong3
 fish 3.B IRR NEG die QPLR.INFER eB D
The fish, aren't they going to die, Dong? (Pointing in direction of large pot with live fish)
- 2 B qanø-daj3 (.) qoo4 qaw3 nam4 maa2 saj1 () maa2 saj1
 what Oh grab water come put () come put
 mèè4
 IMP.UNIMPD
What? Oh, put some water in there () put some in

It is also often the case that a reason is given in combination with an explicit request. Here is an example, in which an imperative command is followed quickly by a reason. Speaker A is sitting next to a large pot with live fish in the bottom of it. A fresh load of water has just been poured into the pot, and the fish are splashing about so much that water is spilling out of the pot and onto him:

(12) INTCN_1112031_629110_0:10:29

- 1 A ñðð4 nii3 (.) man2 diin4 phoot4
 lift flee 3.B jump too.much
Take it away - they're splashing too much (leaning back from the pot)
- 2 B Walks around behind A in direction of the pot, comes and picks up pot and moves it away.

By providing a reason for the request to ‘take the pot away’, Speaker A helps to clarify for B precisely what is being asked of her. There could be a range of reasons why A wants her to take the pot away, and each would imply a different way of complying. For example, how far away should she take it? Here, he makes it clear that he merely wants the pot to be placed far enough away that the splashing water won’t reach him.

3. Conclusion

The concept of agency has long been central to many lines of research that touch on human interaction, in fields ranging from law and sociology to anthropology and linguistics. Importantly, the word ‘agency’ does not refer to a one-dimensional ‘degree of assertiveness’ or similar. Its use should reflect the nuances of empirical and theoretical findings of research in this multi-faceted and dynamic domain (Kockelman 2007, Enfield 2013: Chapter 9; cf. Davidson 1963, Duranti 1990, 2004, Gell 1998, Ahearn 2001). Conceptual tools for understanding agency are central to the analysis of any social action, not least requests and their ilk. The behaviour of doing things for others is also supported by a set of psychological and interpersonal resources grounded in human sociality, including the elements of social intelligence, distributed cognition, normative accountability, and cooperative motivations (Enfield and Levinson 2006, Enfield 2013). These resources form part of a foundational infrastructure for social interaction (Levinson 2006, Enfield and Sidnell 2014). Our aim here has been to highlight some hallmarks of recruitment sequences in light of certain defining elements of agency and the infrastructure for interaction. In the sequences we have examined, three of these elements come to the fore.

The first is that we assume that people behave in accordance with goals that they are pursuing. Their behavior makes sense in terms of those goals and in terms of the reasons that may be given for their behavior. This is clear in any recruitment sequence. Second, there is a mismatch between the fact that in the physical realm people are immutably distinct from one another (we have separate bodies), while on the other hand in the realm of social accountability we may either be treated as inhabiting separate units (such as when one person pursues a goal unilaterally) or as being elements of a single, shared unit (such as when two people have made a joint commitment to a shared course of action; cf. Clark 1996, Rossi 2012). Much of social life involves tacking back and forth between different distributions of flexibility and accountability of behaviour, in a process of fission-fusion agency (Enfield 2013:104). Recruitments always imply the sharing or distributing of action. And third, thanks to the special prosociality of our species, we are motivated to help others, and we tend to assume that others have the same cooperative motivations toward us. Recruitments both presuppose and display these mutual prosocial motivations and assumptions.

References

- Barlow, Michael, and Suzanne Kemmer. eds. 2000. *Usage Based Models of Language*. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Barr, Dale J., and Boaz Keysar. 2004. "Making Sense of How We Make Sense: The Paradox of Egocentrism in Language Use." In *Figurative Language Processing: Social and Cultural Influences*, edited by H. Colston and A. Katz, 21–41. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Bybee, Joan. 2010. *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam A. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: MIT Press.
- Chomsky, Noam A. "Language and Other Cognitive Systems: What Is Special about Language?" *Language Learning and Development* 7, no. 4 (2011): 263–78. doi:10.1080/15475441.2011.584041.
- Clark, Herbert H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William, and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dingemans M, Roberts SG, Baranova J, Blythe J, Drew P, Floyd S, Gisladottir RS, Kendrick KH, Levinson SC, Manrique E, Rossi G, and NJ Enfield. (2015) Universal Principles in the Repair of Communication Problems. *PLoS ONE* 10(9): e0136100. doi:10.1371/journal.pone.0136100
- Du Bois, John W. 2014. Towards a Dialogic Syntax. *Cognitive Linguistics* 25(3): 359–410.
- Enfield, N. J. 2014. *Natural Causes of Language: Frames, Biases, and Cultural Transmission*. Berlin: Language Science Press.
- Enfield, N. J. 2015. *The Utility of Meaning: What Words Mean and Why*. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, N. J., and Stephen C. Levinson. 2006. "Introduction: Human Sociality as a New Interdisciplinary Field." In *Roots of Human Sociality: Culture, Cognition and Interaction*, edited by N. J. Enfield and Stephen C. Levinson, 1–35. Oxford: Berg.
- Gigerenzer, Gerd, Ralph Hertwig, and Thorsten Pachur, eds. 2011. *Heuristics: The Foundations of Adaptive Behavior*. New York: Oxford University Press.
- Gipper, Sonja, 2011. *Evidentiality and intersubjectivity in Yurakaré: an interactional account*. PhD dissertation, Radboud University and Max Planck Institute Nijmegen.
- Goldberg, Adele E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. 2016. Subtle Implicit Language Facts Emerge from the Functions of Constructions. *Frontiers in Psychology*. doi: 10.3389/fpsy.2015.0219
- Herrmann, Esther, Josep Call, María Victoria Hernández-Lloreda, Brian Hare, and Michael Tomasello. 2007. "Humans Have Evolved Specialized Skills of Social Cognition: The Cultural Intelligence Hypothesis." *Science* 317: 1360–66.
- Hurford, James R. 2007. *The Origins of Meaning*. Oxford: Oxford University Press.
- Hurford, James R. 2011. *The Origins of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Hauser, Marc D., Noam Chomsky, and W. Tecumseh Fitch. 2002. "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve." *Science* 298: 1569–79.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the*

- Mind*. Chicago: Chicago University Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Levinson, Stephen C. and Torreira, Francisco. 2015. Timing in turn-taking and its implications for processing models of language. *Frontiers in Psychology*. 6:731. doi: 10.3389/fpsyg.2015.00731
- Nichols, Johanna. "Functionalist Theories of Grammar." *Annual Review of Anthropology* 13 (1984): 97–117.
- Roberts Seán G., Torreira, Francisco and Levinson, Stephen C. 2015. The effects of processing and sequence organization on the timing of turn taking: a corpus study. *Frontiers in Psychology*. 6:509. doi: 10.3389/fpsyg.2015.00509
- Thompson, D. W., 1917. *On Growth and Form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Tomasello, Michael. 2012. The usage-based theory of language acquisition. In *Cambridge Handbook of Child Language*, edited by Edith L. Bavin, pp69–88. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell.
- Zipf, G. K. 1949. *Human Behaviour and the Principle of Least Effort*. Cambridge, MA: Addison-Wesley Publishing.

[会長就任講演]

文脈の科学としての語用論 —演繹的文脈と線条性—

加藤重広¹
北海道大学

語用論をいかなる研究と位置づけるかが研究者によって大きく異なることは言うまでもないが、語用論と意味論との分水嶺として文脈の関与の有無を指標に用いることは一般的と考えてよいと思われる。ここでは、語用論を文脈の科学 (science of context) と位置づけて、文脈を論じたい。

1. 文脈の演繹的設定

言語学的な語用論研究の初期の成果であるギャズダーの記述をまず見てみよう。

- (1) Thus, contexts are sets of propositions constrained only by consistency. Treating context here as a set of propositions makes no theoretical claim and is intended as no more than a technical convenience: we could have treated context as a single proposition, as a sentence, or as a set of sentences, but any of these alternatives would have complicated the definitions to be given shortly. (Gazdar 1979: 130)

ギャズダーは「文脈」を「命題の集合」としているが、単なる方法論上の便法であって、必ずしも枠組みを構成する思想に基づいているわけではない。文脈は表示上文のかたちをした命題の集合だが、一貫性によってまとまりをなしていると考えられている。もちろん、任意に集められた雑多で無関係な命題をいくら集積したところで、それは文脈とは呼ばれない。ここには、「一貫性」をどう規定するか、一貫性を評価する基準・視点をどう

¹ (かとうしげひろ) 北海道大学・大学院文学研究科言語文学専攻言語情報学講座・教授、katosige@let.hokudai.ac.jp。

考えるかという問題があるが、この点は別の機会に論じたい。

Gazdar (1979) を踏まえ、Sperber and Wilson (1987) は、以下のように述べる。

- (2) The set of premises used in interpreting an utterance constitutes what is generally known (see Gazdar.1979; Johnson-Laird.1983) as the *context*. A context is a psychological construct, a subset of the hearer's assumptions about the world. Each new utterance, though drawing on the same grammar and the same inferential abilities as previous utterances, requires a rather different context (if only because the interpretation of the previous utterance has become part of the context). A central problem for pragmatic theory is to describe how the hearer constructs a new context for every new utterance.

(Sperber and Wilson 1987: 84-85)

「発話の解釈に用いる」*premise* の集合を文脈とする規定であるが、「発話の解釈に用いる」とするのは、ギャズダーにおける「一貫性」を見定める視点や基準と読み替えてもよいだろう。関連性理論は、聞き手の解釈という視点から語用論的な枠組みを構築するため、世界について聞き手が持つ想定の部分集合であって、心理的構築物だと規定している。つまり、聴者の知識の一部ないし全部が文脈をなす、ということである。文脈の定義中の *premise* は *conclusion* を引き出すために用いるものであることから、関連性理論は聞き手が引き出す解釈に重点があることがわかる。これに対して、*presupposition* を用いているギャズダーは、文脈を中立的かつ自立的に想定していると言えよう。

関連性理論の考え方は、主に聴者の側からのみ規定する点がギャズダーやジョンソン・レアードとは異なるものの、発話の解釈をおこなう際に「文脈」が規定されるとするので、発話ごとに文脈があるとすることになる。発話の単位をどう定めるかについてもさまざまな考えがあり得るが、発話が一人の話者が発する、(1つ以上の) 文あるいは命題からなる言語形式であるとすれば、発話ごとに異なる文脈を想定するわけである。

文脈を文あるいは命題の集合とする枠組みは計算可能な語用論を構築する上での方法論的便宜と考えることができるが、記述と分析をおこなう者は発話解釈に用いられた前提を文脈として遡及的にしか規定できないことを考えると、このように帰納的に規定される文脈の予測能力は限定的である。このような規定に基づく文脈を加藤 (2007) に従って帰納的文脈 (*reductive context*) と呼ぶことにしよう。

この種の帰納的文脈は、発話がどのように解釈され、どのような推意が引き出されたかを遡って確定する際には精密な分析をおこなうことができる点で非常に有効なものである。つまり、分析対象の「発話」を基点として定めれば、その解釈に必要な命題として「文脈」に含めて個別に決めることができるので、必要な情報を柔軟かつ無制限に取り込んで発話解釈のしくみをあきらかにできる。ただし、帰納的文脈では、発話について事後

の分析をおこなうことをもって、必要な命題を文脈に取り込み、不要な情報は除外することができるので、発話時点より前に、あるいは、発話生成に平行して分析をおこなうと十全な帰納的文脈とはならない。その理論的帰結として、帰納的文脈を用いると予測的な分析は行わないことになる。

しかし、会話参加者は、その場で発話の解釈をおこない、その都度推意を引き出しているのであって、文脈を帰納的に設定する立場は、時間を止めたりさかのぼったりして分析をおこなうという意味で、会話参加者の実態と見るべき線条的な処理を明らかにするものではない。自然な会話のやりとりの中で、聞き手が発話からどのように推意を引き出すかを考えるには、文脈がどのように構成されているかを事前に分類しておき、そこから予測可能な記述と分析をおこなう必要がある。これが、加藤(2007)ほかで提唱されている、演繹的文脈(deductive context)という枠組みである。演繹的に定義される文脈も想定することで、文脈にかかわるメタ的な標示をおこなうシステムを持つ言語についてはより語用論的な記述の精度を高めることが可能になる。つまり、会話参加者の認知処理ほぼ平行して記述することが可能であり、また、予測的な分析も行えるが、時間軸上で遡及的な分析はおこなわないため、必要十分な命題を過不足なく文脈に含めることは難しくなる。事前に、あるいは、発話に平行して文脈を設定することから、結果的に無駄な情報を含めたり、必要な情報を十分に取り込めなかったりする可能性があり、それは発話解釈や分析の完成度を低くしてしまううらみがある。

帰納的文脈と演繹的文脈のこのような関係は、じっくり時間をかければ完成度は高くなるが、ある程度の完成度でよければ時間をかけないでアウトプットが出せる、という、一般的なトレードオフの関係と見ることができる。それぞれ分析にいずれを重視するかの違いということもでき、いずれにもそれなりの利点と欠点があるので、一方のみが単純に優れているということもない。本論では、演繹的に文脈を立てることを方法論として採用し、それによって「文脈」をア priori に規定する枠組みを提案する。帰納的文脈と演繹的文脈は、上述の通り、それぞれに利点があり、相補的に利用すべきものだと考えられるが、本論で演繹的文脈を設定する理由を次節で述べる。

2. 言語の線条性と線条的語用論

帰納的文脈において、発話解釈の精度が高まるのであれば、聴者サイドからの発話解釈をもって全体の語用論的分析に代えたいことは理解できる。しかし、実際の会話においては、会話参加者は発話命題がすべて提示された段階で、発話解釈をおこなうのではなく、相手の発話が始まった段階で順次解釈を進めていくのが普通であろう。現実の発話解釈は、それに先だって、発話における文構造の解釈があり、さらに形態素の同定と音素の同定があるとも考えられる。しかし、言語音を音韻処理し、音韻の連続から形態素を切り

出して、句や節を再構成し、全体の文構造を理解して、さらに文構造について発話解釈を重ねておこなうような手順を実際にわれわれが踏んでいるとは考えにくい。しかし、音声言語としての会話が時間軸上に展開していくことは事実であり、時間の線条性の制約を受けることは確かである。

少し細かく確認しておきたい。まず、線条性は、Saussure (1916) で広く知られるようになった概念であるが、ソシュール自身は線条性 (linéarité) という語は用いず、線的特性 (caractère linéaire) と表現している。

- (3) Le signifiant, étant de nature auditive, se déroule dans le temps seul et a les caractères qu'il emprunte au temps: a) *il représente une étendue*, et b) *cette étendue est mesurable dans une seule dimension* : c'est une ligne. Saussure (1916, 1972: 100)

よく指摘されるように、Saussure (1916) はソシュール自身が執筆したものではないが、その後の影響力を重視して、ここでは特に区別しないで言及することにする。(3) からわかるように、ソシュールはシニフィアンが線条的であることを指摘しているのであって、言語全体やシニフィエなどが時間の線的制約受けるとは述べていないのである。シニフィアンは言語記号の音形に相当する² から、時間軸上に線的に展開するのは至極当然のことである。

シニフィアンに限らず、音声言語それ自体が音声を用いているという点で、時間の線条性の制約は受けることになる。つまり、要素の配列は一方向へのみであり、それは不可逆的であること、同一点に複数の要素が出現することは不可能であることが制約になるわけである。加藤 (2006a) に従って、前者を①不可逆配列の原則、後者を②単層列の原則、と呼ぶことにすると、①に対する反論が Saussure (1916) の編者 Charles Bally によってなされている。

- (4) Les signes sont linéaires lorsqu'ils se suivent, sans se compénétrer, sur la ligne du discours. Il y a non-linéarité ou *dystaxie** dès que les signes ne sont pas juxtaposés, lorsque, un signifiant contient plusieurs signifiés, comme dans le français *va!*, où une seule syllabe renferme l'idée d'*aller*, celles d'*impératif* et de *deuxième personne*, ou lorsqu'un signifié est représenté par plusieurs sig-

² ソシュールのシニフィアンは音形と理解するのが近い。というのは、ソシュールは、音素の連続としてシニフィアンを考えているわけではなく、音素にかぶさる要素 (suprasegmentals) も想定していないと思われるからである。現在の言語学が当然のように設定する「音素 (phoneme)」も 20 世紀半ばに定着し始めたもので、19 世紀末から 20 世紀初頭のソシュールの理論に取り込まれていないことに不思議はないと言ってよい。

nifiants, comme dans *nous aimons*, où l'idée de première pluriel est exprimée deux fois; ou encore quand les parties d'un même signe sont séparées: *elle a pardonné: elle ne nous a jamais plus pardonné* etc., etc.³ (Bally 1932, 1964)

一般に、va というシニフィアンのシニフィエは「(君は) 行け」という、aller の二人称単数命令法という全体であって、これを aller と人称・数・法などには分解されないが、よしんば分解できたとしても、それはシニフィアンの話である。そもそもソシュールは、シニフィアンが線条的だと述べているのであって、バイイのように記号 (signe) が線条的だとはまったく述べておらず、シニフィエが線条的であるとも述べられていないので、それを非線条性 (non-linéarité) として論じるのも適切ではない。もちろん、ソシュール以前に、思考や意味は時間の制約を受けないという議論はあったが (例えば、Manchester (1985))、これも本論では割愛する。このように不正確に理解している人物が Saussure (1916) の編者であることに驚きを禁じ得ないが、それは本論の関心ではない。バイイの造語 *dystaxie* は *dys-* で「不全状態・異常」を指し、*taxie* が「配列・順序」のことであるとすれば、配列に異常があるということであり、「反序性」という訳語も誤解を招く恐れがある。

バイイは、このほかに熟語や成句も線条的でないとして、*tout-à-coup* が *soudain* の意味になることを例に挙げている。*tout-à-coup* は *tout*「すべて」と *à*「に」(前置詞) と *coup*「一撃」の単純なシニフィエの和からその全体のシニフィエが得られるのではなく、これ全体が1つのシニフィアンとなり、それに対応するシニフィエとして「突然」を想定しなければならない。英語の *out of the blue* にしても、日本語の「青天の霹靂」にしても、これらを1つの言語記号と扱い、その全体がシニフィアンであって、それぞれに対応するシニフィエがあると考えればよいことになる。ただ、複数の形態素に分解できる成句や熟語と複合語は形態論上の成り立ちには似ているものの、意味的な特性は異なっている。それでも、音声や形態は時間軸上に可視的に配列されるために、バイイのような誤解が生じるわけである。意味もシニフィアンに対応する配列は考えられるものの、文意味は語意味の単純な和ではなく、文意味に対する解釈や推意となると、シニフィアンの配列は関係がな

³ 参考までに、小林訳を引く。「記号は、それらが話線の上で、相互透入することなく、あい継ぐときは線的である。記号が並置されていなくさえあれば、非線条性すなわち〈反序性〉(*dystaxie*)^{*}がある、たとえばフランス語の *va!* では、たった一個の音節が *aller* の観念と〈命令法〉および〈第二人称〉のそれとをふくむといったふうに、一個の能記がいくつもの所記をふくんでいるとき、あるいは複数第一人称の観念が二回表現されている *nous aimons* におけるように、一個の所記がいくつもの能記で表わされるとき、さらにまた *elle a pardonné: elle ne nous a jamais plus pardonné* といったふうに、おなじ記号の諸部分が引きはなされているとき、等々。」(小林英夫 (訳). 1970 岩波書店) なお、原著の * には、*Du grec dus-*, désignant un état anormal, et *tàxis*, <<alignement, ordre>>. *L'adjectif correspondant est dystactique.* という注がついている。

い。もちろん、提示される情報の順序は解釈に影響するが、シニフィアンそのものの不可逆で一方的な配列性ほど厳密なものとは言えない。

解釈の観点から線条性を考えると、会話において、わたしたちはすべての発話が終わってから解釈を開始するわけではなく、発話が完了する以前に解釈を開始していると考えべきであろう。ときには、解釈を動的に修正したり更新したりして、より精度の高い発話処理をおこなっている。帰納的文脈を用いる場合も、さかのぼってその時点での解釈処理を個別に分析することで、誤った解釈を検討対象にすることは不可能ではないが、事前に誤解や齟齬を想定しながら分析するわけにはいかない。つまり、帰納的文脈と演繹的文脈の最大の違いは、概念的に線条性を処理するか、現実の時間の流れに沿って線条性を処理するかの違いであって、この点のみをとっても、十分に演繹的文脈を用いる意義はあると考えられる。

文構造の解釈をやりなおすガーデンパス現象は一見すると、線条性に反するかのようにあるが、文の内部における記憶領域において文全体が保持されていると考えれば、その領域内で全体を見ながら構造を判断したり、その判断をやり直したりすることができる。

(5) 太郎がタバコを吸っている …

例えば、もっと長い文の始まりの部分として (5) を耳にしたとき、多くの聴者は「タバコを吸う」の動作主として「太郎」を同定するだろうが、(6) のように文の全体像がわかれば、後続部を入力することで解釈を修正することになる。

(6) 太郎がタバコを吸っている 高校生に注意をした。

文の解釈も発話の開始とともに始まり、(6) であれば、下線部に至って、「高校生」を主名詞とする関係節が「タバコを吸っている」であること、「太郎が」は関係節に含まれず、主文の述語「注意した」と呼応する主語であることが判明し、それに合わせて解釈を修正することになる。談話においても、文の連続があるとき、次の文を聞いて解釈が修正されたり、解釈が充足されたりすることはある。

(7) 【教員 A が先日の会議を欠席したことについて教員 B が尋ねる】

B1 「先日の会議のとき、急きょ病院に行かれるということでしたね」

A1 「ええ、うちの子の具合が悪くなってしまって」

B2 「ああ、それは大変でしたね。もう回復されたんですか」

A2 「いえ、そのまま死んじゃって。老衰だから仕方ないんですけど」

B3 「えっ。亡くなったんですか」

A3 「でも、20年近く生きてので」

上記のやりとりでは、B2の発話までBは「うちの子」がAの実際の子供（人間）だと

考えている。A2では、Aの想定される年齢から考えられる人間の子供が老衰で死ぬということにBは違和感を覚えているが、「子供が老衰で死ぬのか」と不合理さを突くわけではなく、単に「亡くなったんですか」と疑問形式で応じている。この疑問形式は、純然たる疑問でも、加藤(2015)に言う不完全受容でもよいが、この時点でBは「うちの子」がAの実際の子供(人間)とする解釈を修正している。このあとで「うちの子」がAがかわいがっていた飼い犬であることが判明すれば、「病院」が人間が受診する一般的な医療機関ではなく、いわゆる「動物病院」であることなども修正が必要になる。このとき「病院」の解釈そのものは間違っていたわけではなく、「病院」として想定してものが典型的なもの(人間のかかる医療機関)ではなく、非典型的なもの(動物病院)だというだけで、文意そのものの修正というわけではない。しかし、会話の中ではこのような解釈の修正はよくあるものである。「学校」という語が大学や専門学校を指すかと思っていたら、特定技能の職人を養成する学校や消防学校であったなど、発話解釈が修正されることは珍しくない。

演繹的文脈は、時系列にそって発話がなされ、解釈がなされ、時にはそれが修正されていくさまをシミュレーションしたり、記録するように跡づけたりすることができる。これは、一定の予測能力も持つが、それは、現実の発話解釈が不完全なのと同程度に不完全であり、誤解やトラブルやその修復なども扱うことができる。時間軸上に展開する発話を時々刻々変化していく状況をたどりながらとらえていく上では演繹的文脈のほうが適しており、動的な記述と分析が可能である。これに対して、帰納的文脈はひとまとまりのやりとり(=セッション)が終了してから全体を可視的にとらえて分析をおこなうという意味では相対的に静的である。また、次節以降で見ると、発話解釈のプロセスを心的プロセスとして記述する場合には、心理言語学の枠組みとも親和性が高い。最後にあげた点は枠組みや分析の重点とかわるが、それ以外の点について2つの文脈を対比的に整理しておこう。

(8) 帰納的文脈と演繹的文脈の対比

帰納的文脈		演繹的文脈
なし	予測能力	あり
高い	発話全体の可視性	低い(発話時点以降は不可視)
非線条的	線条性	線条的
高い	分析精度	低い
発話の俯瞰的把握	特徴	心的過程のシミュレーション

以上の演繹的文脈の特性を踏まえて加藤(2006a, b)では、「線条的語用論(linear pragmatics)」という考え方を提唱しており、あわせて「動的語用論」という枠組みも提案して

いる。一般に、動的 (dynamic) というとき、形式意味論のうち、動的述語論理 (dynamic predicate logic; DPL) をはじめとする動的意味論 (dynamic semantics) を強く連想させるのではないかと思われる。また、Kempson *et al.* (2001) などの動的統語論 (dynamic syntax) も系統的には形式意味論の流れにあると見てよいのならば、dynamic が形式意味論的な基盤を持つ研究の別名であるとする一般的理解が広くうすく存在していると考えておいた方がよいだろう。

しかし、ここで言う動的語用論 (dynamic pragmatics) とは、形式意味論の手法や枠組みとはかかわりがなく、親和性も共通点もほとんど認められない。誤解を避ける上ではあまり適切な名称とは言えないと思われる。

加藤 (2006a, b) で言う線条的語用論 (linear pragmatics) は、以下の2つの特徴を持っている。

- (9) ① 発話が時間軸上に線条的に展開する特性を重視する
- ② 発話の産出と発話の解釈が必ずしも鏡像関係をなさないという前提に立つ

もしも、加藤 (2009) で想定するように、マクロ語用論の一領域を立てるのであれば、心理語用論 (psychopragmatics) との親縁性が強いと考えられる。これまで、心理言語学における文理解 (sentence comprehension) の研究は、構造の解釈・再解釈に力点があったと思われるが、同様の関心を持ちつつ発話解釈に力点を置くことでこれまで扱われなかった (あるいは、十分に検討されなかった) 側面を扱うべき領域として「心理語用論」の意義を認めることができる。本論での趣旨を踏まえると、動的的心理語用論あるいは線条的的心理語用論といった名称が妥当だと思われるが、機会を改めて検討したい。

さて、上述の①の特徴は、発話や、発話を構成する文が未完成の段階でも、聴者が解釈を開始していると見れば、文理解が一義的な経路で完成するのではなく、選択と修正を何度も含みうる可能性を考えなければならないことを示す。また、②の特徴は、動的的心理語用論が、話者と聴者のあいだに見られる認識のずれも捨象せずに、解明の対象に含めることを示している。

3. 発話解釈処理と記憶種別

ここでは記憶領域の種別と発話処理について検討したい。認知心理学で記憶を短期記憶 (short-term memory; STM) と長期記憶 (long-term memory; LTM) に分けることは長らくおこなわれていることであるが、実のところ、両者の機能や構造が心理学において必ずしも一義的に確定しているわけではなく、言語学、とりわけ語用論の研究に利用できるかどうかは検討を要する。認知心理学では、変異はいろいろ見られるが、記憶を3分類し、感覚器における瞬時の記憶たる直接記憶 (immediate memory) に《短期記憶》と《長期記

憶》を加え、おおむね以下のように理解をすることが多い。

(10)



刺激は、感覚器に瞬間的に保持され、これを感覚記憶ないし直接記憶と呼ぶ。更にそれは短期記憶に転送され、その一部が長期記憶に転送されて、恒久的に保蔵される。発話処理の場合、言語音が感覚記憶に捕捉されることになるだろう。

記憶に2種類の部門を想定する考えは、James (1890) の primary memory と secondary memory から始まり、20世紀半ばから、電気信号の伝達である前者と神経細胞間の接続である後者という区分も提案され、前者を短期記憶、後者を長期記憶とする区分が一般化したという。その後、短期記憶を短期記憶庫と見る静的なとらえ方を批判して、作業記憶 (working memory) と見なす概念が提案された (Atkinson and Schifrin 1968, 1971)。記憶という荷物の置き場として場所の比喩で捉える前者にたいして、後者では処理的なプロセスないし理解のしくみとして動的な機能に見立てているということが言えるだろう。

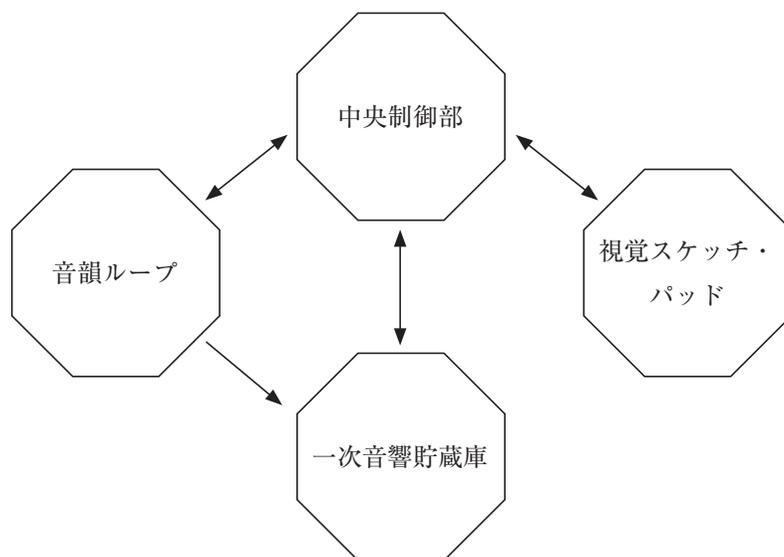
さらに情報工学の進歩に伴い、情報処理プロセスとして手順化して理解されるようになり、ある短期記憶仮説では、central executive(中央制御部)とその属下にあるスケッチ・パッド (sketch pad)⁴と音韻ループ (phonological loop)⁵が作業記憶を構成しているとされるが、Salamé and Baddeley (1982) では、これに一次音響貯蔵庫 (primary acoustic store) を加える提案がなされ、4つの要素からなる作業記憶を想定するようになった。

音韻ループは、「内なる声」とされ、一次音響貯蔵庫は「内なる耳」、視覚スケッチ・パッドは「内なる目」と説明されている。言語学的に見ると、音韻ループと第一次音響貯蔵庫が、音韻部門と音声部門という分け方になっていない点、音韻ループだけが一義的に発声のためのものである点、音韻的 (phonological) としているが音声的 (phonetic) としている文献もあり、音声と音韻 (音声学と音韻論) が区別されていない点、形態処理と意味処理に関する部門が欠けている点などが、言語学から見ると、問題となる。以下の図は、Eysenck (1986) を参考に引用者が簡略化したものであり、言語処理の観点から示唆するところも少なくないものの、言語学的な基盤に合わせて調整し直す必要もある。なお、短期記憶については、このほかに有意味性 (meaningfulness) を「処理の深さ」(depth of processing) と見る考えなどもあるが、ここでは触れないでおく。

⁴ あるいは scratch pad, visuo-spatial scratch pad, visual-spatial sketch pad などとも表現されている。ここでは「(視覚) スケッチ・パッド」と訳している。

⁵ articulatory loop とも表現され、訳語には「音声ループ」も混在している。

(11)



長期記憶についても、陳述的記憶 (declarative memory) と手続き的記憶 (procedural memory) という区分が立てられている (Anderson 1980)。出来事や知識の記憶である前者に対して、後者は運動技能や習慣に関わる身体的な記憶である。さらに、陳述的記憶は、意味記憶 (semantic memory) とエピソード記憶 (episode memory) を区別され、近年いくつかのデータからこの区分が重要であることが確認されている。

言語学的に見ると、陳述的記憶という名称は奇矯な印象を与えるが、この記憶領域に収蔵されている情報は declarative sentence (陳述文) という形式をとっていると考えられているためであろう。文の形式をしており、文法論で言う大まかな「命題」としての内容を備えているものと見れば、「水は1気圧では摂氏0度前後で凍結する」のような無数の陳述文の集合が陳述的記憶ということになる。とはいえ、記憶領域における実際の収蔵のあり方が文形式であることは実証しにくい。単に、記憶を取り出して言明する際には文形式をとらざるを得ないということかもしれないが、文形式で収蔵されているとしておいて不都合はないだろう。もう一方の手続き的記憶は、ことばによらない身体の動きを手順化して習得した技能を主に指しており、人間が「泳ぐ」ことができたり、「自転車に乗る」ことができたりするのがよく手続き的記憶の例として挙げられる。言語学的に見れば、言語習得の過程で特定の音連続ができるようになるのも、ある種の手続き的記憶として習得した結果だといえるだろう。この点はまたあとで触れる。

陳述的記憶の下位区分としての意味記憶は「知っていること」の内容であり、エピソード記憶あるいはできごと記憶とは「覚えていること」の内容で特定時に特定の場で生じたできごとに関する記憶の集積である。エピソード記憶は人間に特有のものであるのに対し、意味記憶は人間以外の動物にも見られると考えられることが多いようだが、現実の経

験をことばで語ろうとすることにエピソード記憶がかかわるなら考える説ではあるものの、記憶の神経系のなかでそれほど明確に区分できるかについては確定的なことは言えないだろう。

エピソード記憶は、個々人の記憶が基体になっているので個人的なものである。しかし、学習により取り入れた知識も同じようにできごとの記憶であり、同様に扱うことになる。「徳川家康が江戸幕府を開いた」といった情報も命題の形をしており、実際に目撃したわけではないが同じように記憶として蓄積される。もっとも、現実には体験したことであったとしても、記憶そのものが再生されるなかで再構築されたり、他の記憶や知識の影響で変容してしまったりすることはあるので、学習によるのか実体験によるのかはさほど重要ではないかもしれない。⁶

また、近年、主に長期記憶において、記憶しようという意思のもとで記憶する explicit memory と、無意識のうちに記憶してしまう implicit memory を区別することが行われ、神経心理学的な実証も継続的に提示されているようであるが、本論では扱わない。⁷

本論が関心を持つのは、人間が日常的にことばのやりとりをする際に、発話の処理を行う上でどのように記憶領域が関わっているのか、どのようなシステムを考えればうまく記述できるのかということである。筆者自身は心理学の各専門領域にはまったく興味門外漢なので、心理学の成果を論評するつもりはなく、もちろんその能力もない。ただ言語研究に必要な理解、語用論の枠組みとして求められるあり方について、言語学、特に語用論の観点から検討を加え、必要なしくみを構築したいのである。

Givón (2001) では関係節構造における修飾部についてエピソード記憶のアクセスを行うものと規定しているが、議論の見通しをよくしておく上では、意味記憶とエピソード記憶の関係も整理しておくべきだろう。

長期記憶には私たちが獲得してから永続的に保持する知識や情報が収蔵されていると考える。情報や知識は更新されてより精密かつ確実に保持されるかもしれないが、獲得した当初の情報や記憶が徐々に緻密さや確実さを失って質の劣化を見ながらとどまっているかもしれない。記憶の負担と保持はトレードオフの関係にあると考えるのが常識的だろう

⁶ 犯罪の目撃記憶が繰り返し語られる中で重要でないことが脱落したり、重要とみなされていることがより重大な出来事として再構成されたりすることが知られている。また、質問や聞き取りの中で相手の期待に応えるようにストーリーの一部を変容させたり、あとから知った情報が当時の出来事に組み込まれるという非論理的処理（例えば、「知らない人」の目撃行動を語る際に、その自分が悪い人だと知ることによって、悪意ある行動であると叙述される）がなされたりすることが知られている。

⁷ なお、以上の記述には、既に触れた文献以外に、浮田・賀集（編）（1997）、葺阪（2002）、田中・橋本（1999）、中條（2001）、村井・濱中（1999）、吉益（1999）、Wilson and Keil (ed) (1999)などを参照している。

が、この点はあとで触れる。ここでは、以下のように暫定的に記述しておく。

- (12) 世界知識は、会話参加者がセッション開始以前から有する知識の総体で、長期記憶内に構築された永続的記憶群である。世界知識は不断に更新され、個別特殊なものから一般普遍なものまでさまざまな知識を含む、有機的な合理体系をなす。理論上容量に限界はないが、利用できる状態に活性化できる容量には制限がある。

なお、(9)で「永続的」と表現しているのは permanent の意味で長い間保持されることを意味している。世界知識の持ち主たる個人がなくなるまで一生涯保持していてもよいが、一定期間の後に消失することもあり得る。長期記憶のなかには、意味記憶と言われるいわゆる語彙に関する記憶もあるが、言語学的には統語規則等も別に存在していると考えられる。つまり、言語記憶という言語に関する記憶カテゴリーを立て、そのなかに統語規則や音声・音韻に関するいわゆる文法知識を収蔵する領域と、語彙に関する知識を収蔵する領域を設定することにしたい。グラマーとレキシコンに知識が分離できるかと言えば、最終的に明確な境界線は引けないと考えるが、記述上区分できるレベルと範囲では、区分しておく方がよいだろう。

ここまでの議論を整理して以下のように表にしておく。この区分はあとで再度修正するが、(13)が心理学の成果を言語研究が活用できるように捉え直した形と言えるだろう。

- (13) 長期記憶の下位区分

長期記憶	身体的記憶	手続き的記憶		
	陳述的記憶	できごと記憶	世界知識	経験的できごと記憶
				学習的できごと記憶
	意味記憶	言語知識	語彙知識	
文法知識				

4. 言語研究のための記憶領域設定

短期記憶 (short-term memory; STM) は、作動記憶 (working memory)⁸と同一視され、両者を単に観点が異なるだけで指示対象が全く同じものに対する呼称と扱うことも珍しくないようである。山下 (1999) では、当初「注意」に重点があった「短期記憶」の概念が「作動記憶」では下位システムを持つ情報保持の機構と理解されるようになったとし

⁸ 「作業記憶」あるいは「ワーキングメモリー」といった訳語も用いられる。

ている。音韻ループは、音声的な情報をそのまま2秒程度保持しているだけとされている(山下 *ibid.*)。当然のことながら、STMはLTMとの保持時間の差異に着目しているもので、作動記憶という捉え方は、処理プロセスの特性に着目しているものだと行うことができる。以下では、この点も踏まえて検討を加えたい。

4.1. 処理記憶

言語学から、これらの記憶モデルを見た場合、いくつかの言語学的知見と原理を考慮に入れたモデルにする必要がある。もちろん、知的処理において言語が関わるのはすべての局面ではなく、記憶のシステムの全体に関わるとも言えないが、一般言語学と一貫性を持ちうるモデルを考えたい。そこで、まず言語学的に考えて、情報の保持がどのようなものでなければ、合理的な記憶システムと見なせないか、という観点から以下論じる。

- (14) 知覚した言語音から音素を抽出するには、音韻体系に関する言語知識を参照する必要があり、音素の連続から形態素を抽出するには、語彙や形態に関する言語知識を参照する必要がある。形態素の配列や呼応、統語スコープなどの統語構造解釈にも言語知識を参照しなければならない。

伝統的な言語学の知見には、Martinet (1970) の言う二重分節がある。もっとも、言語が要素の組み合わせで階層性をつくるのだとすれば、2階層に限定する必要はなく、音素から形態素、句、節、文、談話といういくつもの積み上げ階層を想定するかたちで規定するほうが、実態に即していると考えられる。しかし、要素の多重な組み合わせという構造を持っているのは言語そのものであって、それを使用者が同じ手順で処理しているとは考えるべき根拠はない。少なくとも、われわれは自覚的に音素処理や形態素処理を回帰的に行ってはおらず、瞬時に発話の解釈を遂行する現実を踏まえると、総合的に処理していると考えるのが妥当だろう。とすれば、(14)は(15)のように改めることになる。

- (15) 知覚した発話を処理するには、言語知識を参照しなければならない。発話処理は、総合的に行われる。

発話は問題なく処理されれば、音声や音素、形態素や構造などのレベルの処理を意識することはないのが普通である。もちろん、相手が鼻濁音を使うかどうかには留意して聞けば、音声をプロファイルすることは可能であり、聞き慣れない語や表現に注意を払うことも可能である。母語・母方言以外では、音声や音素・形態素、あるいは、構造などについての処理がうまく行かない(長期記憶に参照すべき知識が収蔵されていない)こともあり、発話処理以前の段階で止まってしまうことはあり得る。

私たちは、通例、発話を行った相手が無意味な音連続を発するわけがない、と信頼しており、相手の発話が解釈可能なものであるという事態が成立することはコミュニケーション

ンにおける最低限の必要条件である。これは、原則 (principle) と言うよりも、公理 (axiom) に近いものとして位置づけておくべきだと考えられるので、暫定的に《解釈合理性の公理》(axiom of rational interpretability) と呼ぶ。⁹ この点は、機会を改めて論じる。

さて、聞き取った発話の音声や形態が適切に処理できないときは、正しく処理するために、発話をできる限りそのまま保持する必要がある。

- (16) 発話の解釈処理がなされるまでは入力した言語形式を当初捕捉した状態のまま情報を保持しておく必要がある。しかし、原初形式を未処理のまま長時間保持することは大きな負担であり、保持できる容量にも限界がある。処理後は、原初形式のまま保持する必要がある。処理後は文脈として保持できればよい。

日常のやりとりの中では、相手が言い間違えたり、変わった話し方や不正確な発音をしたりすることもある。それがきわめて特徴的で興味深ければ、私たちはそれをなるべく正確に記憶しておこうと意図して保持につとめることもある。しかし、文字で記せば「あのね」でしかないような談話標識も、イントネーションやアクセント、調音時間の長さやピッチ、声の特徴などまで正確に保持しようとするれば、相応の認知的負担が生じる。

私たちは、相手の発話の音声を録音するように、あるいは発話に伴うパラ情報 (表情やジェスチャ、視線など) もあわせて録画するように、保持しておくことは不可能でないが、それはごく短い時間の一部だけであり、保持しようとしても記憶は徐々に劣化してしまう。発話の直後であれば相手の発話を忠実にまねて再現することができても、時間が経てば再現の忠実さが低下することは私たちが日常的に経験するところである。

発話ももともとは音声連続であり、それにメタ情報やパラ情報が伴っている。いわゆる文理解にあたる心的処理をおこなうために入力形式をそのまま保持しておく領域として処理記憶 (processing memory) を設定することにする。処理記憶は、言語の構造解釈や文意味の抽出が終わるまで、聞いたとおりの言語形式をできるだけ忠実に保持しておく領域である。もちろん、当初の言語形式は、超分節素にあたるものやメタ的要素・パラ的要素を含んでいるので、そのまま保持することは大きな負担であり、現実的には数秒程度の発話を収録しておき、処理が済めば保持する必要がなくなると考えればよい。この処理記憶は、保持時間だけをとれば短期記憶に近いように見えるかもしれないが、最終的な領域群の仮説を見れば、単純な対応で考えない方がよいことがわかる。

言語形式としての保持の負担を効率的に減少させるには、より重要な特徴だけを残し、相対的に重要でない特徴は捨象していくという方法が考えられるが、ほかに、メタ情報を

⁹ 数学的な厳密さで「公理」と称すべきかについては、別途検討を加える必要がある。また、本論は特に「公理」という呼び方に拘泥するものではないので、数学における定義と同じものとして「公理」と呼ぶべきでなければ、混乱しない名称を創出すべきだろう。

言語的に付すことで特性の保持を代替するという方法があるであろう。前者は、声の特徴やイントネーションなど相対的に重要と思われる点を残し、それ以外は正確な保持を放棄することなどがそれにあたり、やり方によっては当初の言語音をデフォルメすることで保持することにもなる。後者は、「あのね」を形態素レベルにしてしまい、それに「まるでおじいさんのような口調で言った」あるいは「〇×弁のようなイントネーションで言った」というメタ情報を付すという方法である。これは、前者のやり方と違い、情報全体が言語形式化しているために保持しやすく、検索や再利用が容易という特徴がある。

4.2. 談話記憶

問題点として取り上げるべきものとしては、さらに以下の2点がある。

- (17) 発話のやりとりを円滑に進めるには、解釈処理済みの情報をやりとりが終わるまでの間保持しておく必要がある。ここでいう「解釈済みの情報」とは、当初捕捉した言語音が文意味や文構造の抽出処理（アブストラクション）を経て、効率的に保持できる状態になっている意味内容を指しているが、やりとり（＝セッション）が続く限り、解釈済みの情報を保持していることは会話参加者の義務である。セッションの終了後、解釈済みの情報は、保持する必要がなければ世界知識に組み込まれることはなく、保持する必要があるれば世界知識に組み込まれ、長期記憶の一部をなすことになる。
- (18) 発話の解釈には、言語知識だけでなく世界知識も参照する必要がある。ここでいう世界知識は、レキシコンなどの言語知識以外の記憶で、不断の更新がなされる、開かれた知識体系であり、原則として体系としての合理性が保たれ、一貫性が崩壊しない必要がある。一方、言語知識は、言語習得期までは開かれた知識体系であるが、徐々に閉鎖性が強まり、世界知識ほどの柔軟性がない知識体系となる。

処理が済んだ後に、処理前のデータと処理後のデータの両方を保持しておくことは、再度処理をし直すことが容易になるという意味では意義がある。しかし、有期の記憶に容量的な限度が考えられること、保持停止の時点をはかに設定しにくいこと、処理のし直しが発生する頻度に対して保持する情報量が大きくきわめて非効率なしくみになること、などを考え合わせると、一旦処理が済んだ時点で保持状態の指定を解除すると考えておくべきである。再解釈に必要なデータの復元や遡行的推定は解釈後のデータからでも可能な場合が多い。例えば、[sæ:go]という言語音を「最後」という語形に解釈したあとは、この言語音をそのまま保持することなく放棄してもよいことになる。しかし、当初の言語音を保持していない状態になって（要するに、忘れてしまい、正確に覚えていない状態になって）、「最後」と思った語形が実は「生後」の聞き間違いであったと考えれば、/saigo/ と

/seigo/ は形態が類似していると遡行的推定を行うことも可能である。

未処理の言語音声を音韻レベルへ、音韻レベルを形態レベルへ、形態レベルから構造を確定する統語レベルへ、文構造から発話意味を確定する意味レベルへ、それぞれ次のレベルに処理が進むことをここでは抽出 (abstraction) と呼ぶ。ここでは、伝統的な言語学の知見も踏まえて、音韻・形態・統語・意味という4つのレベルを暫定的に想定するが、実際の処理は最終的な出力形が得られればよいので、必ずしも順次処理をおこなう必要はない。但し、ここではモデルとして理論的な基盤を構築するための手順として設定するとどめ、我々の認知処理としての実態の中では、そのような段階を踏んで処理しているわけではないと考える。むしろ、個々のプロセスではなく、1つの統合的な領域において特に区分することなく必要な処理が総合的になされているとするのが現実的には妥当であろう。そこで、言語学的に次のレベルに処理が転送され、その個々のレベルで重要な情報形態に調整されることを機械的抽出 (mechanical abstraction) と呼び、理論的な概念にとどめておく。ただし、聞き取った言語形式からその文意味を取り出したり、発話意味 (推意なども含む) を取り出したりすることは現実的にあり得る。必要があれば、音素や形態素を取り出すこともできるだろう。音素・形態素・文構造・文意味・発話意味を取り出すことを個別に、それぞれ音韻的抽出、形態論的抽出、統語論的抽出、意味論的抽出、語用論的抽出として設定しておく。既に述べたように、これらが別々におこなわれているのではなく、総合的になされていると本論では考えるが、言語学的分析の便宜を考えて区分できるようにしておく。

本論で提案するもう1つの「抽出」は、分析の概念ではなく、いわば情報を記憶領域で保持する際に、情報が保持できるように情報の精度を低下させる変化で、こちらは意図的な処理ではなく自然に生じる変化なので、自然的抽出 (natural abstraction) と呼ぶ。これは、談話記憶や知識記憶で見られるものなので、それぞれ個々に論じる。

なお、「セッション」(session) という用語についても、簡単に確認しておきたい。ここでセッションと呼ぶのは、「やりとり」の開始から終了まで言語行動の全体である。もちろん、実際の分析においては、どの時点を開始と見なすか、どの時点を終了と見なすかといったことに厳密な定義が必要な場合もあるであろう。本論では、今後修正する余地を残しつつ、以下のように考えておきたい。

- (19) セッションとは、「やりとりの開始から終了まで言語行動の全体」であり、最初の発話開始点をもって始まり、最後の発話終了点を持って完了する。セッションが開始してから、話題が転換するなど、一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり、セッションの内部におけるより小さい単位をパラグラフ (paragraph) と呼ぶ。1セッションは1つ以上のパラグラフからなり、1パラグラフは1つ以上の文からなり、1つの

文は1つ以上の単語からなる。

セッションは、二者の会話のみに適用されるわけではなく、十数名のやりとりでもよく、会話参加者が途中で変わる（抜けたり、加わったりする）こともありうる。文章を読む場合は、読み始めから読み終わりまでの読み手の動作が1セッションをなすことになる。

語用論の研究の観点からの記憶領域設定の議論に戻ろう。(16)に言うような、会話のセッションの間保持されなければならない情報がある。これは、いわゆる言語形式を用いて情報化された文脈である。これは、単純に見れば、発話の蓄積であるが、言語形式を用いて顕在化されたものであるところから、形式文脈 (formal context) とここでは呼ぶことにする。形式文脈は顕在的なもので、会話参加者が共有していることが前提 (加藤 2006b, 2009) になっている。例えば、A と B の二人が会話していて、A が「僕は風邪を引いていて体調が悪いんだ」と言ったとすれば、二人のセッションが終了するまで、この情報は保持されなければならない。一般に、自分についての情報を披露した A がこの情報を失うことはないが、聞き手として情報を得た B も原則として保持していること、忘れないことが求められる。万が一、この発話を受容しておきながら、数分後に、B が「君、体調が悪そうだね。風邪でも引いているんじゃないの?」と A に言ったとすれば、形式文脈をセッション参加者が共有保持するという義務 (= 形式文脈共有義務、加藤 *ibid*) に違反することになる。セッションの形式文脈とそれに関連する状況文脈などが収蔵される記憶領域を談話記憶 (discourse memory) と呼ぶ。

談話記憶は1つのセッションの開始とともに生じ、セッションが続く限り保持される。長時間の話し合いなどを想定すれば数時間 (場合によっては十時間以上) 情報が保持される記憶領域ということになる。もちろん、長時間にわたって大量の情報が入力されれば、正確に保持されず、一部失われてしまうことも考えられる。大量の情報を保持するには、重要な情報や強い関心を持つ情報、あるいは保持しやすい情報を保持し続ける一方、そうでない情報は質を落としたり、情報そのものを喪失したりして容量を確保しなければならない。端的に言えば、おおまかに覚えておき、些末なことは忘れながら、全体として必要なことだけは守るということであり、これは記憶の劣化という面があるものの選択的保持という面もある。これが、談話記憶における自然的抽出である。

談話記憶には処理記憶を経て解釈処理の済んだ情報が順次送り込まれる。セッションが続く間は自然的抽出は生じるものの、おおそ情報は保持されており、それらの情報はいつでも発話解釈に使える状態になっている。この「発話解釈にすぐに利用可能な状態」のことを情報が「活性化されている」「活性的だ」と言うことにする。つまり、談話記憶の情報はいずれも活性化されていることになる。

4.3. 知識記憶

「世界知識」(world knowledge)とは、セッションが始まる前から存在している記憶で、いわば世界に関する知識の総体である。「世界知識」は最終的には個人的なものだが、人間として共通する普遍的知識(例えば「生き物は死ぬ」など)もあり、文化的知識などいくつかのレベルの共同体で共有される知識もあり、さらに家族など小規模の共同体でしか共有されない知識もあり、もちろん本人しか知らないような知識も含んでいる。これは、トップダウン的に設定していくやりかた(イーミックなとらえ方)もあるだろうが、本論では、エティックに世界知識を捉えてボトムアップ的に設定する方法論をとる。すなわち、まず、「世界知識は個人が持つ、世界に関する知識の総体である」とし、「そのなかには共有されているものも共有されていないものもある」と考える。共有のレベルで分けて階層化することに意味がないわけではないが、特定個人しか知らないことが急速に多くの人が共有する知識に転じることもあり、共有度を過度に重視すべきではないと考える。

さて、発話の意味解釈を十分に行うには世界知識と言語知識の両方が必要である。「世界知識」も「言語知識」も、新しい情報をもたらされることによって、知識が拡充されたり修正されたりすると考えられ、常に更新されうると見られるが、言語知識には一旦習得してしまえば統語規則のように新たな追加が通例行われぬものもある。また、世界知識と同じように、個人ごとのエティックな知識として言語知識を想定すると、我々は言語習得の臨界期を過ぎても少しずつ語彙は拡充して行くのが普通である。しかし、常に語彙習得をおこなって言語知識を更新しているとまでは考えにくい。つまり、言語知識を、完全に硬直化して追加も修正もできないものと見なす必要はないものの、世界知識のように不断に更新されていると考えるべきでもないということになる。言語知識は、世界知識が完全に開放系であるのに対し、領域によって異なるもののおおむね閉鎖性が強く、語彙体系などある程度の開放性が認められるところもあるが、統語規則など閉じた体系になっているところもある、と見ておくべきだろう。これらの知識のある場所をここでは「知識記憶」と呼んでおく。

知識記憶には世界知識があり、世界知識は先に述べたできごと記憶からなっているが、自分が経験して獲得した情報なのか学習によって得た情報なのかは、その情報の精密さや鮮明さにおいて違いがあると考えられるものの、単純な境界線は引きにくいのではないだろうか。30年前に訪れた観光地の情報と昨晚テレビで視聴した観光地の情報では、前者が直接的ではあるものの、鮮明さや精密さにおいてまさっているとは限らない。長く収蔵されていると、単純な区別がしにくくなるここでは考えておく。同じように「柴犬」や「りんご」など、触ったり食べたりした経験がその語彙的意味の一部を形成している可能性を考えると、世界知識と言語知識の間にも整然と境界線を引くことがためらわれる。先の(10)の長期記憶の下位区分は、語用論的分析の枠組みとして、以下の(20)のように整理し直したい。

知識記憶は膨大なので、全体が活性化されているとは考えにくい。しかし、言語知識の多くは活性化されているか、刺激によってすぐに使える状態になる半活性の状態にあると考えられる。世界知識は、セッションが始まれば、活性化が始まるが、膨大な情報の多くは活性化されないままで、いわば眠っていると見ていいだろう。ここでは、セッションが始まり、発話解釈をおこなうに際して必要な情報や必要と見込まれる情報が、世界知識内で活性化され、談話記憶に送られると考える。

(20) 知識記憶の下位区分

知識記憶	身体的記憶	手続き的記憶		
	陳述的記憶	できごと記憶 意味記憶	世界知識 言語知識	経験的できごと記憶 学習的できごと記憶 語彙知識 文法知識

総じて、語用論的には、以下のような記憶領域を設定することになる。

(21)



5. 3つの文脈種別と記憶領域

演繹的に定義される文脈としては、すでに述べたように、形式文脈 (formal context)、状況文脈 (situational context)、知識文脈 (knowledge context) を考える。なお、以下で基準点というものは、談話が線条的に展開していく上で想定される基準的な一時点のことである。進行中の談話における「現時点」や、分析対象のセッションに置かれた視点の位置がおおむね基準点に相当する。この3区分は、筆者が必要に迫られて設定を考えたものであるが、すでに Ariel (1990) に同種の3区分が挙げられている。¹⁰ Huang (2007)、Cutting (2007) ほかにも同様の3区分があるが、簡単な既定にとどまっており、発話処理や記憶領域との関係に言及したものはない。

Huang (2007) で言う linguistic context が本論の形式文脈におおむね相当し、physical context はおおむね状況文脈に相当するが、本論で言う状況文脈のほうがやや含む範囲が広い。また、situational context は Crystal (2003)⁵ が言うように、非言語的な情報を広

¹⁰ 加藤 (2003, 2004) では述べているが、管見の限り初出は Ariel (1990) である。そこでは、詳しい議論はなく、単に名称が言及されているに過ぎない。

く一括して指して用いられることがあり、その場合には、セッション参加者の知識や信念なども含むことになるが、本論でいう状況文脈は物理的に存在する外的状況の理解や解釈のみを指す。また、Huang (2007) の言う general knowledge context が知識文脈に相当すると言ってよいが、これも詳しい説明はない。Langacker (1987) の百科全書的知識は本論の世界知識よりやや広い規定になっているが、おおむね同じと言ってよさそうである。

帰納的な文脈がすべて発話の解釈や推論に関わる実体的なものであるのに対して、ここで言う演繹的な文脈は、発話の解釈や推論に関わる可能性があるだけであり、中には実体化されていないものや解釈・推論に利用されないままのものも含んでいる。その意味では、帰納的な文脈が実体的なものであるのに対して、演繹的な文脈は潜在的なもの、理論的なものだということができる。ここでは、以下のように規定しておく。

- (22) 形式文脈とは、同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の記憶である。その意味では形式性・客観性が高い。ただし、談話記憶内に膨大な量を収蔵しておくとも自然的抽出が生じうる。
- (23) 状況文脈とは、セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況についてのセッション参加者の認知と解釈に基づく情報の集合である。原則として、セッション参加者が共有可能であり、命題の形にすることができるが、その度合いは一定でない。談話記憶内に収蔵される。認識が容易なものは共有度が高く、共有も義務的であるが、容易に認識できないものは共有の義務も低い。物理的状況が共有されていないならば、得られる状況文脈も共通されない。
- (24) 知識文脈とは、セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識にあたるものである。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが、共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが、あまりにも膨大であるために、すぐに推論や解釈に使えるとは限らない。推論・解釈に使える状態に活性化されているものが知識記憶領域から談話記憶領域に送られると考える。知識記憶内にあっても活性化されていない情報はすぐには解釈に使えない。

これに、形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で、推論を行うことで新たに得られる想定を加えることができる。二次的な文脈 (= 高次元文脈) と見て、これに加えることもできる。

6. 《過剰な活性化》と《文脈逆成》

セッションの場で得られた発話の言語形式は、処理記憶を経て解釈処理され、談話記憶に送られる。聴者として他者の発話を処理する場合は、言語知識や世界知識や談話記憶の情報を参照することになる。話者として自分自身の発話をどのように処理するかについては、ここまでで細かに検討していないが、みずからの発話であることから半ば処理が終わった状態で入力され、ほとんど解釈処理の負担なく談話記憶に送られると考える。もちろん、自分の発話であってもモニターしている面があるから、想定したものと異なる言語形式であった場合（言い間違いなど）は、会話分析でいう修復が必要になる。そのようにして処理記憶から送られて談話記憶に蓄積されるものが形式文脈である。

ただし形式文脈も厩大になると、機械的に正確に保持するのは負担であり、要するにどういう内容なのかわかればよく、重要な点が保持できればよい。その際には、詳細な情報は捨象され、保持されやすい状態に変化していく《自然的抽出》が生じる。

セッションが進行する物理的な空間にある情報を参加者が個々に解釈して理解したことは談話記憶に状況文脈として送付される。これは、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚を使って得た非言語情報を言語化したものであるが、看板や貼り紙を見るなど文字情報も含まれる。文字情報が必要であれば処理記憶を通して談話記憶に送られる。おおむね状況文脈は共有されているが、一方だけが気づいていて他方が気づいていないこともありうる。

会話参加者が知っている世界知識は厩大であり、処理記憶や談話記憶の情報をトリガーとして関連する情報が活性化され、談話記憶に送られる。厳密に言うと、談話記憶に情報を送ってもその情報は知識記憶・世界知識から消失・削除されるわけではないから、コピーされると言うべきだろう。談話記憶では、活性化された世界知識である知識文脈と状況文脈・形式文脈を使って二次的に得られた推論も存在できる。これらの文脈情報を使って、語用論的な解釈がなされるわけである。

ここでは、文脈と記憶領域に関連して、2つの考え方を提案したい。1つは、私たちは、発話の解釈にあたって、必要と見込まれる情報をひとつおりの談話記憶に世界知識から送り込むとする考え方である。これまでの、語用論における解釈の捉え方は、解釈は合理的になされ、必要最小限の文脈が用いられるとすることが多かったが、それとは逆の考え方である。必要最低限の文脈だけを活性化するには、そのあとの展開が正確に予測できていなければならないが、日常の会話では会話の展開は正確に予測できない。台本がある演技であれば、先の展開を知っていることになるが、それは自然発話とは異なる。帰納的文脈は結果として必要な解釈をあらかじめ知っているのだから、無駄な要素をはぶいてできるだけ効率的な解釈のなりたちを考えることができる。しかし、オンタイムの会話では、先の展開はわからないから、とりあえず使えそうな情報や関わりのある情報は、多く活性化しておくと考えられる。その多くは、先の展開ではつかうことがなく、いわば無駄撃

ちになるようなものである。しかし、演繹的な文脈論では、結局使わない情報も含めて大量に活性化すると考える。これはいわば《過剰な活性化》で認知処理の無駄が多く含まれる方略であって、今後議論が必要だが、これまでの効率的な文脈論とは異なる非効率的な文脈論としてその可能性を考えたいと思っている。

もう1点は、分析の手順である。いままでの語用論的分析では、話者と聴者、セッションのなされる状況、関連する双方の世界知識などあらかじめ文脈がわかっているところに発話が生み出され、その発話解釈を行うとすることが多かった。いわば、文脈の中に発話が生み出される《文脈先行論》である。しかし、私たちが解釈を行う際には、文脈情報が足りないこともある。すべての場合に、話者の性別や年齢や職業、あるいは世界知識がわかっているわけではない。文脈がまったく、あるいは、ほとんどないところに生み出される発話は解釈できないかという、解釈が一義的に確定はしないものの、一定の解釈が可能であることは、私たちが日常的に経験するところである。このときは、発話そのものから文脈情報を復元し、足りない文脈情報を補うという認知処理を私たちは行っている。語形生成の際に、派生形に見えるものから実は存在しない基本形を生成する、形態論的な「逆成」(back formation)に準えて、このような語用論的操作を《文脈逆成》(contextual back formation)と呼びたい。¹¹

文脈逆成は、広告のコピーの解釈（発話者の属性や発話状況が不明で、文脈状況が大きく欠落している）や、俳句や和歌の解釈などで典型的に見られ、文脈逆成それ自体の創造性が文学的創造性の基盤になっているといえることができる。翻って、日常の会話のやりとり（セッション）においても、文脈がなんらの不足なく十全に揃っているわけではなく、発話から、あるいは発話と利用可能な文脈から、私たちは必要な文脈を生成していると考えべきだろう。文脈逆成は、日常的に、無駄になる可能性が高くても、文脈として活用される見込みが多少なりともあれば活性化する、語用論的な処理があってはじめて可能になる能力だとも言える。言語研究は、以前ほど文学研究と密接な協力関係を形成せず、どちらかという、両者は離れがちだと言えるが、文脈逆成から文学研究への語用論的貢献の可能性を探ることも可能だと思うのである。

7. 終わりに

紙幅の都合もあり、本論で述べた内容をここでは繰り返さない。講演¹²において触れた

¹¹ 逆成は、typewriter から typewrite という動詞を生成するような語形成を言う。なお、呂 (2015) では同種概念を「文脈創成」と呼んでいる。

¹² 本論は、第19回日本語用論学会（2016年12月11日・下関市立大学）における会長就任講演を再構成して論文化したものである。

例やエピソードも割愛したが、演繹的文脈と3つの文脈種、語用論的に設定する記憶領域、また、その関係は一通り述べることができた。また、そこから得られる《過剰な活性化》と《文脈逆成》は、概要の提示にとどまっているが、実際の分析にどのように使えるか、どういった精緻化が必要かなどは、今後機会を改めて論じたい。

参考文献

- Anderson, John R. 1980. *Cognitive Psychology and its Implications*. San Francisco: Freeman and Company.
- Ariel, Mira. 1990. *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London: Routledge.
- Atkinson, R. C. and Schiffrin, R. M. 1968. "Human Memory: A Proposed System and its Control Process." In K. W. Spence and J. T. Spence. (eds) *The Psychology of Learning and Motivation*, Vol. 2. London: Academic Press.
- Atkinson, R. C. and Schiffrin, R. M. 1971. "The Control of Short-term Memory." *Scientific American* 225, 82-90.
- Bally, Charles. 1932, 1964⁴. *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: A. G. Verlag. (シャルル・バイイ 『一般言語学とフランス言語学』 小林英夫訳、1970年、東京：岩波書店.)
- 中條和光. 2001. 「文の理解」、森敏昭 (編) 『認知心理学を語る 2』 33-54、京都：北大路書房.
- Crystal, David. 2003⁵. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Oxford: Blackwell.
- Cutting. 2007³. *Pragmatics and Discourse*. London: Routledge.
- Eysenck, M. W. 1986. "Working Memory." In Cohen, G, Eysenck M. W. and LeVoi M. E. *Memory: A Cognitive Approach*, 1-89. Philadelphia: Open University Press.
- Gazdar, Gerald. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. London: Academic Press.
- Givón, Talmy. 2001. *Syntax II (revised edition)*. Amsterdam: John Benjamins.
- Huang, Yan. 2007. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- James, William. 1890. *The Principles of Psychology*. London: Holt.
- Johnson-Laird, Philip N. 1983. *Mental Models: Towards a Cognitive Science of Language, Inference, and Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2004. 『日本語語用論のしくみ』 東京：研究社.
- 加藤重広. 2006a. 「線条性の再検討」、峰岸真琴 (編) 『言語基礎論の構築の構築へ向けて』 1-25、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 加藤重広. 2006b. 「語用論の / という問題」、峰岸真琴 (編) 『言語基礎論の構築の構築へ向けて』 169-190、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 加藤重広. 2007. 「ソシユールから語用論へ」 『月刊言語』36(5)、40-47、東京：大修館書店. (再録：『『言語』セクション第3巻』 281-287、2012年)
- 加藤重広. 2009. 「動的な文脈論再考」 『北海道大学大学院文学研究科紀要』 128号、195-223.

- 加藤重広. 2015. 「発話的な効力と発話内的な効力」、加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム』1、27-56、東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2016. 「統語語用論」、加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究ハンドブック』159-185、東京：ひつじ書房.
- Kempson, Ruth, Wilfreid Meyer-Viol, and Dov Gabbay. 2001. *Dynamic Syntax: The Flow of Language Understanding*. Oxford: Blackwell.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 呂 (Lu) 晶. 2015. 『日本語広告表現の語用論的研究—形式と機能に着目して—』（北海道大学文学研究科学位論文）(http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61607/1/Lu_Jing.pdf)
- Manchester, Martin L. 1985. *The Philosophical Foundations of Humboldt's Linguistic Doctrine*. Amsterdam: John Benjamins.
- Martinet, André. 1970. *Éléments de linguistique générale*. Paris: Librairie Armand Colin.
- 村井俊哉・濱中淑彦. 1999. 「意味記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』101-112、東京：中山書店.
- 荳坂満里子. 2002. 『ワーキングメモリー』東京：新曜社.
- Salamé, Pierre. and Baddeley, Alan D. 1982. “Disruption of Short-term Memory by Unattended Speech: Implications for the Structure of Working Memory.” *Journal of Verbal Learning Verbal Behavior* 21, 150-164.
- de Saussure, Ferdinand. 1916, 1972. *Cours de linguistique générale*. (Tullio de Mauro 注釈版. 1972. Paris: Payot. を参看)
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1987. “Précis of Relevance: Communication and Cognition.” *Behavioral and Brain Sciences* 10, 697-754.
- 田中康文・橋本律夫. 1999. 「エピソード記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』75-87、東京：中山書店.
- 浮田潤・賀集寛（編）. 1997. 『言語と記憶』東京：培風館.
- Wilson, Robert A. and Frank C. Keil (ed). 1999. *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. Cambridge MA: The MIT Press.
- 山下光. 1999. 「作動記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』61-74、東京：中山書店.
- 吉益晴夫. 1999. 「自伝的記憶（遠隔記憶）」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』88-100、東京：中山書店.

[書評論文]

定延利之『コミュニケーションへの言語的接近』

東京：ひつじ書房，2016，viii + 357p. ISBN978-4-89476-762-1

滝浦真人

放送大学

1. 本書は何の本か？

著者の定延は言語学者である。しかるに本書のタイトルは、ともすると冗長にも思える『コミュニケーションへの言語的接近』であって、『コミュニケーションの言語学』などではない。目次を開けば、とりあえずの理由は了解されようか。

〈目次〉

第1章 はじめに

第2章 前提

第3章 伝達を前提とするコミュニケーション観の批判的検討

第4章 意図を前提とするコミュニケーション観の批判的検討

第5章 共在を前提とするコミュニケーション観の批判的検討

第6章 行動を前提とするコミュニケーション観の批判的検討

第7章 おわりに

「Xを前提とするコミュニケーション観の批判的検討」という章タイトルが並ぶ本書は、言語学が依拠するコミュニケーション観に対する批判、すなわち“言語学批判”の書なのだった。なるほど近代言語学は、ラングこそが言語学の対象であるとして、パロールの諸相に目を向けようとしなかった。そうした構えが批判されるのだとすると、では本書は、使用の相においてこそ言語のコミュニケーション上の働きが捉えられると考える語用論を称揚する書なのだろうか？ この書評の読者でも、語用論との親和性が強そうだと思って手に取る人が少なくないかもしれない。

だがもう一度目次を見てほしい。批判される「X」に入るのは、まずもって「伝達」であり「意図」である。じつは語用論研究ほど、「伝達」の「意図」がどのようにして実現す

るかや、そうした「伝達」によって言語が果たしていると考えられる「機能」をさぐるうとするディシプリンもないのではなかろうか？ グライスであれ、グライス批判の関連性理論であれまたネオグライシアンであれ、「伝達」と「意図」と「機能」を語らずには何も語れない。

評者は一応自分を語用論の研究者だと思っているので、俎上には自分で上がることにする。多分に「コミュニケーション」の相を対象にしたと思える自著（滝浦 2008）の原稿ファイルに検索をかけてみると、「伝達」は45回、「意図」は25回、「機能」に至っては96回も使われていた。これでは定延によってメッタ切りにされることを覚悟しなければならない。かように、この定延本はまさに、こうした“語用論学者”たちが自明のように言語とコミュニケーションを取り上げるときの手つきを批判する書なのである。したがって、本書を読もうとする語用論学徒は、本書を言語学批判というより、語用論批判の本だと思ってかかるのがよからう。

批判の対象として最も根源的に収斂するのがコミュニケーション・モデルである。シャノンとウィーバーの“通信＝伝達”的なモデル（1948年）以来、発信者と受信者の間でメッセージの“同一性”を担保すると考えられたのがコードの同一性だった。たとえば、「交感的（phatic）機能」のような“非伝達的”な側面まで捉えようとしたヤーコブソンのモデル（Jakobson 1960）でさえも、中央に置かれていたのはやはりコードだった。コードモデルの限界を指摘して提案されるようになったモデルの1つに、スペルベル&ウィルソンによる関連性理論の推論モデル（Sperber and Wilson 1986）がある。“通信＝伝達”的なコミュニケーション観を超克することはできただろうか？ 定延は次のように述べる。

「人と人のコミュニケーションとは、話し手（或る情報を知っている者）と聞き手（その情報を知らない者）との落差を埋めるものである」と考え、「話し手の心内から口へ、そしてコミュニケーション・チャネル（たとえば電話会話なら電線、電話を用いなければ空気）を通過して、聞き手の耳へ、さらに聞き手の心内へ」という情報の流れを前提とする点では、推論モデルもコードモデルと変わらない[...]。また、「情報意図（informative intention）」と「伝達意図（communicative intention）」が共に無ければコミュニケーションとは認めないという点では、推論モデルは「意図に基づく」ということにもなる。(12¹)

「伝達」や「意図」に回収することのできない、かつ人びとがことばで生きていくときに欠かすことのできないものが、コミュニケーションにあると彼は考えている。それを捉え、

¹ 以下、本書のページに言及する際は数字だけを示すことにする。

説明できる理論的枠組みをさぐることが本書の目的であると言っていいだろう。

2. 本書の発話観

2.1. 「ふつうの話し方」

説明されるべきと本書が考えるのは、ふつうの人が話す「ふつうの話し方」である(16)。それにはたとえば次のような現象が含まれる。相手の知らない情報を教えてあげる場面では、下のaのように終助詞「よ」を伴う発話は自然でも、終助詞の付かないbの発話は不自然に響く。ところが、何か秘密でもこっそり教えるかのようにヒソヒソ声で話すのなら、終助詞の付かないcもおかしくなくなる(16)。

- (2.2) a. お腹がすいているんだったら、冷蔵庫にプリンがあるよ。
 b.??お腹がすいているんだったら、冷蔵庫にプリンがある。
 c. お腹がすいているんだったら、[秘密吐露調] 冷蔵庫にプリンがある。

また、「ふつうの話し方」は多くの言いよどみやつかえを含むはずだが、例えばつかえにも「自然なつかえ方」がある。とぎれたり戻ったり延ばしたりする様々なつかえ方の中で、突如出現した「どくろ仮面」に驚愕のあまりつかえる場合には、下の中でaの「とぎれ型語頭戻り方式」のつかえしか自然に感じられない(19)。²

- (2.7) a. ど、どくろかめん (とぎれ型語頭戻り方式)
 b. ど、くろかめん (とぎれ型続行方式)
 c. どーどくろかめん (延伸型語頭戻り方式)
 d. どーくろかめん (延伸型続行方式)

日本語で、存在場所に後続する格助詞は存在主体がモノの場合には「に」、デキゴトの場合には「で」と言われる(38)。しかし、この使い分けは知識か体験かの違いによっても生じる(40)。

- (2.24) X: 四色ボールペンみたいな便利なものは、日本にしか無いでしょうね。
 Y: a. え、四色ボールペン、北京のイトーヨーカドーにありますよ。
 b. え、四色ボールペン、北京のイトーヨーカドーでありますよ。

² ただし、これについては次のような混ぜっ返しをしてみたくなる。どくろ仮面が想像を超えるような存在感やタイミングで現れ、ほとんど人事不省になるくらいにビックリしてしまった人は、「どーくろ、かめ、かめん」のような“みっともないつかえ方”をしてもいいのではないかと。言い換えれば、評者には、「ど、どくろかめん」というつかえ方が、まだ“つかえ方の規範”のような(もしかすると役割語的な)ものを保っているように感じられる。

体験を語る場合であれば、bのような“[存在場所]で+ある（現在時）”の発話もあり得るだろう。つまり、知識を述べるときと体験を述べるときでは一部文法が異なっており、体験においては状態がデキゴト化していると考えられる（41）。

「ふつうの話し方」には、およそ「伝達」という観点からすると無意味になってしまう無意味でない発話も多く存在する。その1つが「ユニゾン」と呼ばれる同時発話の一種で、相手と同じ言葉を相手と同時に発してしまう現象、ないしは相手の言いそうな言葉を察知し相手の言葉にかぶせて発話する現象である。相手の言葉との同一性と発話の同時性を特徴とする以上、情報伝達的な価値はユニゾンにはない。グライスの言い方をすれば、ユニゾンは典型的な量の格律違反と言うしかない。にもかかわらず人がユニゾンをある種の“稀有なもの”として扱うのは、それが「言葉を重ね合わせることによって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致」だからである（104）。

2.2. 「あからさまにやってみせる」という発話観

以下、3章以降で検討される発話観と論じられる現象を見ながら論点を確認してゆく。まず、3章で批判的に検討されるのは、コミュニケーションの前提として自明とも思われる「伝達」の概念である。それを採用しない根拠として、またそれへのいわば対案として、著者は「発話の『権利』という見立て」を置く。発話の「権利」というと、「発言権（floor）の保持や移行を考察対象とする会話分析が思い起こされるが、本書で採用される「権利」は、ある場面である特定の言葉を言うこと、ある特定の話し方をするものの「権利」である。これは本書において積極的に提案される最大の概念と言ってよい。

何かを発話する人は抽象的な存在ではあり得ない。発話者は必ず何らかの立場を持った人物である。本書ではたとえば、権利の異なる立場として「伝達者」と「責任者」とが分けられる（「伝達者」とは少しわかりにくいだが、“自身で判断をせずに伝達だけをする人”と考えればよい）。一方、「責任者」は“自身の判断を言葉にする人”である。助動詞「た」の用法として「発見」「知識修正」「思い出し」といったものを取り上げるなら、この2人は権利が異なっており、「責任者」はそれらを口にする権利を持っているが「伝達者」は持っていない。また、発話の内容よりは話し方に近くなるが、空気すすり（スーやシーのような吸気音）や「えーと」のようなフィラーについても、「責任者」にはする／言う権利があるが「伝達者」にはない。

「発見」の「た」の例を挙げよう。なぜか車がどうしても動かずにあれこれ試したり確認していたとき、じつは運転者がブレーキを踏んでいたとする。そのとき、運転者は次のaでもbでも言うことができるが、後部座席にいる子供がbを言うのはおかしい（82-84）。

(3.5) a. あ、ブレーキ踏んでる。

b. あ、ブレーキ踏んでた。

aの「あ、プレーキ踏んでる」なら、観察者は誰でも言うことができるが、「発見」の「た」を言うことができるのは「責任者」である運転者に限られる。同様にして、命題の「た」やりきみ発話といったものも、「体験者」だけが特権的に権利を有している。

こうした「権利」概念は、それを持ったものがそれを「あからさまにやってみせる」ことができるという発話観を導く。フィラー「えーと」によって「あからさまに検討してみせる」発話や(142)、同じくフィラー「さー」によって「あからさまにダメ元で(検討)してみせる」ことなど、状況によっては丁寧さ(ポライトネス)と結びつく(145)。反対に、「おはようございます」と挨拶されたときに、「はい」という感動詞を付けて返すことは、生徒に向かって教師が言うのはよいが、教師に向かって生徒が言うと失礼(インポライトネス)になる(125)。

(3.52) 小学生： おはようございます。

教員： a. おはよう。
b. はい、おはよう。

(3.53) 教員： おはよう。

小学生： a. おはようございます。
b.??はい、おはようございます。

このように「権利」概念を拡張し、特定の言葉や言い方にまで適用できるものとして取り入れることは、これまでの言語学にはなかった重層性をコミュニケーションに読み込むことを可能にするだろう。本書の白眉と言っているのではあるまいか。

2.3. 身体的な発話観

続く4章では、コミュニケーションの前提としての「意図」が検討に付される。著者が問題とするのは、意図を前提とするコミュニケーション観からは、目的論的な発話観や道具論的な言語観が導かれてしまうことである(162)。ところが、そうしたコミュニケーション観は、たとえば話し言葉の「誤用不可能性」を説明することができない(165)。

これは意表を突かれるような面白い指摘だろう。とりたてて意図もなく発せられた言葉が相手を動かす力をもってしてしまうといったことなら、前提としての「意図」に対する反論として想像しやすいところである。しかしそれは、話し手に意図があったかどうか聞き手にはわからないから、聞き手が意図を読み込んでしまうことは避けがたいのだと反駁されてしまうかもしれない。他方、母語話者に間違いようなないものがあるとしたら、それらについてそのつどの意図に基いて選択されていると言うことはいかにも牽強附会であり、つまりはより強力な論拠となろう。挙げられる具体例は、文末の上昇調や下降調のイントネーションや(166)、何か倒れるところを目撃している人が言う、「あーっ(倒れる〜!）」のような瞬時的・反射的な発話である(169)。たしかに、母語話者がそれらを問

違える場面に遭遇することはあまりできそうにない。

もう1つ、著者が紙数を割いて論じるのは、「キャラ（キャラクター）」である。「キャラ」とは、生活の様々なコミュニケーション場における、習慣化した人のふるまいの類型と云えばよかろうか。ある場所では「まじめキャラ」でも別の場所では「癒やしキャラ」だったり「姉御キャラ」だったりするように、「スタイル以上、人格未満」（185）の安定性を特徴とする。「スタイル」はそのつどの「意図」や「目的」に応じて着脱されるが、「キャラ」はある場所に入った自分がいつのまにか“なってしまう”性格のようなものである。それゆえ、自分が持つキャラごとに人は異なった話し方をし、異なったコミュニケーションをすることになるが、その切り替わりを「意図」に基づいたものと言うことはできないだろうと著者は論じる（207）。

たしかに、「意図」というのは、グライスの会話の推意のように「個別的な（particularized）」ものと見たときに最もしっくりくる。そうでなく、染み付いてしまった身のこなしのようなものならば、むしろ身体的な発話観によく似合う。かくして著者は、「必ずしも意図に基づかない（つまり意図的な発話も意図的でない発話もコミュニケーションの発話として認める）発話観」を提案する（220）。それは、発話するという人のふるまいを、「状況と結びついて柔軟に対応し変化する」というアフォーダンス的な面においてとらえようとする提案だろう（221）。

「キャラ」と関連する現象として、「役割語」にも言及されている。「博士語」や「お姫様語」といった役割語は日本語ではかなりなじみ深いものと言うことができる。自分が役割語を使う場面というのを想像してみたとき、それはある人物像を演じる「意図」に基づくのではないかと疑問を持つ向きもあるかもしれない。たしかに、無意識のうちに「博士語」を使うという想定はあまり一般的ではないかもしれない。しかし、おそらく著者が言いたいのは、そこで起こっているのは個々の発話に対する「意図」というよりも、「博士」という人物像への“モードチェンジ”のようなことであって、それはやはり、キャラよりはスタイルに近いとはいえ、一回一回の意図を超えた一種の身のこなしのようなものだということだろう。

3. 本書のコミュニケーション観

3.1. 「暮らし」のコミュニケーション

5章、6章と進むにつれ、より根源的なコミュニケーションの成立要件が論点となってゆく。言語の、という限定がかかる以前の、そもそもコミュニケーションとはどのような誰がどのように何をすることであるか？という問いと著者は正面から向き合おうとする。5章で問われるのは、ケンドンが言うような、「コミュニケーション」とは「他者と共在している際に起こるあらゆる行動」であるとの命題であり（241）、6章では、コミュニケー

ションとは行動か?という問いが検討される(303)。

さて、どんな答えが出されただろうか? 「共在」は、「相手からの影響を意識し合うこと」を含んだ「インタラクション」と改めるべきであるとされる。実際に「共在」している必要はなく、「当事者間で共在が了解されている」という当事者たちの確信が要件となる(294)。「行動」については、まず、コミュニケーションが成立してもしなくても、コミュニケーションの行動は行動として成り立っているから、コミュニケーションが行動であると規定することはできない(303)。他方で、コミュニケーションには必ず「状況」があり、その状況のもとでの「意識のし合いを含むインタラクション」が必要である。突き詰めたらそれは何かと言えば、「つまり暮らしになる」(307)。これが答えである。

2点補足する。まず「インタラクション」について。著書は「向かい合う2台の大砲の相互砲撃」の例を引き合いに出す。向かい合う大砲が互いに向けて砲撃することは「インタラクション」であるか? それだけでは否である。「インタラクション」と言えるためには、「それら〔=砲撃〕の影響どうしの影響のし合い」が必要であり(242)、先の規定に「影響を意識し合うこと」とあった所以である。もう1点は「当事者間の了解」に関することで、当事者間の相互了解については、クラークとマーシャルによる「相互知識のパラドクス」の問題、すなわち、「相手が了解していることを了解していることを相手も了解していることを…」という「無限後退」ないし「無限遡及(infinite regress)」に陥ってしまう困難が知られている(277, 279-280)。しかし、おそらく著者は、現実のコミュニケーションにおいて、それは擬似問題だと考えている。現実の問題としては、そうであるかどうかの問題よりも、そうだと思うかどうかの問題であるから。

本書は『…言語的接近』の書であるから、言語の問題としてそれらがどのように現れるかももちろん検討される。当事者間の了解の確信については、副詞「やっぱり」の例が挙げられる。たとえば、競馬である駄馬が勝つと仲間とともに確信して大金を賭けたが別の馬が勝ったときに、普通の調子で次のbのように言うのはおかしい(291)。

(5.44) b.?? やっぱり負けちゃったなあ、あの馬。

c. [心底から意気阻喪して悲嘆に暮れる] やっぱり負けちゃったなあ、あの馬。

「やっぱり」の使用は、「あの馬はダメかもしれない」との考えが当事者間で了解されている(公然と述べてよい)のでなければ不自然である。一方、同じ状況に対して、「駄馬」と十分認識した上で大金を賭けるのであれば、自分たちはどれだけ勝つことを確信していたとしても、「あの馬は負ける」と考えていた多くの人がいたはずであり、それゆえ、負けてしまったときにその多数の考えに屈服してcのように言うなら自然さが高い。bの自然さが低いのもcの自然さが高いのも、どちらも当事者間の相互了解を反映しており、こうしたあり方で当事者間の了解は言語使用においても生きていると言える。

3.2. コミュニケーションの自然誌

著者の到達した答えが「暮らし」であることは上で述べた。本書を読んできて、「コミュニケーションは、…、つまり暮らしになる」との提案を見たときに(307)、軽い衝撃を受ける人もいないのではないかと思われた(評者自身がそうだったから)。もちろん、ただいきなり「暮らし」と言っているのではなく、これまでの議論を踏まえて、「状況」の中での「相互了解」と「インタラクション」を含む場というものを考えたとき、それは私たちが日々送っている「暮らし」にほかならないのではないかと著者は提案している。そうであれば、読者の受ける衝撃も、いつのまにそこまで連れてこられてしまったのかという思いであると言うべきだろう。

それにしても「暮らし」では、対象としてあまりに全面的にすぎるのではないかとの感じ方もあろう。しかしこれは、「コミュニケーションの自然誌」というパースペクティブで眺めたときに、そこに行き着かざるを得ない認識という意味での答えだったのではないかと評者には思われた。その名も『コミュニケーションの自然誌』という500ページ近い論文集がある(谷編1997)。寄稿者はまことに学際的で、編者の谷は社会人類学、ほかにも人類学、霊長類学、人間行動学などの研究者が並ぶのを見ると、コミュニケーションとは多分に身体的なものであり、コミュニケーションの研究にとって「言語学」はその一部にすぎないことを感じずにはいられない。言語研究者の寄稿者には会話分析の申田秀也もおり、そして定延もその1人である。その巻頭に置かれた基調とも言える論文は、倫理学の水谷雅彦による、情報の伝達(復元)モデルとしてのコードモデル批判だった(水谷1997)。

状況の中での相互了解を踏まえたインタラクションという条件は、程度の差こそあれ霊長類にも認められるだろう。そのような広がりの中でとらえようとするのが「コミュニケーションの自然誌」であるとすれば、「ふつうの話し方」とは多分に身体的な身のこなしであって、人びとのインタラクション自体が人びとの暮らしの部分である、という像が見えてくるのは必定とも言えよう。あとがきに書かれているが(325)、定延がずっと出席していたという3つの研究会のうち、この「コミュニケーションの自然誌」研究会と故・杉藤美代子主宰の「音声文法研究会」で得た問いに対して、20年の時を経て提出された著者の答えが本書であると考えたい。「暮らし」という言葉が本書の読者に与える力は、言語学が「暮らし」から乖離することに私たち(言語研究者)が少し鈍感になりすぎていることへの警告として受け取っておきたい。

4. 言語学(語用論)が定延理論から得られるもの

「コミュニケーションの自然誌」パースペクティブに明らかなように、定延理論は人類学や非言語コミュニケーション論、あるいは人工知能論といった領域や方法論との親和性

を強く有している。ではそれを、言語学内部から見たときに、定延理論は言語学をどこへ連れていってくれるだろうか？

人と人がともにしていること（インタラクション）をとにかく観察するところから出発するのが会話分析なのだとする、現在の言語学周辺で定延理論と最も親和的なのは2.2でも触れた会話分析であるように思われる。定延理論が言語学に欠落していると批判する最たるものは、インタラクションをインタラクションたらしめる「相互性」なのではないだろうか？同様の批判に基づいて現れてきたかに思われるかもしれない関連性理論でさえ、話し手ではなく聞き手の推論を理論化するべきだと主張しているにすぎないとも言える。そうではなくて、状況に対する相互理解に基づいたインタラクションがコミュニケーションなのだとすれば、「コミュニケーションは複数の人間で出来上がっている」と言わなければならないだろう。「一人では完結してなくて、全体で一つ、という感じ」であると（定延 2016 の講演における発言）。そうした協同性をとらえる手法として、会話分析の根底にある考え方は定延理論にも通じるように思われる。

「ターン・テーク」の対象となる「フロア」の訳語「発言権」にも表れているように、会話分析が扱う対象は一種の「権利」である。³ 言語学の中で「権利」が問題になるのは、社会言語学における「言語権」を別とすれば、ほかには見当たらない。そのように考えれば、“誰が話してよいか？”を問題にする会話分析をさらに進めて、“誰が何を・どのように言ってよいか”までを考察対象とする定延理論は、会話分析的な「権利」を発言の内容や話し方にまで拡張しようとするディシプリンの青写真として見ることができる。そしてそのように見たときに現在の言語学の地平と最もよく結び付けることができるのではないかと思われた。

評者はポライトネスなど対人関係に関わりの深い現象を研究する者だが、インポライトネスの議論など、定延理論によって説明することが可能であるようにも思われてくる。というのは、聞き手が不快に思うときの原因が、「あんたに言われる筋合いはない」ということであるケースが一定数存在するからである。たとえば、おこぼれで何かの恩恵に与った人が、「こんなに...してくれて、ありがとう！」と言ったら、「あんたにしたんじゃない！」と怒られてしまうだろう。そのように言葉を選びまた使う「権利」がないのにするのは越権である、との感覚について、人はとても鋭敏なものである。敬語などの話になると、なぜたかがそんなことでそんなに怒れるのか？と言いたくなるほど皆じつによく怒るけれども、そうした現象を、ある敬語を言われる「権利」を持った自分や、ある敬語を言う「権利」がない人に対する不快感といった、力の感覚によって説明するビジョンも十分

³ 『コミュニケーションの自然誌』に収められた論文において申田は、ジェファーソンに触れながら、ユニゾンする「権限 (entitlement)」に言及していた (申田 1997: 261)。

成り立ちそうに思えてくる。

5. 「言語観の批判」について

冒頭で見たように、本書の目次には「Xを前提とするコミュニケーション観の批判的検討」という章タイトルがずらりと並ぶ。もしかすると、それを見て怯んでしまう読者もいるかもしれない。しかし、いま見てきたように、本書は人びとがふつうにしているふつうの話し方を理論的にとらえるための提案に満ちている。発話の権利のほかにも、体験の述べ方や、人が半ば無意識に取り替えているキャラの話し方など、状況のもとでの意識のし合いを含むインタラクションの文法を書くために必要な道具が満載されている。それらを総合すれば、“暮らしのことばの文法”になるはずだろう。

読んでくればそのことは十二分に了解されるが、とはいえ目次が「批判」であることもたしかで、本文中での書き方も、そうした現象や話し方が「伝達／意図／共在／行動のコミュニケーション観」では説明できないことが力説される格好になっている。そしてまた、説明できないことを語る言葉のロジックがどこか同型的なものになってしまうこともまた避けがたいと言える。もしかすると、読者がその部分に少しじれったさを感じるころもあるかもしれない。

たとえば本書を、言葉に対する「権利」を前面に出しながら、各章で展開された議論によって「ふつうの話し方の文法」を考察するような書物として書くことも、あるいは可能だったかもしれないと想像する。しかし、想像するや、すぐに答えが返ってきそうにも思われる。それらはすでに、『ささやく恋人、りきむレポーター』や『煩惱の文法』や『日本語社会のぞきキャラくり』で書いているのだと。『煩惱の...』など、副題にあるとおり、「体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話」であるから、そうした「ふつうの話し方の文法」については既刊書を見てくれということだろう。

いずれにせよ、定延によって投げられたこの重い一石にどう答えてゆくか、言語学研究者、とりわけ語用論研究者に共通の課題となることは間違いないと思う。

参考文献

- Jakobson, R. 1960. "Closing Statement: Linguistics and Poetics." In T. Sebeok (ed.) *Style in Language*. New York and London: The MIT Press.
- 串田秀也. 1997. 「ユニゾンにおける伝達と交感—会話における『著作権』の記述をめざして—」、谷 泰 (編). 1997. 249-294.
- 水谷雅彦. 1997. 「伝達・対話・会話」、谷 泰 (編). 1997. 5-30.
- 定延利之. 2005. 『ささやく恋人、りきむレポーター』(もっと知りたい!日本語) 東京: 岩波書店.

- 定延利之. 2008. 『煩惱の文法』(ちくま新書) 東京: 筑摩書房. (2016年12月、凡人社より増補版復刊)
- 定延利之. 2011. 『日本語社会のぞきキャラくり』 東京: 三省堂.
- 定延利之. 2016. 「発話の権利から見た伝達論的コミュニケーション観の問題」 第4回京都語用論コロキウムにおける講演. 2016年9月25日. 京都工芸繊維大学.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 滝浦真人. 2008. 『ポライトネス入門』 東京: 研究社.
- 谷 泰 (編). 1997. 『コミュニケーションの自然誌』 東京: 新曜社.

日本語用論学会規約

第1章 総則

第1条 本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。

第2条 本会は語用論ならびに関連諸分野の研究に寄与することを目的とする。

第3条 本会は次の事業を行う。

1. 大会その他の研究集会。
2. 機関誌の発行。
3. その他必要な事業。

第4条 本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第5条 運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第2章 会員

第6条 本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。

第7条 会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人及び団体とする。

第8条 会員は諸種の会合及び事業の通知を受け、事業に参加することができる。また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第3章 役員

第9条 本会に次の役員を置く。任期は2年とし、再選を妨げない。

会長 1名

副会長 1名

事務局長 1名

運営委員 若干名

会計監査委員 1名

また、顧問、理事を置くことがある。理事は、会長、副会長経験者、又は65歳以上の運営委員で原則10年以上運営委員を務めたものとし、運営委員を兼ねる。運営委員は4月1日現在で70歳以下とする。

第10条 運営委員会は、会長、副会長、事務局長および運営委員から構成される。

第11条 会長、副会長、および事務局長は運営委員会で選出され、運営委員は会員より

選出される。

第12条 運営委員会は次の任務を遂行する。

1. 機関誌および会報誌等の編集・刊行にかかわる事項の決定。
2. 大会および研究集会等にかかわる事項の決定。
3. 予算案および収支決算案の作成。
4. その他運営委員会が必要と認めた事項。

第13条 運営委員会の中に次の部と委員を置く。各部の委員は運営委員会の議を経て会長が委嘱し、兼任することができる。各部は業務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。

1. 執行部
2. 編集部
3. 大会運営部
4. 国際・事業部
5. 広報部

第14条 各部の業務を調整するために代表連絡会議を開く。代表連絡会議は、会長、副会長、事務局長、編集委員長、大会運営委員長、事業委員長、広報委員長から構成される。

第15条 本会の会則は、会員総会で承認を得るものとする。

第16条 会員の中から会計監査委員を1名選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章 会議

第17条 定例会員総会は、年1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第18条 定例運営委員会は、必要に応じて、年1回以上招集される。

第5章 会計

第19条 本会の運営経費は、会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第20条 事務局は、予算案および収支決算書を作成し、運営委員会の議を経て、会員総会で承認を得るものとする。ただし、収支決算書は会計監査委員の監査を受けなければならない。

第21条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 事務局

第22条 事務局を事務局長もしくは運営委員の所属する大学に置く。

第7章 各部に関する細則

1. 執行部は、会長、副会長、事務局長、事務局長補佐、会計、会計補佐から構成され、対外折衝、運営委員会・総会の企画・運営、会員名簿の管理、会費の徴収、会計、機関誌・大会予稿集等の販売、会員への連絡など、学会の運営にかかわる諸々の業務を担当する。事務局は、業務を遂行するために、運営委員会の承認を得て有給の事務助手を置くことができる。
2. 編集部は、委員長、副委員長、委員から構成され、機関誌『語用論研究』の編集と刊行に関わる業務を担当する。
3. 大会運営部は、委員長、副委員長、委員から構成され、委員長の元に以下の4部門に分かれて業務を担当する。

大会企画担当	大会プログラムの計画と作成。研究発表、シンポジウム、ワークショップ、講演など、大会全般の大枠を企画・提案すると共に、発表者決定後に司会割振を含む詳細を決定する。
大会発表担当	応募の受付・管理、査読割り当てと評価の集計と報告の他、大会発表者決定後のアブストラクト集などの作成と大会に必要な、種々の印刷物作成の業務を行う。
大会実行担当	大会開催校委員と協力して、会場の部屋割、アルバイトの手配、当日の受付運営など、大会の会場運営に関わる業務を行う。
大会プロシーディングス担当	当該年度の発表者への原稿執筆依頼、原稿の受付、編集・入稿など、その刊行に関わる業務を行う。

4. 国際・事業部は、委員長、副委員長、委員から構成され、講演会、セミナー等の企画、運営、実行にあたる。
5. 広報部は、委員長、副委員長、委員から構成され、メーリングリスト・ホームページ等による連絡、Newsletterの編集と発行に関わる業務を担当する。

第8章 会長選出に関する細則

1. この細則は、会則第9条と第11条のうち、会長の選出方法と任期について定める。
2. 会長は、会員の中から、就任時に65歳以下のものを運営委員の投票によって選出する。投票は郵送による無記名とする。
3. 投票の結果、過半数の得票を得た者を会長とする。過半数を得た者がいない場合、得票上位者2名についての決選投票を行う。尚、得票数が同数の場合は、最年長者を会長とする。
4. 前条によって決定された会長は、改選の前年度の定例総会において承認を得るものとする。
5. 会長の任期は2年とし、2期までとする。
6. 会長選挙管理委員は、現会長が運営委員会の中から必要数を選出する。

附則： この規約は、平成17年10月5日から実施する。平成10年12月5日（制定）
平成15年12月6日（改正）
平成17年10月5日（改正）
平成24年12月1日（改正）

『語用論研究』投稿規定・スタイルシート

I. 投稿について

1. 投稿資格

- a. 投稿は会員に限るものとする。
- b. 著者が複数いる場合、少なくとも筆頭著者は会員でなければならない。
(会員でない場合は、応募に先立って入会手続きをとること。会員資格の不備や未納の会費があった場合は、査読プロセスに入らないか、または査読プロセスを停止する。)

2. 投稿原稿の種類

受け付ける原稿の種類は以下の3区分とする。(投稿の際に、原稿の種類を指定すること。但し、審査後に編集委員会が種類の変更を求めることがある。)

- a. 「研究論文」(research paper)
独創性と新規性があり、語用論研究の進展に貢献する実証的あるいは理論的研究。
- b. 「研究ノート」(research note)
今後の展開を念頭に置いた萌芽的論考や、当該分野の研究を活性化させる契機となりうる知見をまとめたもの。
- c. 「ディスカッション」(discussion note)
本学会の刊行物である『語用論研究』や『大会論文集』をはじめ、語用論研究と関連する分野の学会誌等に掲載された論文、研究ノート等に関する学術的な所見・反論等。

3. 二重発表・二重投稿の禁止

- a. 投稿論文は未発表の論文であること。ただし、すでに口頭で発表したものなどに相応の修正・加筆を加えた原稿は、審査の対象となる。
- b. 二重投稿は禁止とする。また、同一号に筆頭著者として複数の論文を投稿することや、同じ年度の日本語用論学会大会で発表を予定している発表前の内容を投稿することは認めない。

4. 使用言語

- a. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
- b. 母語でない言語で書かれた原稿(および部分)は、事前に相応のネイティブスピーカーによる誤り等のチェックを受けること。また、大学院生などで指導教員がいる場合は、事前に内容や表現の十分な指導を受けること。

5. 投稿期限

- a. 当該年度号の投稿期限は毎年4月上旬とする。
- b. 詳細は学会ウェブサイト上で案内する。

6. 送付物・送付方法

- a. (！現在、投稿システムを含むウェブサイトの更新を準備中です。S/P19への投稿については、ウェブページでの案内を参照してください。)
- b. 送付方法と送付先はウェブサイト上で案内するので、それに従って提出すること。

7. 採否決定

採否決定は投稿期限から5ヶ月以内を目途に行う。

8. 著者校正

- a. 執筆者による校正は初校のみとする。
- b. 校正の際、内容の変更を伴う原稿の加除は認めない。

9. 抜き刷り

抜き刷りを希望する場合、費用は執筆者の負担とする。

II. フォーマットについて

1. 用紙・分量・書式など

- a. 原稿はすべてA4版の用紙を使用する。
- b. 用紙には、上下各3cm、左右各2.5cmの余白をとる。
- c. 書式はすべて横書きとし、日本語の場合は1行38文字、1ページ32行、英語の場合は12ptフォントで1行70ストローク、1ページ32行とする。
- d. 原稿枚数は、注、参考文献を含めて、以下の長さを超えないものとする。
「研究論文」は20ページ以内、「研究ノート」は10ページ以内、「ディスカッション」は5ページ以内。
(査読の結果、修正後採用となった場合には、修正による1割程度の増ページを認める。)

2. レイアウト

- a. 1ページ目はタイトルの後1行アケで氏名欄、その後2行アケでアブストラクトと続ける。
- b. アブストラクトは、本文が日本語の場合は英語で、本文が英語の場合は日本語または英語で書く。分量は、ともに8行以内、英語の場合1行70ストローク、約100ワード。
(但し、「ディスカッション」ではアブストラクト不要。)
- c. アブストラクトの後、さらに2行アケでキーワード、そのあと2行アケで本文を続

ける。

(但し、「ディスカッション」ではキーワード不要。)

- d. 各節の前は1行アケる。
- e. 見出しのサブセクション番号は、1.1. のように、数字の後にピリオドを置く。
- f. セクションの「はじめに」や「序論」は、0. でなく 1. で始める。
- g. 例文の前後は1行アケる。
- h. 採否決定前の投稿論文本体には、氏名、謝辞を書かない。

3. 注

- a. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
- b. 注番号は、1, 2, 3 のように、括弧を用いない数字だけとする。

4. 参考文献

- a. 参考文献は論文の最後に置く。用語は「参考文献」とし、「参考文献」「引用文献」という言い方は採らない。
- b. 参考文献は本文中で引用・言及したもののみとする。
- c. 英語の文献と日本語の文献を分けずに混在させて、アルファベット順に並べること。
- d. 共著者の表記について、英文では & ではなく and、日本語では・(なかぐる) とする。
- e. 雑誌については日本語、英語とも、巻数、号数、ページ数を明記する。
- f. 英語の文献名で、語頭については、内容語は大文字、機能語は小文字とする。第1語の語頭のみ大文字であとは小文字という形式はとらない(下記 h の例参照)。
- g. 採否決定前の投稿論文に投稿者本人の著作を多数挙げて本人と分かるような書き方はしない(下記 i を参照)。
- h. 参考文献の書式は以下の例にならう。

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hooper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givon (ed.) *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61(1), 121-174.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学—日本語用論—』東京：三省堂.

無藤 隆. 1983. 「言語とコミュニケーション」、坂本 昂(編)『思考・知能・言語』(現代基礎心理学)、7、161-189、東京：東京大学出版会.

野崎昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」、『言語』24(2)、62-69.

Watts, R. J. 2005. "Linguistic Politeness Research: *Quo vadis?*" In Watts, R.J., S.

Ide and K. Ehlich (eds.) *Politeness in Language: Studies in Its History, Theory and Practice* (2nd edition), xi–xlvi. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.

- i. 投稿時における投稿者本人の論文等は次のような表記とし、リストの最後に載せる。
(名前を「投稿者」として発行年のみを記し、タイトル等は伏せる。)

投稿者. 2013.

投稿者. 2016.

2016年11月15日 以下の諸点を修正・変更

(規定の名称、項目立て、英語版との対応

「投稿資格」「二重発表・二重投稿の禁止」

「使用言語」「投稿期限」「採否決定」

「用紙・分量・書式など」「参考文献」)

2016年3月6日 投稿先の変更

2014年4月22日 投稿先の変更

2014年3月8日 最終原稿の項目を削除

2014年3月6日 投稿先の変更

2013年3月4日 投稿先の変更

2011年12月3日 投稿方法の変更

2010年12月23日 投稿原稿の種類変更

2009年12月23日 参考文献項目修正

2008年9月29日 投稿締切変更

2008年5月3日 暫定版修正

2008年2月19日 暫定版

2007年1月7日改訂

Constitution of The Pragmatics Society of Japan

(Abbreviated Version)

Article I. Name and Purpose

1. This society shall be called the Pragmatics Society of Japan.
2. Its purpose shall be the advancement of pragmatics and related disciplines.
3. Activities:
PSJ shall
 - 1) organize annual conferences, and special lectures and talks;
 - 2) publish Studies in Pragmatics;
 - 3) carry out other relevant activities.

Article II. Membership

1. There shall be three categories of membership: regular, student, and institutional.
2. Any individual or institution in agreement with the purposes of the Society can obtain membership by paying dues.
3. All individual members shall be entitled to participate in events organized by the Society and to submit manuscripts for presentation at the Society's annual conference or for publication in the Society's Journal.

Article III. Officers

1. The Executive Committee of the Society shall consist of a President, a Vice-President, a Secretary-General and other officers.
2. The President shall serve for two years and serve as chair of the Executive Committee.
3. The President, Vice President, and Secretary-General shall be elected from among the members of the Executive Committee.

Article IV. Meetings

1. The Society shall hold an annual General Meeting.
2. The Executive Committee shall meet at least once a year.

Article V. Fiscal Policy

1. The Society shall be financed through membership fees and other donations. An outside audit shall be conducted annually.
2. The fiscal year shall start on April 1st and end on March 31st.

Article VI. The Secretariat and Other Committees

1. The Secretariat shall consist of a Secretary-General and one or more assistants. The Secretary-General is responsible for the overall management of the Society.

2. The Editorial Board is responsible for publication of the Society's journal.
3. The Conference Committee shall be responsible for reviewing conference abstracts, and for other matters related to conference planning and execution.
4. The Public Relations Committee shall be responsible for announcing information in the Newsletters and on the Society's web page.

Instructions for Authors of *Studies in Pragmatics (S/P)* and the Style Sheet of English Papers

I. Manuscripts

1. Qualification for acceptance of submissions
 - a. This journal only accepts contributions from members of the Society.
 - b. When there are two or more authors, at least the first author must be a member. Non-members are expected to apply for membership before they submit manuscripts. If there are flaws in membership qualification, or are in arrears of annual fees, the process of review will not commence or will be stopped.
2. Categories of submissions

Submissions in three categories will be considered (cf. below). Authors should specify a category at the time of submission. After reviewing the manuscript, the editorial committee may also request the author(s) to change the final categorization.

 - a. Research papers: Empirical or theoretical studies that make new or original contributions to the development of the field of pragmatics.
 - b. Research notes: Articles reporting on work still in the early stages of development, or intended to stimulate research in a particular area.
 - c. Discussion notes: Findings or critical comments responding to research papers or research notes that have appeared in *S/P*, *the Proceedings of the Society's Annual Meeting*, or in other publications related to the field of pragmatics.
3. Prohibition of repetitive publication and duplicate submission
 - a. Papers submitted to *S/P* must not have been published previously, except when they are revised versions of oral or poster presentations made in the past.
 - b. Submitted papers should not be under consideration for publication elsewhere (duplicate submission prohibited). Authors may submit only one manuscript as the first author at a time for consideration. Papers that will be presented at the annual convention may not be submitted.
4. Languages
 - a. As a general rule, papers should be written in English or Japanese.
 - b. For authors whose native language is not English, it is strongly advisable that, prior to submission, manuscripts be corrected and edited by a qualified native speaker of English. Graduate students should consult with a supervisor beforehand regarding the appropriateness of their manuscript.
5. Deadline
 - a. The deadline for submission is in early April of the given year.
 - b. Further details will be posted on the PSJ website.

6. Submissions

- a. (! At the moment, we are renewing our website including pages for submitting papers. Please see notices on the website when submitting to S/P 19.)
- b. Further details will be posted on the PSJ website.

7. Results

Submitted papers are refereed, and authors will be notified of the results within approximately five months.

8. Proofreading

- a. Authors are responsible for the first proofreading only.
- b. Corrections should be limited to typographical errors.

9. Offprints

Authors may purchase offprints of their articles at their own expense.

II. General Format

1. Paper size, volume and format

- a. All manuscripts should be submitted on A4 size paper.
- b. Leave margins of 2.5 cm (1 inch) on the right and left, and 3 cm at the top and bottom.
- c. Type in 12-point font, 70 strokes per line, 32 lines per page.
- d. Manuscripts should not exceed the following lengths, including notes and references: research papers, 20 pages; research notes, 10 pages; discussion notes, 5 pages.

If the result is ‘acceptable after revision’, the author may increase the volume of the paper by approximately 10% in order to make sufficient revisions.

2. Layout

- a. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author’s name, and author’s affiliation. The abstract itself should be preceded by two blank lines, and begin with the word ‘Abstract’ in the upper left corner.
- b. Abstracts of English papers may be written in Japanese or English, and should not be more than 8 lines in length (about 100 words in English).
- c. The abstract should be followed by two blank lines, followed by the body of text (no abstracts with discussion notes).
- d. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by ‘Keywords’ (no keywords with discussion notes).
- e. Each new section should be preceded by one blank line.
- f. Subsection numbers should be followed by a period (e.g. 1.1.)
- g. Introductions or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0.
- h. Examples should be preceded and followed by one blank line.
- i. Authors should not include their name(s) or acknowledgement when submitting manuscripts.

3. Footnotes

- a. Footnotes should appear at the end of the text, before the reference list.
- b. Notes should be indicated with Arabic numerals (1, 2, 3, 4) without parentheses.

4. References

- a. References should appear at the end of the paper.
- b. Cite only works quoted or referred to in the paper.
- c. Titles of books and articles originally written in Japanese should be transcribed in Roman letters and supplemented by English translations in brackets.
- d. The format for references (including the order of elements and punctuation) should be consistent with the following examples:

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hooper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón (ed.) *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213–241. New York: Academic Press.

Horn, L. R. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61(1), 121–174.

Koizumi, T. 1990. *Gengai no Gengogaku: Nihongogoyoron (Linguistics of Implied Meaning: Japanese Pragmatics)* Tokyo: Sanseido

Watts, R. J. 2005. "Linguistic Politeness Research: *Quo vadis?*" In Watts, R.J., S. Ide and K. Ehlich (eds.) *Politeness in Language: Studies in Its History, Theory and Practice* (2nd edition), xi–xlvi. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.

- e. Manuscripts must be written in such a manner that the authors cannot be identified. Books and articles by the same author(s) should be referenced in the style below at the end of the list, i.e. the author(s) should be cited only as 'Author(s)', along with the year of publication.

Author(s). 2013.

Author(s). 2016.

編集委員会より

今号は、投稿論文から3本、いずれも気鋭の研究者による論考が掲載されました。また、下関で行われた加藤会長の就任講演をいち早く論文形式で収録しています。

すでにご案内しましたが、次号から特集テーマが設定されることになりました。S/P19の特集テーマは「レトリックの語用論」です。もちろん、特集以外の投稿も通常どおり受け付けていますので、ふるってのご投稿をお待ちしております(4/14メ)。なお、投稿をお考えの大学院生の皆さんは、ぜひ投稿前に指導教員の指導を十分受けるようにしてください(自己流で採用レベルに達するのはなかなか難しいです)。

末筆になりましたが、今号では担当委員に加えて以下の方々が査読の労をとってくださいました。心より御礼申し上げます。

〈S/P18 外部査読委員〉(敬称略、姓のアルファベット順)

藤井洋子、深田智、秦かおり、早野薫、伊藤健人、甲田直美、黒田航、町田章、三浦優生、野田大志、小川典子、小野正樹、大石悦子、大津友美、佐治伸郎、柴崎礼士郎、椎名美智、Philip Spaelti、高梨克也、高嶋由布子、Donna Tatsuki、梶館尚武、山口征孝、山泉実、山岡政紀、横森大輔

また、第19回大会の研究発表については、運営委員に加えて以下の方々が審査に加わってくださいました。厚く御礼申し上げます。

〈第19回年次大会 外部審査委員〉(敬称略、姓のアルファベット順)

藤井洋子、後藤リサ、井門 亮、ウンサーシュッツ・ジャンカーラ、菊地浩平、甲田直美、牧原功、増田将伸、仁科浩美、小野正樹、澤田淳、渋谷良方、高梨博子、高梨克也、植野貴志子

(文責・編集委員長 滝浦真人)

語用論研究 第18号

Studies in Pragmatics No. 18 2016

Pragmatics Society of Japan <http://www.pragmatics.gr.jp>

President: Shigehiro Kato

Editor-in-Chief: Masato Takiura takiuramasato@gmail.com

編集人 日本語用論学会 編集委員会
(代表者) 滝浦真人

発行人 日本語用論学会 会長 加藤重広

〒606-0847 京都府京都市左京区下鴨南野々神町1
京都ノートルダム女子大学 人間文化学部
小山哲春 研究室内

2017年3月19日 第1版第1刷発行

発行所 株式会社 開拓社
KAITAKUSHA

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-5-2
電話 (03) 5842-8900 (代表)
振替 00160-8-39587
<http://www.kaitakusha.co.jp>

〈不思議〉に満ちたことばの世界(上)
〈不思議〉に満ちたことばの世界(下)

高見健一・行田 勇・大野英樹 編
英語や日本語など、ことばとその関連領域に見られる「不思議」な現象を、専門家 96名が結集し、平易に、分かりやすく解説した。誰もがことばの面白さや不思議さを満喫でき、ことばの世界を鳥瞰できる楽しい読み物となっている。

3月の新刊

音韻研究の新展開

窪菌晴夫教授還暦記念論文集
田中真一・ピンテール=ガーボル・小川晋史・儀利古幹雄・竹安 大 編
音韻論・音声学の第一線で活躍する研究者による論考を収録。音声研究の主要テーマを幅広く網羅する。

3月の新刊

ラネカーの(間)主観性とその展開

中村芳久・上原 聡 編/A5判 384頁 本体4600円
ラネカーの認知文法の subjectivity の概念と現象を座標軸に、認知文法自体の新たな展開を提案する。

コーパスからわかる
言語変化・変異と言語理論

小川芳樹・長野明子・菊地 朗 編/A5判 464頁 本体6400円
研究者27名が、コーパスとそれを用いた理論的研究の現状と課題を明らかにする。

日本語文法ハンドブック

言語理論と言語獲得の観点から
村杉恵子・斎藤 衛・宮本陽一・瀧田健介 編/A5判 496頁 本体4500円
10名が日本語の文法及び獲得に関する主要な研究テーマについて書き下ろした13章。

名著に学ぶこれからの英語教育と
教授法

中村 捷 編著/A5判 296頁 本体2900円
外山正一、岡倉由三郎、イエスペルセン、スウィートの著作を要約、解説した。

【一歩進める英語学習・研究ブックス】

英語の意味を極めるⅠ 名詞・形容詞・副詞 編

英語の意味を極めるⅡ 動詞・前置詞 編
友繁義典 著/四六判 240頁・248頁 本体1600円
類似表現の意味やニュアンスの違いの観察を通して、英語の理解を深め、発信力を増強する。

文法変化と言語理論

田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗 編/A5判 302頁 本体4600円
理論的英語史研究の拠点として幾多の研究者を生み出してきた名古屋大学英語学研究室の精鋭による論集。

統語論キーターム事典

Silvia Luraghi・Claudia Parodi 著/外池滋生 監訳/江頭浩樹・伊藤達也・中澤和夫・野村美由紀・野村忠央・大石正幸・大野真機・西前 明・鈴木泉子 訳/四六判 400頁 本体3800円
『語用論キーターム事典』『意味論キーターム事典』に続くコンパクト事典第3弾!

開拓社叢書⑳ 形式意味論入門

田中拓郎 著/A5判 248頁 本体2900円
形式意味論の基礎をやさしく解説。もうラムダ(λ)や論理式は怖くない!

現代音韻論の動向

日本音韻論学会20周年記念論文集
日本音韻論学会 編/B5判 240頁 本体3800円

開拓社叢書㉑

生成統語論入門 普遍文法の解明に向けて

阿部 潤 著/A5判 232頁 本体2800円

日英対照 文法と語彙への統合的

アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学
藤田耕司・西村義樹 編/A5判 488頁 本体6600円

続・現代意味解釈講義

澤田治美 著/A5判 432頁 本体4300円

開拓社 言語・文化選書

(四六判)

3月の新刊 65 Sherlock Holmes の英語
秋元実治 著/208頁 本体1900円
後期近代英語期(1700-1900/1950)の興味深い特徴を、Holmes 作品の中で見ていく。

3月の新刊 66 人生の意味論 価値評価をめぐる
河西良治 著/212頁 本体1900円
「名実の意味論」という視点から私たちの価値評価の仕組みをさぐる。

64 英語仮定法を洗い直す
中野清治 著/224頁 本体1900円

61 時間と言語を考える「時制」とはなにか
溝越 彰 著/240頁 本体1900円

63 機能・視点から考える 英語の
からくり 上山恭男 著/220頁 本体1900円

60 教育英語意味論への誘い
武田修一 著/224頁 本体1900円

62 認知と言語 日本語の世界・英語の世界
濱田英人 著/204頁 本体1900円

59 外国語音声の認知メカニズム
聴覚・視覚・触覚からの信号
中森蒼之 著/228頁 本体1900円

Pragmatics Society of Japan Current Officers

(as of February 28, 2017)

Special Advisors

Malcolm COULTHARD, Laurence HORN, Jacob MEY, Jef VERSHUEREN, Deirdre WILSON

Directors

Reiko HAYASHI, Takuo HAYASHI, Isao HIGASHIMORI, Susumu KUBO, Yoshihiro NISHIMITSU, Harumi SAWADA, Masa-aki YAMANASHI

Steering Committee

Nami ARIMITSU, Mark CAMPANA, Reiko HAYASHI, Takuo HAYASHI, Isao HIGASHIMORI, Kaoru HORIE, Shugo HOTTA, Risako IDE, Ipei INOUE, Toshiyuki KANAMARU, Shigehiro KATO, Hiroaki KITANO, Tetsuharu KOYAMA, Susumu KUBO, Tomoko MATSUI, Yuichi MORI, Takuro MORIYAMA, Yukiko MORIYAMA, Kojiro NABESHIMA, Shun'ichiro NAGATOMO, Yoshinao NAJIMA, Koichi NISHIDA, Yoshihiro NISHIMITSU, Hajime NOZAWA, Masanori ODANI, Masashi OKAMOTO, Noriko ONODERA, Harumi SAWADA, Sachiko SHUDO, Mitsuyo SUZUKI, Sachiko TAKAGI, Masato TAKIURA, Hiroaki TANAKA, Eiichi YAMAMOTO, Masa-aki YAMANASHI, Masaki YAMAOKA, Akiko YOSHIMURA

Executive Division

President: Shigehiro KATO

Vice-President: Eiichi YAMAMOTO

Secretary-General: Tetsuharu KOYAMA

Assistant Secretary: (Treasurer) Shun'ichiro NAGATOMO

Editorial Division

Editor-in-Chief: Masato TAKIURA

Editorial Board: Mark CAMPANA, Tomoko MATSUI, Yuichi MORI, Yoshinao NAJIMA,

Noriko ONODERA, Sachiko SHUDO, Hiroaki TANAKA

Conference Division

Conference Committee Chair: Kojiro NABESHIMA

Conference Committee Vice-Chair: (Planning) Kaoru HORIE, Hiroaki KITANO; (Presentation) Toshiyuki KANAMARU, Hajime NOZAWA, Masashi OKAMOTO; (Execution) Ipei INOUE; (Proceedings) Sachiko SHUDO

Conference Committee: (Planning) Risako IDE, Masato TAKIURA, Akiko YOSHIMURA; (Presentation) Nami ARIMITSU, Yoshinao NAJIMA, Masanori ODANI; (Execution) Shugo HOTTA, Mitsuyo SUZUKI, Sachiko TAKAGI; (Proceedings) Risako IDE, Takuro MORIYAMA, Yukiko MORIYAMA

International Relations and Operations Division

International Relations and Operations Committee Chair: Koichi NISHIDA

International Relations and Operations Committee Vice-Chair: Noriko ONODERA

International Relations and Operations Committee: Tomoko MATSUI, Kojiro NABESHIMA, Hajime NOZAWA, Akiko YOSHIMURA

Public Relations Division

Public Relations Committee Chair: Masaki YAMAOKA

Public Relations Committee Vice-Chair: (Website) Masanori ODANI; (Newsletter) Shugo HOTTA, Mitsuyo SUZUKI

Public Relations Committee: Mark CAMPANA, Toshiyuki KANAMARU